

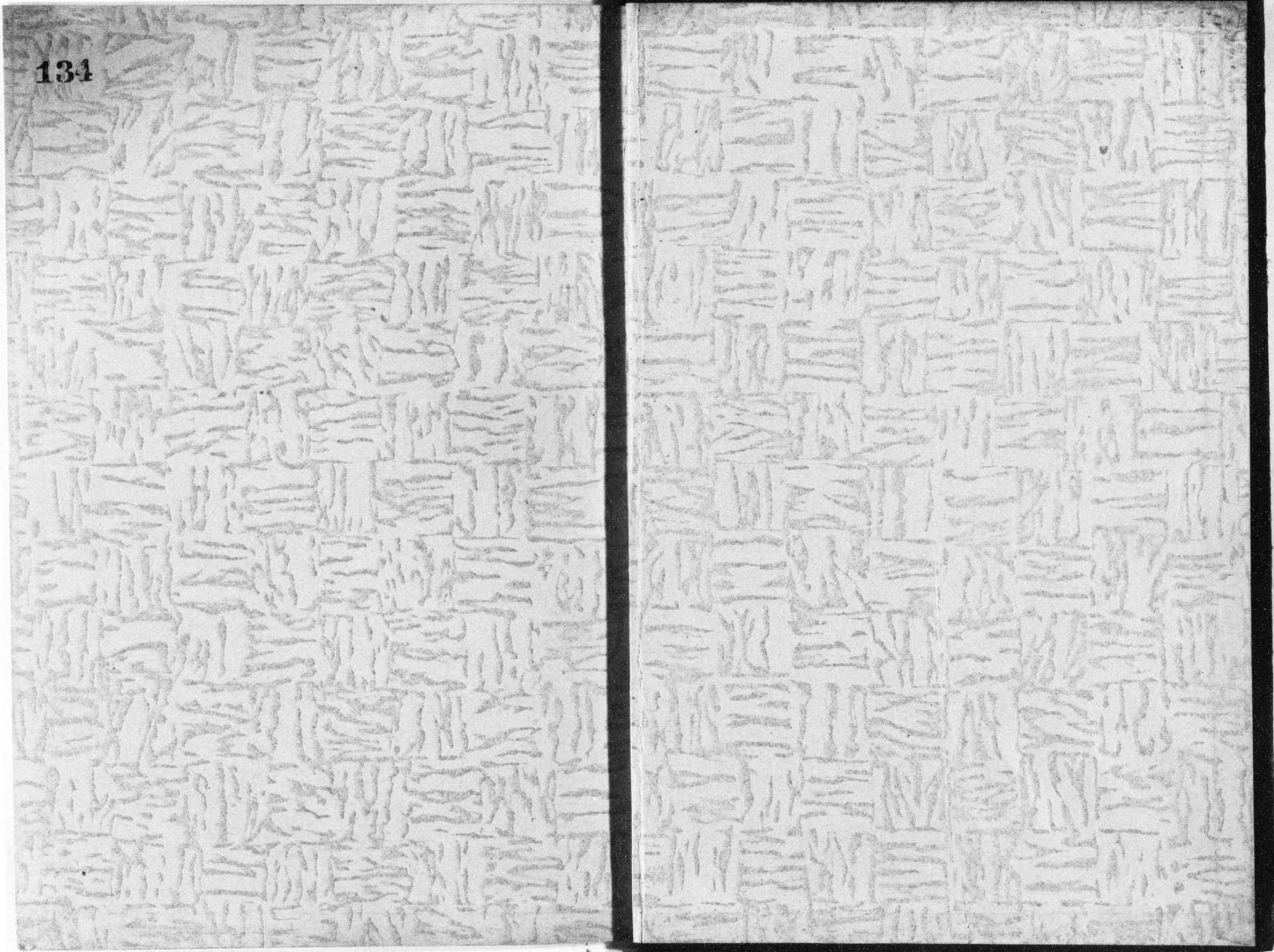
359
269

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25

始



134



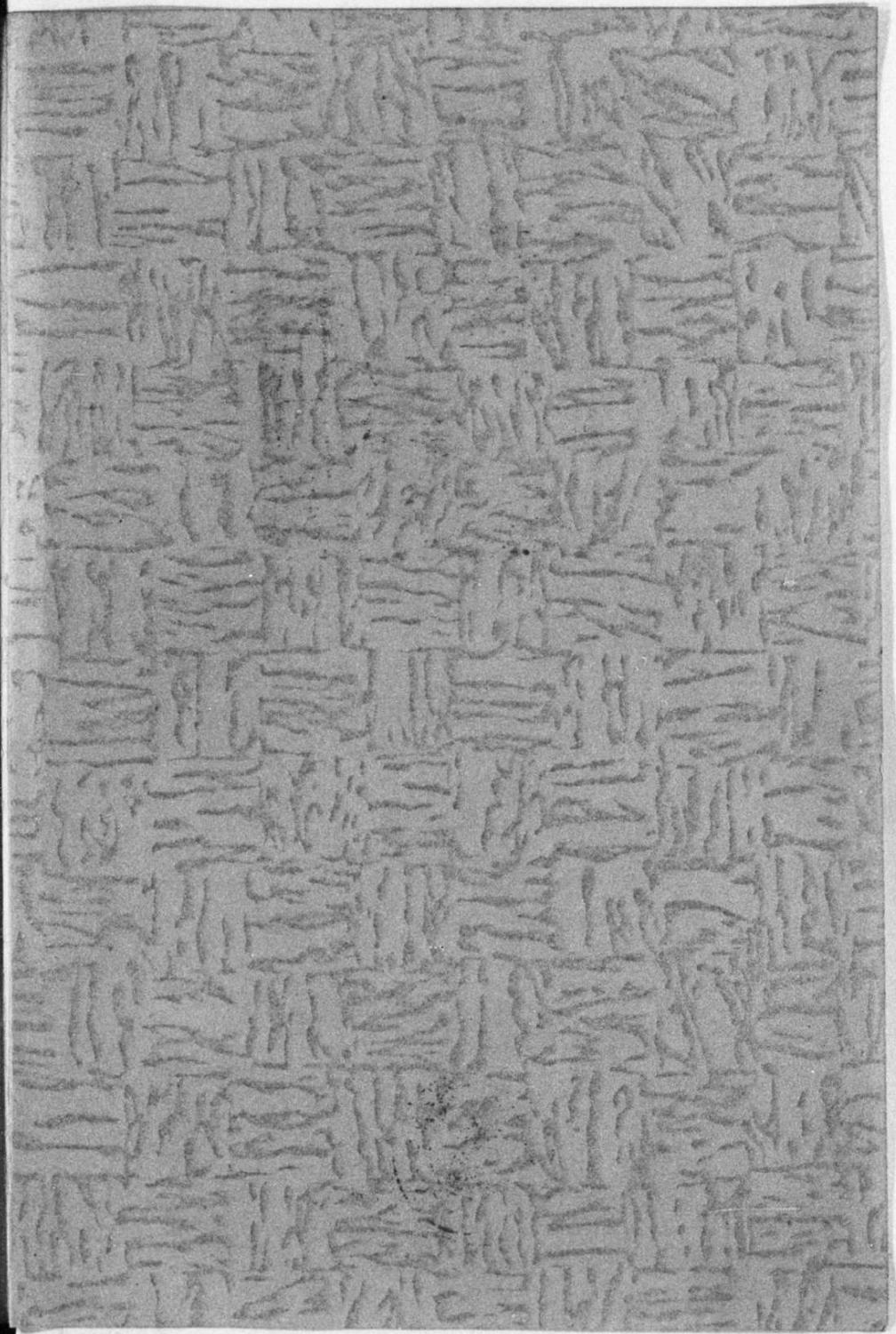
特208
799

文學博士 佛山 忽滑谷快天序
松崎 覺本著



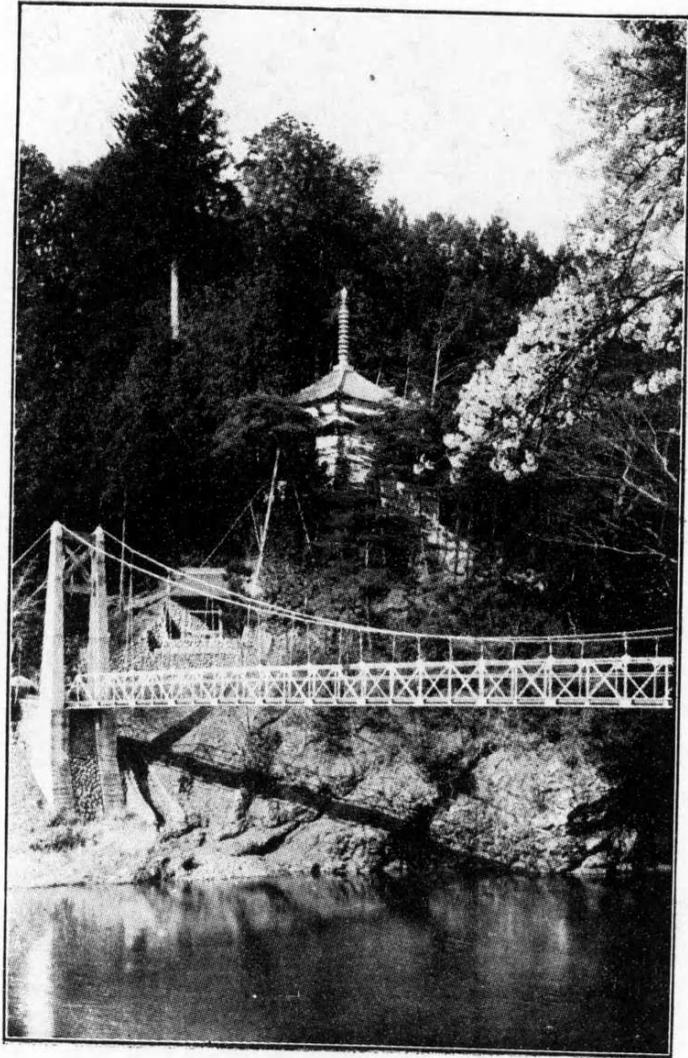
漢詩自由

東京 日比谷出版社發行



我 國 の 寒 山 寺

(武州多摩澤井驛前)



—(漢詩序2)—

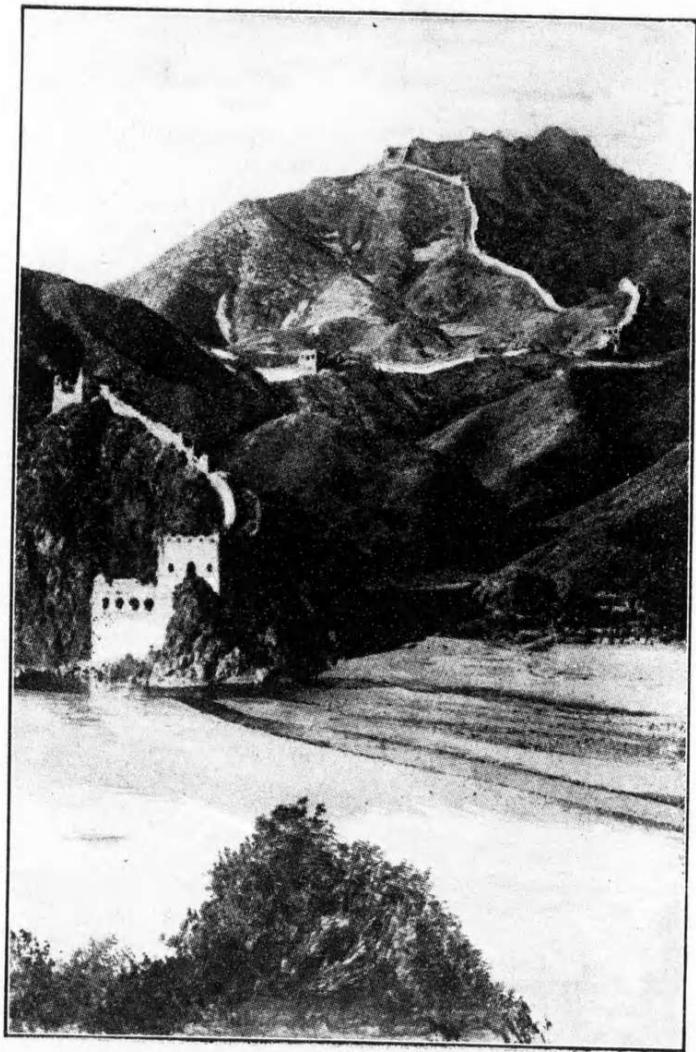
夜 ^チ	姑 ^コ	江 ^カ	月 ^{ツキ}
半 ^{ハン}	蘇 ^ソ	楓 ^フ	落 ^{ラク}
鐘 ^{チヨウ}	城 ^{シヨウ}	漁 ^イ	烏 ^ウ
聲 ^{シヨウ}	外 ^{ガイ}	火 ^カ	啼 ^テ
到 ^{トウ}	寒 ^{カン}	對 ^{タイ}	霜 ^{シヨウ}
客 ^{カク}	山 ^{サン}	愁 ^{シュ}	滿 ^{マン}
船 ^{セン}	寺 ^ジ	眠 ^{ミン}	天 ^{テン}

楓橋夜泊 (支那音) 唐 張 繼

—(漢詩序1)—

萬里長城

(古北口附近)



—(漢詩序3)—

長城(詠史)

宋 胡 曾

祖舜祖堯自太平。秦皇何事苦蒼生。
不知禍起蕭牆內。虛築防胡萬里城。

龜山廻文 七言律

順讀一首

潮迴暗浪雪山傾。遠浦漁舟釣月明。橋對寺門松徑小。壑當泉眼石波清。迢迢綠樹江天曉。靄靄紅霞海日晴。遙望四邊雲接水。碧峰千點數鷗輕。

倒讀一首

輕鷗數點千峰碧。水接雲邊四望遙。晴日海霞紅靄靄。曉天江樹綠迢迢。清波石眼泉當壑。小徑松門寺對橋。明月釣舟漁浦遠。傾山雪浪暗迴潮。

山行 杜牧

遠上寒山

石徑斜

白雲生處

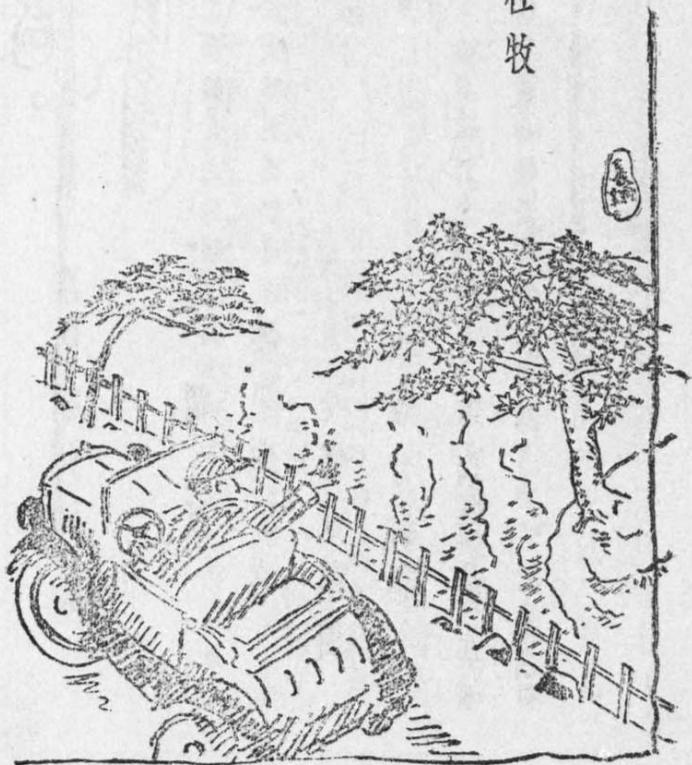
有人家

停車坐愛

楓林晚

霜葉紅於

二月花





題 瓜

滿架連綿盛

長條珠翠稠

水谷分新種

炎山憶故丘

序

萬象は一大詩篇なり。大小方圓は是れ其の平仄にして興廢生滅は是れ其の起結なり。真と善と美とは、是れ其の内容なり。壇の詩を作る者は如來にして、之を讀破する者は禪なり。詩と禪と二致なし。古來禪者が偈頌を以て法を示したる所以なり。頃日畏友天胤松崎覺本師漢詩自由を新編し、初學の爲に斯道の指南と爲さんとす。讀者、之れに依つて詩禪二つながら、領悟する所あらば幸なり。之を序と爲す。

昭和九年五月

序

文學博士 忽滑谷快天 識

偈

次永平悟由禪師偈韻以呈三好學士乙巳九月

松崎天胤

吞吐狂言豈謂禪。

須尋修證一如邊。

專心當事忘入境。

冷暖自知元不傳。

禪師之偈曰

心佛衆生最上禪。

休求捧喝有無邊。

平生受用神通力。

畢竟誰人豈受傳。

自序

日比谷出版社主人一日予に謂つて曰はく、『漢詩を世に普及せしめたいから、金華山房出版の漢詩入門の紙型があるならば、自分に譲渡することは出来まいかの事に因り、予曰く、貴意極めて結構。併し乍ら生憎と紙型がない。且つ彼の入門は、或る大學の國漢科の教科書として編纂した者ゆゑ、本文に讀假名も無ければ解釋も無い。折角普及を計る貴意ならば、暫くの時日を貸與せよ。予業務の餘暇に讀方と解釋とを詳附すべし』との對話を以て別れぬ。爾來月を閲すること二三。頃日漸く脱稿したから同氏に出版發行方を依頼したる次第である。最初の者は漢詩入門の名であつたけれども、都合に依つて改題した。而して更に従前の者に作例を多數増加し、又作例諸作家の略傳をも増加した次第である。其の他

冒韻と云ひ通韻と云ひ、元の入門よりは一層詳密に、且つ成るべく多くの作例を出だしたるは、是れ偏に讀者をして作詩上達の爲め、成るべく多く古人の作を讀破せしめんが爲の婆心に外ならない。

次に第四章漢詩學の餘意として偈頌門を設けて、入門以上詳細に説明し作例を掲げたるも亦同様の意味で、此の一編の小冊書なれど、大切なる禪意を道破したる偈頌の意味が了解し得られるならば、獨り著者の喜びのみでないからである。斯くて一面には漢詩を作るを得、他面にて偈頌の大纲なりと知了せらるるを得るならば區區たる小冊書に貴重の時日や勞力を費したる事の、決して無意味ならざりしを窃に愉悅する所以である。改版に當りて聊か饒舌すること是の如し。

昭和九年五月

天胤 松崎覺本誌

目次

第一章 詩式……………一

 第一節 五言絶句……………一

 第二節 七言絶句……………九

 第三節 起承轉結……………一七

 第四節 平仄の判別法……………二〇

第二章 韻法及句例……………二六

 第一節 通韻……………二六

 第二節 和韻並次韻……………三三

 第三節 散句と對句……………三七

 第四節 冒韻……………四〇

 第五節 作詩の上達法……………四四

第三章 韻書及詩籍

第一節 韻字

第二節 詩學書類

第四章 漢詩學餘意 偶頌門

第五章 本書中記載の作詩家略傳

第六章 本文

標題。熟字。韻礎。轉句。作例

第一節 春の部

(標題)

(一) 新年。立春。元旦。春日。早春。四方拜。人日小集。春日偶成。

春日閑居。春日山莊。

(二) 春曉。春夜。春寒。春日即事。紀元節。春夜聞笛。佳節小集。

四五
四五
四七
五一
一〇五
一〇五
一〇五

春夜歩月。

(三) 踏青。春晴。春雨。田園。柳。春日田家。春夜喜雨。春日野望。
春日尋友。水亭雅會。

(四) 賞花。梅花。櫻花。桃花。蘭。牡丹。鶯。蝶。花下小酌。芳野
賞櫻。嵐山看花。題蘭畫。聽鶯。

(五) 暮春。送春。春日所感。春日懷友。藤花。客舍聞鶉。

第二節 夏の部

(標題)

(一) 首夏田家。山居。早起。曉發。梅雨。夏日即事。水亭觀螢。

(二) 新荷。蓮花。竹。筍。池亭觀蓮。移竹。

(三) 苦熱。納涼。驟雨。晚步。夏夜。牽牛花。

第三節 秋の部

(標題)

目次

一八九

新編漢詩自由

- (一) 立秋。新涼。秋日雜詠。初秋郊行。秋夜懷友。水亭新秋。秋夜。
- (二) 雁陣。觀月。聞蟲。聽笛。客舍聞雁。中夜望月。秋江晚望。
- (三) 重陽。登高。山行。秋雨。菊花。天長節。村舍雜詠。觀友人菊園。秋雨訪友。
- (四) 秋晚。秋盡。紅葉。秋晚即事。暮秋夜坐。秋江晚眺。觀楓。停車。泛溪。

第四節 冬の部

三四

(標題)

- (一) 初冬。冬曉。冬夜會友。雪景。冬夜即事。初冬山居。田家雪。喜雪。江天暮雪。夜雪。初冬雜詠。雪後即事。冬日田家。
- (二) 苦寒。雪日訪友。歲晚書懷。寒夜即事。除夜。雪中探梅。冬夜泊舟。

第五節 雜の部

三六

(標題)

- (一) 山水。湖海。瀑布。遊耶馬溪。觀富士山。湖上矚目。養老瀑布。望東叡山。山店。
- (二) 羈旅。送別。懷古。尋訪。陸路。舟路。旅懷。暮春送友。歸家。
- (三) 閒適。讀書。吟詠。圍碁。煎茶。村舍雜吟。冬夜讀書。清溪煎茶。端居遣興。閒居。喫茶。客來。客去。示諸生。
- (四) 慶祝。祝壽。自壽。賀及第。賀新居。賀新婚。賀出生。
- (五) 弔亡。哭先生。追哭友人。謁先師墓。詣友人墓。悼幼兒。聞友人訃。

第七章 劍舞及朗吟詩鈔

三四七

附記

三七七

跋

三六一

金州城作 乃木希典

山川草木轉荒涼。十里風醒新戰場。

征馬不前人不語。金州城外立斜陽。

新編漢詩自由

天胤松崎覺本著

第一章 詩

式

第一節 五言

絶句

漢文では一字一字に皆意味を有せる故、一字を一言と曰ひ、二字を二言と曰ふ。漢詩の初歩は、一句を五字に綴る者と、七字に綴る者とがある。故に甲を五言と曰ひ、乙を七言と曰ふ。而して昔より之を吳音に讀んで、五言七言と曰ふ。之は我國に吳音の方が、漢音よりは早く入つて來たゆゑ、其の吳音がその儘名詞の根源を爲した者である。漢音では言語明晰を言ゴメイセキと讀み、吳音では言語同斷を、ゴンドウダンと讀む如き類の者である。

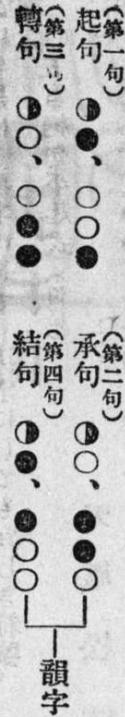
次に漢字には、如何なる文字にも、必ず四聲の音韻と云ふ者がある。之を平聲ヒヤウセイ・上聲ジョウセイ・去聲キョウセイ・入聲ニツセイと曰ふ。字引の中に、一々徴しがあつて、大略次の如き者である。

□は平聲ヒヤウセイ。□は上聲ジョウセイ。□は去聲キョウセイ。□は入聲ニツセイ。

右の中平聲の字を平字ヒヤウツと呼び、外三聲の字を仄字ソウツと稱する。之も亦吳音で讀む習慣である。平聲とは澄みた輕き音韻の字で、他の三聲は、其れに比すると多少なりと濁つた重き音響のある字である。而して平字を表示するには白點を以てし、仄字を表示するには黒點を以てする。而して平は右の意味にて、仄とは音側、即ち傾き側ソウバヤの意。故に輕き音の平に比すると、多少なりと濁れる重き音韻を有してゐる。

次に五言の詩式について其の平仄を掲ぐれば、

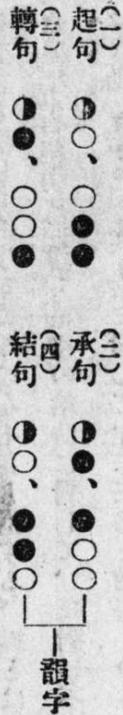
◎五言絶句仄起式ソウオウソウツキ (正格)



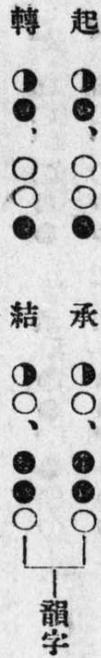
韻字とは下一字だけの音を合すを謂ふ。詳細は下の韻字欄に出てる。

右の中平黒は、平字にしても仄字にしても宜しき符號。

◎五言絶句平起式ヒヤウオウソウツキ (偏格)



仄起式を正格と曰ひ、平起式を偏格と曰ふも、只だ一種の空名で、詩を作る上には、正偏何れにしても宜しいのである。又平起りだの仄起りだのと曰ふのは、第一句の第二字目を以て然か稱するのである。而して起句から承句轉句結句と、第二字目を見て、仄起式は仄平平仄と爲り、平起式は平仄仄平と爲る。之を粘法ネンパツと曰ふ。之に反して若し第二字目が仄平仄平と爲り、又平仄平仄と爲る場合には、之を不粘法フネンと曰ふ。次の如し。



又

起 ○○、○○●● 承 ○●、●○○○
 轉 ○○、○○●● 結 ○●、●○○○

└─ 韻字

右は文字の使用上、粘法の通りに行はれざる場合があるから、其の時の便法である。之を拗體の詩と曰ふ。即ち不粘法である。然れば之に對して粘法の方を正體と稱すべきである。併し作詩上何れを使用するも差支は無い。

又一句を綴る上に注意すべきは、必ず上二字下三字と云ふ様に綴らねばならぬ。下三字を韻礎とも韻脚とも言ふ。一句の基礎である。三字の韻礎の上に二字重ねるのを五言と稱し、四字重ねるのを七言と稱する。拗とは音オウ。意義は折るなり、又曲戻なりとある。即ち正格の粘法に對して、反對に不粘法であるから、拗體とてカネリ、曲る體と曰ふ。右に對して左に正格と拗體との詩を數首摘記すべし。

日長如小年 (仄起)

菅茶山

棋罷還春倦。雞栖未夕陽。回思午前事。一半屬遺忘。

淡 窗 (平起)

廣瀨淡窗

明窗兼淨几。抱膝思悠哉。莫話人間事。青山入座來。

題 畫 (仄起拗體)

平野五岳

吾畫無規度。塗鴉獨自娛。徒有雲煙在。不奈痴與愚。

雜 題 (平起拗體)

長三洲

疎鐘出深綠。何處有僧家。白雲飛不去。應是暮山花。

尙又平韻の詩に對して仄韻の詩がある。之を側體と曰ふ。平仄を列記せば、

◎五言仄起式

起 ○●、●○○ 承 ○○、○○●●
 轉 ○○、●●○○ 結 ○●、○○●●

└─ 韻字

仄字にも亦仄韻がある。これも下の韻字欄に詳かである。

◎五言平起式

第一章 詩 式

起 ○●、●●○○ 承 ○●、○○○○

轉 ○●、●●○○ 結 ○●、○○○○

韻字

◎五言仄起式(拗體)

起 ○●、●●○○ 承 ○●、○○○○

轉 ○●、●●○○ 結 ○●、○○○○

韻字

◎五言平起式(拗體)

起 ○●、●●○○ 承 ○●、○○○○

轉 ○●、●●○○ 結 ○●、○○○○

韻字

寄題櫻老泉(仄起、側體)

酒濁復思茶、秋宵移步屐。銅瓶斟水回、一半是楓葉。

廣瀨淡窗

甲山路(平起、側體)

迎人石相揖、驅馬雲將礙。樵者指前程、路橫歸鳥背。

蒼茶山

三山亭所見(仄起、拗體、側體)

海嶠帶殘陽、漁家明可數。遙際一聲雷、不知何處雨。

廣瀨旭莊

首春山莊(平起、拗體、側體)

梅花自有光、日晚窓難夕。書堂三四弓、一半被渠白。一弓六尺

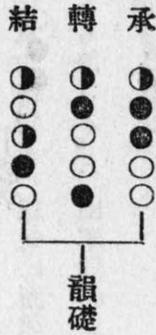
秋月橋門

次に又平仄を綴るに於て注意すべきは、五言にありては二四不同と云ふことである。即ち一句の中第二字目と、第四字目とは、平仄の同じからざるを言ふ。次の如し。

起 ○●○○○ (不同)



起 ○●○○○ (不同)



又五言絶句では、承句と結句とに韻を押すを正則と爲せども、起句に押韻すること

もある。其の時は、前掲の起句●○○●を●●○○と爲し、次の○○●●を、○○●●と爲す。而して起句承句結句と、三句に同韻字を使用すべし。又○○●●を、○○●●と爲すことも許さる。二四不同の原則をば破れども、一般に許容せられてある。之を一字を拗すと云ふ。

次に絶句とは如何と言ふに、十句二十句等の長句を絶ちて、四句一聯の短詩にすとの意である。或は言ふ、律詩の中間や兩頭を截斷して四句の詩と成し得るゆゑ、絶句と稱すと説く者あれども宜しからず。抑も律詩と云ふ者は、唐朝に至つて聲律の整調してから後の名であるから、之を近體と曰ふ。然るに五言絶句の如きは、既に漢代よりして行はれてある故、律詩を截斷した者とは稱すべからず。古體と云ふ者が概して四句以上の長篇であるから、其の長篇の中から截斷して四句一聯の絶句の詩と爲すとの意である。

第二節 七言絶句

前述の如く漢字を一字一言と曰ふのは、明はアキラカ。治はオサムル。昭はアキラカ。和はヤハラガ。是の如く字字皆言語の意義を有せるゆゑ、五字を五言と曰ひ、七字を七言と曰ふのである。平仄を列記せば、

◎七言絶句平起式(正格)

起句 ●○○●、●○○韻礎 承句 ●○○○、●●○韻礎
轉句 ●●○○、○○● 結句 ●○○○、●○○韻礎

◎七言絶句仄起式(偏格)

起句 ●○○○、●●○韻脚 承句 ●○○○、●○○韻脚
轉句 ●○○○、○○● 結句 ●○○○、●●○韻脚

牛丸は平仄何れにても可。七言も亦五言と同じく、粘法と不粘法とあつて、粘法を

正格とし、不粘法を拗體と曰ふ。即ち變格である。五言と異なる點は、一句中に二四不同の外、二六對と云ふことがあるのである。之を一口に、二四不同二六對と曰ふ。

二四、六
●○○●●○○○
●○○●●○○○

又七言は、起句に押韻するのが正則なれども、韻を踏まざることも許さる。之を踏落しと曰ふ。便ち起句○○●●○○○ならば、●○○●●○○○と爲す。又仄起りの起句○○●●○○○ならば、●○○●●○○○と爲す。俱に押韻しない。

踏落の例

九月九日憶山中兄弟一

唐王

維

獨在異鄉爲異客。每逢佳節倍思親。遙知兄弟登高處。遍插茱萸少一人。

王維、十七歲時作、少同缺。

夜上受降城聞笛

唐李

益

回樂峰前沙似雪。受降城外月如霜。不知何處吹蘆管。一夜征人盡望鄉。

又右の如く對句を以て起承を綴れば、必ず踏落と爲る。併し之も成るべく避けて、起承結の三句は、韻を踏むを以て正則と爲す。故に唐詩選七絶二百數十首の中、やはり踏落は僅々三首許である。而して踏落の中二首は俱に對句である。

起句承句結句の第七字目を韻と云へども、下三字を合して、韻脚とも又韻礎とも曰ふ。必ず三字一聯なるを要す。韻礎の三字が安定して、其の上に四字の樓臺を築き上ぐる所の譬喩の詞である。故に一句を綴るには、二字二字三字、或は四字と下三字と云ふやうに綴るを要す。上が二字三字で下二字、或は上五字で下二字と云ふ如きは、詩の句を爲さない者である。恰も俳句を綴るに、五字七字五字と爲し、短歌を綴るに五七五(上句)、七七(下句)と爲す如き者である。俳句を發句と曰ふのも、短歌の上句五七五の十七文字を以て組織するからであらう。

次に七絶の不粘法を列記せば、

起句 ○○○、○○○韻 承 ○○○、○○○韻

轉 ○○○、○○○ 結 ○○○、○○○韻

二四は不同なり。二六は對なり。

起 ○○○、○○○韻 承 ○○○、○○○韻

轉 ○○○、○○○ 結 ○○○、○○○韻

涼州 詞 (平起・粘法)

葡萄酒夜光杯。欲飲琵琶馬上催。醉臥沙場君莫笑。古來征戰幾人回。

蘇臺覽古 (仄起・粘法)

舊苑荒臺楊柳新。菱歌清唱不勝春。只今惟有西江月。會照吳王宮裏人。

銅雀臺 (平起・不粘法)

銅臺亡觀委灰塵。魏主園陵滄水濱。即今西望猶堪思。況復當時歌舞人。

上皇西巡南京歌 (仄起・不粘法)

誰道君王行路難。六龍西幸萬人歡。地轉錦江成渭水。天迴玉壘作長安。

上皇、唐玄宗皇帝。南京、獨成都。道同書。

七言絶句にも亦側體と云ふ仄韻の詩あれども、五言絶句の如く多くは無い。之は五絶は古體の一種とも稱すべけれども、七絶は近體と稱する故にや、仄韻の詩は、極めて稀である。唐詩選に七絶が一百六十五首ある中、側體の詩は僅に三首あるのみ。併し乍ら五絶に於ては、唐詩選七十四首中側體の詩が九首ある。

山家 (仄起・不粘法・側體)

獨訪山家歇還涉。茅屋斜連隔松葉。主人聞語未開門。遠籬野菜飛黃蝶。

夏晝偶作 (平起・粘法・側體)

南州海暑醉如酒。隱几熟眠開北牖。日午獨覺無餘聲。山童隔竹敲茶臼。

次に又平仄中に忌むべき者が二三ある。之を平三連と仄三連と、孤平と孤仄と曰ふ。俱に避くべきである。

平三連と仄三連とは、

各句の下三字韻礎の場合を言ふのである。併し斯かる間違ひは殆ど無い。

平三連 ●●●、○○○ 仄三連 ●●●、○○○

孤平孤仄とは、

五言の孤平孤仄。

●○○●● 二四 ●●●○○ 二四

之を四仄一平と云ふ。即ち孤平である。

○○○○● 二四 ○○○●○ 二四

之を一仄四平と云ふ。即ち孤仄である。二四は皆不同なれども平仄法何れも不可。

七言の孤平孤仄。

●○○●○○● 二四六 ○○○○○●○ 二四六

併し古來孤平は忌むべきも、孤仄は差支ないと云ふ事である。古人の作を調べれば能く分る。

又平仄の變化に於て、次の如き者もある。

尋胡隱者 (粘法)

明高青邱

渡水復渡水。看花還看花。春風江上路。不覺到君家。

右の外變法は尙種々あれども、初學の士の學ぶべき者に非ず。やはり正格なる平仄法を遵守すべきである。

次に又注意すべきは、絶句や律詩は、一首中に同字を避くべき者と爲す。起句に

月の字があつて、結句にも又月の字があると云ふ如きは、宜しからず。併し乍ら一句中にあるのは、差支なき事と爲す。例へば、

(イ) 有^リ山有^リ月有^リ樓臺。

(ロ) 獨在^リ異鄉^ニ爲^ル異客^ト。

(ハ) 他席他鄉送^ル客杯。

(ニ) 雲想^ニ衣裳^ニ花想^レ容。

是の如く一句中に同字あるは、縦令幾字あるも妨げなし。

以上總括すると、粘法の正格と、不粘法の拗體と、仄韻の側體との三種類に歸する。側とは反側と熟字し、傾くとか、背くとか、側つとか、傍らとか云ふ意の字であるから、やはり平韻の詩を以て正則と爲し、仄韻の詩をば變格と爲す所以である。然れば初學の士は、やはり平韻の詩を作ることを以て第一と爲すべし。

又同字の扱ひ方に次の如き詩もある。

題^ニ長安主人壁^一 (平起・拗體)

唐 張 謂

世人結^レ交須^ニ黃金^一。黃金不^レ多交不^レ深。縱令然諾暫相許。終^ニ是悠悠行路心。

併し此の詩は拗體で、而も平仄不整、範と爲すに足らざれども、文字の用法は宜し。

邨 山 (平起・拗體)

唐 沈 佺 期

北邨山上列^ニ墳塋^一。萬古千秋對^ニ洛城^一。城中日夕歌鐘起。山上唯聞松柏聲。

是等も有名の詩なれども、起句に山上と曰つて、結句に又山上と曰ふは、正格ではない。併し承句の城の字を轉句に受けて、直に城中と曰つたのは、句例の多き事である。無論差支はない。兎に角初學の間は、勉めて同字を避くる事に心懸くべきである。

第三節 起⁺承^{シキツ}轉^{テン}結^{ケツ}

起とは第一起りの句。承とは第二其れを承くる句。轉とは第三他に轉じ變り行く句。結とは第四以上を結び止める句と云ふ意で、普通に之を起承轉結とも、又起承轉合

とも曰ふ。一詩を連續する上の規則で、之は文章にせよ、或は講演にせよ、自然此の四句の範圍を出づることはない。而して最も能く人の意表に出づべき者は、第三の轉句の着眼點に在る。而して前後照應して一首の終末を告ぐる。昔より誰が唱道し始めたりと云ふことなく、吾れ吾れ青年の時より聞き覺えたる者に、一種の俚謠を以て巧妙に四句の意を表現した者があるから、左に掲出すべし。或は云ふ山陽先生とか。

起句 京の三條絲屋の娘。

承句 姉は二十一妹ははたち。

轉句 諸國諸大名は弓矢で殺す。

結句 娘ふたりは目もとで殺す。

誠に秀逸なる轉結である。

又次の詩も誰れの作たるかを知らざれども昔より暗誦せる詩である。

起句 才子恃才愚守愚。

承句 少年之智不如愚。

轉句 請看他歲功成後。

結句 才子不才愚不愚。

巧妙なる作である。仄起の粘法で、七虞の韻の同字格である。平仄も正確。只だ同字あるを免かれざれども、之は致方がない。其れ程の嚴格なる詩ではないのであるから。只だ起承轉結の意義と、一詩内に包含せる所の旨意が明かなるならば宜しいのである。

又次に、古來説く所によれば、五言絶句の作り方を學ぶには、左の絶句を以て教へたりと云ふ。

伊州歌

唐無名氏

打起黃鸝兒。莫教枝上啼。啼時驚妾夢。不得到遼西。

之は仄起りの粘法で通韻である。起句の兒は四支の韻で、承句と結句の啼西は俱に八齊の韻である。而して支と齊とは通韻である。但し平仄上起句の韻脚平三連は忘むべきであれども、今は已むを得ない。

第四節 平仄の判別法

平字仄字の見分け方は如何と云ふに、遺憾乍ら吾々日本人には、之を判別する所の便宜を有しない。然れども四聲の中入聲だけは、知ることを得る。之はフツクチキに平字なしと云つて、一音の末尾に此の假名の附く字は、必ず入聲の仄字である。例せば、

(フ) 合は音ガフ。閤は音カフ。給は音キフ。攝は音セフ。夾は音ケフ、又カフ。之を熟字すると、音便法に依つて、合載。閤下。習氣。給孤。攝津。夾山。總べてフの字は促音便に依つてツとなる。

(ツ) 發。骨。髮。闕。雪。潔。鐵。月。
(ク) 犀。僕。竹。獨。祝。角。昨。束。宿。

チは吳音に發する時の音で、漢音ではツである。

(チ) 質物。明日。一月。吉祥。鉢合。八幡。節會。結縁。埒。筆策。越前。
(キ) 滴。壁。歷。隙。赤。域。液。石。

是の如く音の末にフツクチキの附く字は、悉く入聲の仄字である。而して他の平聲上聲去聲の三聲は、之を明知するの便法はない。只だ多く使用する中に自然に知るの外に道なし。明治の明は平字。治は仄字。大正は、二字俱に仄字。昭和は俱に平字。漢詩學初歩は仄平仄平仄と爲る。併し乍ら漢文の字書には、一々四聲が記入してあるから、其の字の平仄を知ると同時に、何韻の字なることをも知らるべし。斯くて五言の句を綴るには、本書の熟字欄について、初めに上の二字を求め、而して韻脚の三字を求めて、二字と三字との結合を、自然の一句と成るやうに注意す

べし。七言に於ては、更に二字を加ふるのみなれども、之れも韻脚の上の四字は自然に連續して、又下の韻脚に接合するにも無理のないやうに、七字一句の纏つた者と爲さねばならぬ。上の四字と下の三字とが別々の意では、俗に之を木に竹を接ぐと云ふ。木には木を接ぎ、竹には竹を接ぐやうに、工夫を要するのである。而して起句にて詩の題意を起し、承句にて其れを承けて意味を増加し、轉句にては恰も窓より首を出して、室内以外の變れる趣味ある者を捕へる如く注意して、結句にて之を前の起承の句に引き合せて、一首の纏つた者と爲さねばならぬ。山水畫を繪くにも、自ら此の起承轉結が行はるゝやうに思はれる。先づ第一に畫面の下方面に、巖石や樹木を書くは起句なるべし。次に中央以上に山を繪くは、承句なるべし。次に瀑布とか浮雲とかを、不自然にならぬやう、山の間や樹林の間に現出せしむるは、轉句なるべし。而して最後に瀑布あらば必ず川あり。故に川には舟を浮べ、黄昏ならば雲上に月を加へ、又水邊に草や小石を増加するは、第四の結句にて、大略一枚

の山水畫は終末を告ぐるであらう。試に英詩に就いて回想しても、其の構造が最も能く近似してゐるのは、實に不思議と云ふの外はない。やはり二句目には母韻の同韻を響かせてゐる。字にも亦輕き音の字と重き音の字との區別あるは、恰も漢詩の平仄に髣髴たる者である。

又五言七言と云ふのも、自然の音律で、我が國歌の五七調は、是れ亦人間詠吟の自然である。故に十七文字の俳句は、恰も五言絶句の如く、三十一文字の短歌は、七言絶句のやうである。而して今様は律詩の如く、長歌は古詩の如く。畢竟人類共通の吟詠調であるからであらう。

昔或人が曰く、漢詩の五言は二十字なれども俳句は十七字。試に近江八景を全部一首の中に入れて詠じ得るやと曰つて、俳人は直に、

七景は霞みて見えぬ三井の鐘。

と詠じたれば、漢詩人は辟易したと云ふ。併し其の代りには、漢詩には又四言四句

の詩が成り立つから、俳句よりは一字少ない十六字で、一首の意を明にすることが得られる。

題二日精華壇

叱石道人

修焉遊焉。日。光。玉。潔。于。以。栽。之。千秋同節。

日精とは菊の異名。之は或中學校の寄宿舎の前に、舎生共が菊を植えて、其の紀念碑に題した古詩の短篇である。序に略解すると、修焉遊焉の四字は、禮記の學記篇に、

君子之於學也、藏焉。脩焉。息焉。遊焉。

とある文字にて、藏焉とは、此の學問や藝術を腹中に收藏する意。修焉は、身を修め行ひを慎しむ。息焉は休息し、遊焉は遊びて心を慰め、身體を健康にする意。此の菊は日の如く光り、玉の如く潔くあるから、爰に以て之を此處に栽培する。願くは百歳も千秋も永久に此の芳烈なる菊花と與に其の節操を同じくしたいとの意で

ある。俳句の十七文字で、是れ程の種々なる意味の句が綴られやうか如何。

以上にて一通り漢詩學の要綱を説き終へたのである。以下は稍々専門的に爲るから、初學の士は省略するも差支なし。

第二章 韻法及句例

第一節 通韻

今一つ通韻と云ふことがある。併し乍ら唐詩選七絶數百首の中に一首も通韻は無い。之は無い方が正格である。大體通韻と云ふ者は、古詩を作る上に於いて許すべき者で、僅々七絶の、起承結の三句位を綴るに、通韻を使用するのは、少し身勝手な遣方ではあるまいかと思ふ。何れ後の宋朝蘇東坡や黃山谷當りから流行し始めた者であらう。故に詩律に於て最も嚴肅なる、淡窗詩集遠思樓詩鈔の如きには、やはり通韻は一首もない。併し星巖集にも多少あり。又佛山堂詩鈔の如きには稍々多い。左に二三の例證を列舉しやう。

貧クシ 管トク 谷コク (貧貧ハ竹ノ名。長サ數丈、圍一尺五六寸。湘湖地方ニ生ズ。)

宋 蘇 東 坡

漢川脩竹賤シキ 如蓬シ。斤斧何曾赦テ 舞龍ヲ。料得清貧饑太守ト。涇川千畝在ニ 胸中ニ。蓬と中とは、一東の韻。龍は二冬の韻。東冬は通韻とて、韻が互に通じ合ふ。

東 欄 梨 花

同

梨花淡白柳深青。柳絮飛時花滿城。惆悵東欄一株雪。人生看得幾清明。

此の詩は、起句の青が九青の韻で、城と明とは俱に八庚の韻。青と庚とは無論通韻である。

右の外日本人の詩には、此の通韻の七絶が少しはある。併し承句と結句とを同韻にして、起句を他の通韻にするのが一般的である。貧管谷の詩の如きは、やはり特例の方である。

斯く宋朝當りから始まつて、元當りでは相當盛に流行した者と見え、在元十一年であつた祇陀大智禪師の偈頌の如きには、通韻が頗る多い。其中亦二三の例を擧ぐるならば、

佛 成 道

祇 陀 大 智

果滿^{チテ}三^ニ祇^ニ道^ヲ始^{メテ}成^ス。放光動地度^ニ羣生^ヲ。一聲雞唱五更月。枕上誰人夢未^{ザラシ}醒^メ。
成^ニと生^トとは八庚の韻。醒^ニは九青。庚^ハ青に通ず。

出 山 相

同

耿耿青天夜夜星。瞿曇一見長^{シテ}無^ク明^ク。下山路是上山路。欲^ス度^ニ衆生^ヲ無^ク衆生^ニ。
星^ハ九青。明^ハ生^ハ八庚。

山 居

同

方袍圓頂做^{ナス}僧形^ヲ。何^ノ用^ヒ波^ト波^ト競^フ利名^ヲ。山上有^ニ柴^ノ谿^ニ有^リ水^ヲ。林間最好養^フ殘^ニ生^ヲ。
形^ハ九青。名^ハ生^ハ八庚。

鳳 山 山 居

同

空林卓^{シテ}錫^ト卜^ニ幽^ニ栖^ヲ。冷淡家風實可^シ悲^シ。荷葉滿^ニ地^ニ無^ク線^ノ補^ヲ。白雲爲^ニ我^ガ坐^シ禪^ノ衣^ト。
栖^ハ八齊。悲^ハ四支。衣^ハ五微。三韻互に通ず。

併し是の如きは殆ど古詩に於ける韻法のやうである。但し古詩でも、平韻から平韻に轉ずるは正格ではない。

右の外通韻の詩偈が頗る多い。或は起句に、或は承句に、或は結句に、殆ど古詩の如く。之は宋より通韻が認められて、元と時代が連続せる故、大智禪師在元の頃の韻法は、やはり唐時代の古規を變化した者と思はる。

之を要するに、漢詩を學ぶ者は、古詩に通韻を使用する外、絶句などには使用せず。淡窗先生の遠思樓上下二卷中に通韻の詩の一首もなきことを手本と爲すべし。萬已むを得ずして通韻するならば、星巖や佛山兩先生の如く起句に限るべし。是れ起句には押韻せずして踏落と云ふこともある故、其の代りに通ずる韻を用ふるのが至當なるべしと思はる。是れは余の一私案である。

次に菅茶山詩集に就いて之を見れば、唯だ左の二首あるのみである。

黄葉夕陽村舍詩後篇四冊

菅 茶 山 著

雁來紅 (卷二)

秋色妍妍トシテムルハヘツ染者誰。雁聲夜夜帶ヒ霜來カタル。美人千里將キツテ何寄ヲ。裁シテ作シテ紅箋ト寫ス小詩ヲ。

之は誰と詩とは四支の韻。來は十灰の韻。併し來は四支の中にもあれば、支と灰との兩韻の字である。故に實は通韻と曰ふ程の者ではない。

春寒 (卷三)

終風且雪已三旬。未見郊天生ス靄雲ヲ。靜聽禽聲洩ス春信ヲ。松濤ト希處有ツテ時聞ク。然れば此の一詩のみが通韻である。句は十一真、他の雲と聞とは俱に十二文。文と真とは通韻。

星巖集八册

梁川星巖著

星巖集には凡そ十首許りある。併し乍ら殆ど皆起句に通韻するのみである。煩を省いて二三首だけの例を出せば、

雪夜寄懷宏上人

細竹窗前簌簌聲。撥ハ簾急雪灑ソ吟燈ニ。山中應ニ更多ニ清事ヲ。閒憶ニ歎冬花下僧ヲ。聲は八庚。燈僧は十蒸。庚は蒸に通ず。

發廣島王香諸子送至衣波洲

一席清風十里程。恍然疑尙在ニ離亭ニ。衣波洲上故人酒。晚到ニ塔門ニ仍未醒メ。程は八庚。亭醒は九青。庚は青に通ず。

遣興 (卷四)

墾ニ破溪雲ヲ別圃成ニ。煙芽露甲漸ニ青ク。先生近課人知ル否ヤ。一部神農本草經ヲ。成は八庚。青經は九青。

次に佛山堂詩集に就いて之を見れば、約八首を數へ得たり。亦三四の例を出せば、

佛山堂詩鈔 三册

村上佛山著

秋雨雜吟

第二章 通韻及和韻

前山後嶺雨紛紛。釀得秋寒一味新。苦竹幽蘭誰不瘦。就中尤瘦是詩人。
紛は十二文。新人は十一真。真文互通。

和某田園秋興

幾東新芻色淺青。編爲米粟一倍鮮明。明朝先貢官倉去。欲得鄉關第一名。
青は九青。明名は八庚。庚は青に通ず。

九日登馬嶽

清世恩波及逸民。優遊半讀半耕間。秋風又醉黃花酒。多少英雄戰沒山。

民は十一真。間山は十五刪。真通刪。

岩熊村途中遇牽牛吟詩者

一聲吟破萬重雲。手挽黃牛下午轡。欲問其人人已遠。寒松落落水珊瑚。
雲は十二文。轡珊は十五寒。文寒通せず。

是の如き詩専門の老先生にして、而も通韻の誤りを爲す。文韻と寒韻とは通じない

のである。然るに平素通韻を爲す習慣ある爲に、是の如き誤りを爲す。やはり唐詩を學ばねばならぬ。絶句に於ての通韻は、餘り香しき詩法ではない。故に本編では只だ通韻と云ふことのあるを紹介するのみで、固より獎勵すべき譯の者ではない。

第二節 和韻並に次韻

宋の詩人嚴滄浪曰く、和韻は最も人の詩を害す。古人は酬唱すれども次韻せず。此の風元白皮陸に始まる。本朝諸賢、乃ち此を以て工を鬪はす。遂に往復八九和する者あるに至ると。

元白皮陸とは、唐の元微之と、白樂天と、皮白休と、陸羽との四人を謂ふ。本朝とは、宋朝にて、殊に蘇東坡や黃山谷などは、盛に相ひ次韻し唱和した者である。而して和韻は、唐詩選中五言排律に最も多し。曰く某々に奉和。又某々に和すとある。併し必ずしも韻字を其の儘使用するとは限らない。左に一例を擧ぐれば、

奉_レ和_ニ嚴武軍城早秋_一

唐 杜 甫

秋風嫋嫋_{トシテ}動_ク高_ク旌_一。玉帳分_レ弓射_ル鷹營_一。已收_ニ滴博雲間_一。欲_レ奪_ニ蓬婆雪外_一城_一。

滴博・地名。蓬婆・城名。

軍城早秋

唐 嚴 武

昨夜秋風入_ニ漢關_一。朔雲邊月滿_ニ西山_一。更催_ニ飛將_一追_ニ驕虜_一。莫_レ遣_ニ沙場_一匹馬還_一。

飛將・漢李廣。

之が唐時代の和韻である。意味は唱和的なれども、韻は同韻ではない。然るに次韻とか、依韻とか云ふことがあつて、先方の詩の韻字を、各句其の儘に次ぐことあり之を次韻と云ひ、各句の韻を、位置を換へて用ふる、之を依韻と曰ひ、又先方の韻が八庚ならば、其の八庚の中から勝手に韻を使用するを用韻と曰ふ。やはり一種の和韻と云ふ中の變法である。

次韻の例

和_下甫水井上先生將_レ赴_ニ樺太_一見_レ示詩_上

天 胤

夙成_ニ三木舌與_ニ金身_一。振作將_レ周_{カサント}率_ト士濱_一。昨極_ニ南洋_一今北海。宣_ニ傳國體_一有_ニ精神_一。

甫水先生詩曰 (甫水・文學博士井上圓了先生之雅號)

都門狹_ク不_レ適_ク容_身。去_ニ北溟_一將_レ盡_ニ濱_一。山遠水長天地闊。風光好養_ニ我精神_一。

之は單に和すと云ふと雖ども、原作の韻を次いで唱和したのである。要するに原作の韻字を其の儘使用して作るを次韻と曰ふ。詩壇上一種の遊戲文事である。併し乍ら昔より用韻だの依韻だのと云ふ所の作は殆ど見當らない。大概は此の次韻である故に單に和韻と云ふ中にも、韻を和するに非ずして、意味を和する和詩と、韻を次ぐ次韻と、其他依韻と用韻との三種あれど、今日一般に行はるゝ所の者は、皆次韻であると云ふことを了知すべし。

次韻の使用法は、成るべく原作の使用法と異なる如くに工夫を凝らすことで、中々困難である。併し意味は常に唱和でなくてはならぬ。例へば原作に若し悲嘆の意味

があらば、歡喜の詞を以て之を慰め、若し又憤懣の意あらば、勤勉の詞を以て之を解き、併し又悲嘆の意に同情するは差支なく、又愉快なる意味に亦喜びを共にする如き次韻ならば、是れ亦無論差支はない。

次ニ永平悟由禪師偈韻一以呈三好學士一

天胤

吞吐^{スルモ}狂言^ヲ豈謂^ニ禪^ト。須^ク尋修證一如^ニ遊。專心當^{ツテ}事忘^ル人境^ヲ。冷暖自知元不^レ傳。

禪師原作曰

心佛衆生最上禪。休^メ求^ム棒喝有無邊。平生受用神通力。畢竟誰^レ人豈受^ル傳。

三好學士とは、故大正天皇の諸皇子の傅育官長たりし三好愛吉氏の事である。長野中學校長より轉じて、第二高等學校教授と爲り、續いて同校校長と爲り、又喬遷して傅育官長と云ふ重大なる榮職に就いた人格者である。然るに例の西班牙風流行の爲に落命す。實に千傷萬憾。氏が永平寺悟由禪師に參禪しての歸途著者に寵示したる偈頌である。因つて次韻して又同氏に呈示したのである。

追憶の爲に聊か一辯。

第三節 散句と對句

凡そ四句の五七言絶句に於いて、散句と對句との別がある。

第一 前散後對

便ち前二句は對句に非ずして、後二句が對句であるの例。

寒食^上 汜^上 唐王維

廣武城邊逢^フ暮春^ニ。汶陽歸客淚沾^ス巾。落華寂寂啼^キ山鳥。楊柳青青渡^ル水人。

與^ニ從弟^一同下第出^レ關 唐盧綸

出^テ關愁暮^ニ一沾^ス裳。滿野蓬生古戰場。孤村樹色昏^ク殘雨。遠寺鐘聲帶^ツ夕陽。

第二 前對後散

韋處士之郊居 唐雍陶

滿庭詩景飄紅葉。繞砌琴聲滴暗泉。門外晚晴秋色老。蕭條寒玉一溪煙。

春

唐 高

蟾

明月斷魂清靄靄。平蕪歸路綠迢迢。人生莫遣頭如雪。縱得春風亦不消。

第三 前散後散(全散)

之は四句とも散句にて對しない。併し之が絶句の本色である。故に大概の絶句は、五言と七言との別なく、殆ど一般に全散の詩である。

送元二使安西

唐 王

維

渭城朝雨浥輕塵。客舍青青柳色新。勸君更盡一杯酒。西出陽關無故人。

贈汪倫

唐 李

白

李白乘舟將欲行。忽聞岸上踏歌聲。桃花潭水深千尺。不及汪倫送我情。

王維の前詩が普通送別の時に吟するので、李白の此の詩が、送らる、人が留別の詩として吟するのである。其れが永い間の慣例と爲つてゐる。

第四 前對後對(全對)

蜀 中 九 日

唐 王

勃

九月九日望鄉臺。他席他鄉送客杯。人情已厭南中苦。鴻雁何從北地來。

但し起句は平仄不整。又郷と云ふ字が起承の二句にあるは、俱に法則とすること
は出来ない。

登鶴鵲樓

唐 王

之 渙

白日依山盡。黃河入海流。欲窮千里目。更上一層樓。

絕句

唐 杜

甫

兩箇黃鸝鳴翠柳。一行白鷺上青天。窗含西嶺千秋雪。門泊東吳萬里船。

溪陰堂

宋 蘇

軾

白水滿時雙鷺下。綠槐高處一蟬吟。酒醒門外三竿日。臥見溪南十畝陰。

併し全對の絶句は極めて少ない。而して律詩は殆ど右の變化を一詩中に集めた者

である。便ち破題の二句は多くは散句であり。而して中の四句は前對後對で、終りの結句二句も亦多くは散句である。併し又全部對句に爲つたのも皆無ではないが、極めて稀である。

登 高

唐 杜 甫

風急天高猿嘯哀。渚清沙白鳥飛迴。無邊落木蕭蕭下。不盡長江衮衮來。萬里悲愁常作客。百年多病獨登臺。艱難苦恨繁霜鬢。潦倒新停濁酒杯。

之が全部對句である。併し變化に乏しいから、やはり一般的の前二句は散。中四句は對。後二句は散と云ふのが律としては面白い。

尙律や排律は、春陽堂出版の漢詩入門に詳である。此には略する。

第四節 冒韻

又冒韻と云つて避くべき事がある。之は下の韻字と同韻の字を一句中に用ひてはな

らぬと云ふことである。

逢 鄭 三 遊 山

唐 盧 仝

相逢之處草茸茸。峭壁攢峰千萬重。他日期君何處好。寒流石上一株松。

此の詩は茸重松の韻字が、皆二冬の韻である。然るに起句の逢も、承句の峰も俱に二冬の韻字である。之を冒韻の詩と曰ふ。唐時代ではいさ知らず、後世では色々と理窟を生じて其れは不可と曰ふことに爲つたのである。結局は韻脚の上に同韻の字を用ふると、音韻が重複して、爲に下の韻が引き立たないからであらう。やはり平仄の變化を要する如く、文字も成るべく韻脚と同韻でないのが善いと考から冒韻と曰つて避くるやうに爲つたのであらう。斯く知つた以上は、一句毎に常に再吟味する必要を忘れてはならぬ。

第五節 作詩の上達法

詩を上手に作らうと欲するならば、勉めて古人の作詩を朗誦するに限る。和歌を作らんと欲せば、古今和歌集を千遍讀めと曰ふ。千遍とはちと過大な言なれども、少なくとも十遍か二十遍讀過するならば、自然と五七調の口調が口に湧いて出る。漢詩でも俳句でも皆同じ事で、澤山古人の作を朗誦すると、其れ等の句調が自ら湧いて出る。故に本編には成るべく標題に關する古人の作を澤山列舉したのである。併し幾ら名吟でも初學の人に不可解では何の役にも立たない。故に成るべく分り易き本邦人の諸作を列舉したのである。又同じ本邦人でも、極めて平易に作る流と、又極めて艱澁に作る流義がある。之れも初學と云ふを標準としてゐるから、やはり平易なる方の流義を採つたわけである。又一方に偏してゐると云ふ非難もあらんかたれども、僅かこればかりの物の爲に各大家の詩集を一々獵渉することは、餘り好ましくもないから、只だ手許に在る數種の詩集に就いて其の作例を求めたのである。殊に著者は九州人であるから、自然九州人、特に同縣人即ち大分縣人豊前と豊後と

の詩人の作が多數を占めてゐるわけである。併し乍ら詩作上に於ては、何處の何人の作であらうと、左様な事は如何様にしても宜しき者である。要は只だ作詩上の參考とまでなり得ば、それで目的は達するのである。何にも一方に偏するの、私するのなどと評論すべき程の者ではない。故に讀者は只だ虚心坦懐に、其の題其の題に關した作例を、十遍も二十遍も朗誦して句調の練習を勉められたし。

日夕散歩する際にも本編を手にして、口吟し乍ら作例を味ふならば、自ら詩句の調子に習熟することを得るであらう。此の外上達の方法はない。

併し師に就いて添削を乞ふことの必要なは、無論言ふまでもないことである。

支那清朝の宰相李鴻章や、碩儒の左宗棠等の師たる大宰相の曾國藩が曰つたには詩文共に

看讀寫作。闕一不可。

と、道破せられたさうだが、其れも無論必要なことには相違ない。

看、とは通讀の事である。

讀、とは精讀の事である。精讀とは一種の解釋である。

寫、は古人の詩集や文集を謄寫することであれど、予は左程重要とは思はない。

寧ろ寫す暇に看讀するが善い。

作、は詩なり文なりを作ることゆゑ、大切なるは言ふまでもない事である。而し

て成るべく師を求めて添削を経ることを要する。故に予は寧ろ看讀作添と提

唱したい。

斯く看讀を必要とするから、本編には作例を比較的多數列舉したのである。唯だ適當なる作例の餘り多く存せざりしに苦心を重ね、又搜索にも可成り多くの時間を費したわけである。讀者の一考を煩はしたい。

第三章 韻書及詩籍

第一節 韻字

漢詩を作るには韻字と云ふことを明に知らねばならぬ。其の韻字に四種類ある。第一平韻として、四聲の中の平聲の韻を言ふ。此類に三十種あり。通俗に之を三十韻と曰ふ。形式上之を上平と下平とに分つて、上平に十五種、下平に十五種。作詩家は必ず以て暗誦せざるべからざる者である。其の便法として、左の如くに數字を加へて唱ふ。

○上平聲

- 一東。二冬。三江。四支。五微。六魚。七虞。八齊。九佳。十灰。十一真。十二文。
- 十三元。十四寒。十五刪。

○下平聲

一先。二蕭。三肴。四豪。五歌。六麻。七陽。八庚。九青。十蒸。十一尤。十二侵。十三覃。十四鹽。十五咸。

次に仄韻に三類ある。之は四聲の中の上聲、去聲、入聲の其れ其れである。

○上聲二十九種

董。腫。講。紙。尾。語。寢。齊。蟹。賄。軫。吻。阮。早。潛。銑。篠。巧。皓。哿。馬。養。梗。迥。有。寢。感。琰。賺。

○去聲三十種

送。宋。絳。寘。未。御。遇。霽。泰。卦。隊。震。問。願。翰。諫。霰。嘯。效。號。曷。禡。漾。敬。徑。宥。沁。勘。豔。陷。

○入聲十七種

屋。沃。覺。質。物。月。曷。黠。屑。藥。陌。錫。職。緝。合。葉。洽。

此等の韻を詳細に列記したる者が即ち韻書で、左に掲ぐる者は、最も必要の書類である。

◎詩韻精英 池田親編

上下二冊又七冊 薄葉小本

◎詩韻含英異同辨

上下二冊 薄葉小本

右の中詩韻精英が第一等なれども、今日では殆ど珍本。容易に入手し難し。

以上にて漢詩學初步に關する要項を述べ終へたので、これより以下の説く所は、一般詩人としての參考に供するまでの者である。

第二節 詩學書類

此の書類中亦最も必要なる者は、

◎聲韻圖機活法 山城昇編輯

乾坤二冊 薄葉小本

◎詩韻活法 瀧川昇編輯

乾坤二冊 薄葉小本

洋綴全一冊

◎詩經詳解 松崎天胤著
右の外、詩學に關する書は澤山あれど、大同小異。寧ろ古人の詩集を熟讀すべし。中にも

洋綴一冊

◎唐詩選評譯 森槐南著
之は中々の良書である。併し乍ら大正十二年の大震災の爲に、やはり今日では希有の珍書たるべし。

唐宋詩醇

陶淵明集

尙本邦人の詩集としては、

黄葉夕陽村舍詩 菅茶山

星巖集 梁川星巖

星巖先生遺稿

前編後編

九冊

四冊

遠思樓詩鈔 廣瀬淡窓

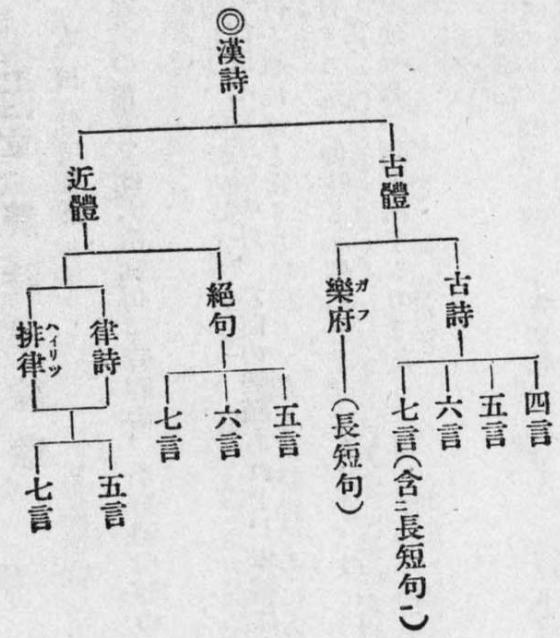
前編後編

山陽先生遺稿

太田錦城詩集

近世の大家では大沼沈山、森春濤、小野湖山等の如きは、何れも著名なる大詩人である。

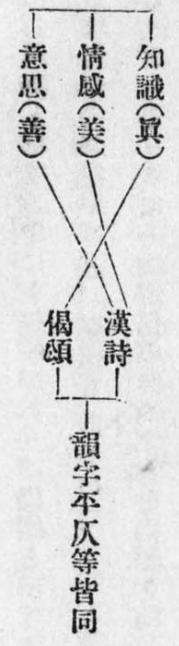
尙五七言絶句の外、左記の種類あれど、本編は之を略す。



第四章 漢詩學餘意

偈頌門

偈頌とは、佛教的詩式の名稱で、偈とは梵語の伽陀又は偈陀と云ふ語の略音。恰も佛陀を單に佛と稱するに同じ。頌とは詩經の中にある風雅頌の一で、其の人の徳を頌賛する意。伽陀も亦佛徳を讚歎する梵音。故に同一意味の字を併合した者で、之を梵漢兼舉の語と稱するのである。而して其の偈頌と漢詩との差別は、次の理由に由つて分かる。



但し漢詩と稱する中にも偈頌があり、偈頌と稱する中にも漢詩がある。故に宋の蘇東坡居士の詩集中には、偈頌もあり、又祇陀大智禪師の偈頌中には漢詩が澤山ある。之を要するに一般僧侶の作つた者を偈頌と稱し、一般人の作つたのを漢詩と云ふやうなれど、其れは正確の詞ではない。又其の詩式は、漢詩と毫も異なることなく、やはり粘法あり、不粘法あり。正格あり、拗體あり。韻脚も正確。平仄も正確。何等異式あるを認めない。左に大智偈頌中について詳細に説述すべし。

尙諸經中に歎佛偈タツブツゲなどあつて、平仄不整、或は韻など無き者あれど、其れ等多くは梵語の伽陀を七言四句に譯したる者ゆゑ、無韻無平に爲ることもある。併し大體に於ては平仄整ひて粘法に叶つてゐる。

歎佛偈

四八端嚴微妙相。僧祇三大劫修來。面如滿月。目如蓮。天上人間咸敬仰。是れ等純然たる佛徳を讚歎したる頌徳歌である。然れども平仄は正確。即ち仄起の

粘法である。

序に略解せば、釋迦牟尼佛の御相は四八三十二相と云つて、中にも第二十一の眉間ミケン白毫相と、第三十二の烏瑟膩沙相ウセニシヤの如き、之を略して烏瑟白毫の二大相と曰ふ。兩眉の間に白玉の如き毛あつて、清淨柔軟、右廻りに旋つて、常に光明を放つ。又烏瑟は、頂肉チヤウニク鬢ウヰ成相と譯す。頭の頂上の肉が隆く起き上つて、鬢モトドリの如くある。之を螺髮ラハツと曰ふ。若し今日是の如き人相の人が世に出でたならば如何。法筵に人を集むるに於ては蓋し無類ならん。百千の鐘や太鼓を叩くに勝ること萬々。而も眉間の白毫より光明を放つと云ふに於ては、尙更の事である。故に此の伽陀に端嚴トウケンと正しくおこゝかなる微妙の御相と起句に出して、而して承句に、

併し斯かる端嚴なる御相を得るには、必ず原因がある。便ち三大阿僧祇と云ふ無數なる長年月の修行を爲したる所の結果として現出し來つたのだ。之は善惡良否如何なる者も、原因結果に歸結するのが佛法であり、又眞理でもあるのである。次に轉

句に、

其の顔面は、十五夜の圓滿なる寸毫の曇りもなき明月の如く、又眼目の慈悲深くやさしくあるは、白蓮華の露を帯びて旭日に映じたる如くある。故に結句に、
天上界でも人間界でも、あらゆる世界の衆生は、皆悉く之を敬ひ仰ぎ尊ぶとの意である。

又偈には、渠列の反音ケツと、其例の反音ケイとある。其のケイを吳音に讀んでゲと爲し、又頌は次用の反で、音シヨウなれども、之れ亦吳音に讀んでジュと爲す。故にケイシヨウを、ゲジュと讀むのである。

次に大智偈頌とは、一冊の詩本であるが、佛誕生に始まりて、化燈二首に終り、總計二百二十九首ある。其中無漏接待と云ふのが一首五言絶句で、他は皆七言絶句である。以下漢詩的なものを掲出して、最後に偈頌を出さん。

謝大元天子詔許還本國

祇陀大智

萬里北朝宣玉詔。三山東海送歸船。皇恩至厚將何報。一炷心香祝萬年。

大智禪師は二十五歳の時、支那元の時代に入國し、在元十有一年。其の歸朝に及んで、元の第五代英宗皇帝の泰定一年に、詔りして船を艤し、日本に歸らしめんとせしにより、此の偈を呈して謝意を表したのである。時は我朝後醍醐天皇の正中元年である。

北朝とは、北京の事で、元の都。三山とは、東海中の三山で、一に方丈。二に蓬萊三に瀛洲と云ふ。仙人の栖むと云ふ島山。七言仄起式の粘法。踏落し式で、一先の韻。平仄も正確。又其の意味も、全く皇帝の厚恩を謝したのみで、純然たる漢詩である。併し恩を報ずるは即ち佛法である。又眞理でもある。併し前掲の眞善美の意味の眞を述べたと云ふ程には當らない。

破船時呈高麗王

(仄起粘法)

曠劫飄流生死海。今朝更被業風吹。無端失卻歸家路。空望扶桑日出時。

之は元を發してより、途中にて俄に逆風に遭ひ、遂に飄泊して朝鮮北部の高麗に到着せし故、此の詩を作つて高麗王に獻じ、航海の憐みを乞うた者である。只だ字句に佛教的の詞を用ひたれども、要するに永い間、生き死にの危き大海に漂ひ流され今朝又更に宿世の業因に酬ゆる現果の暴風に吹かれて、譯もなく日本に歸る路を失つた。遙に手を翳して見れば、扶桑樹の彼方より出づる太陽の方面が、なつかしき我が日本であると。大に感慨の體。扶桑とは日本の一の別名である。王之を見て大に哀感して、亦舟を舺して送り、漸く危難を免かれて、加州宮腰の津に著船したと云ふ。抑も何處に幽玄の真理、微妙の言葉が存在するや。求めんと欲するも没須有。曠劫とは、永い間、飄流は、水に漂ひ流さる。生死の海は彼の大海、業風は宿世の業力所變による暴風。失卻の卻は助字。只だ哀みを乞ひたるのみ。

因 事 (仄起粘法)

一鉢隨緣度歲華。禦寒亦有袈裟。無心常伴白雲坐。到處青山便是家。

一鉢は三衣一鉢とて、僧侶の常什物。歲華は歲の事。禦は防禦。全首讀んで文字の通り。

山 居 (平起粘法)

方袍圓頂做僧形。何用波波競利名。山上有柴籬有水。林間最好養殘生。方袍は、四角な袖のある衣。圓頂は丸頭。做は作に同じ。波波は、奔走、又は動作の意。

鳳山 山居八首 (平起粘法)

名輶利鎖留不住。晦跡煙霞水石中。折脚鐺兒煎野菜。住山自效古人風。

鳳山とは、師の生國肥後國菊池郡に創建したる所の鳳儀山聖護寺を謂ふ。師は南朝の忠臣菊池武時公(寂阿大居士)の尊信を受けて、此の山に住し、道行堅固にして常に在山。山を下らざること二十年なりと云ふ。昔し晉の惠遠法師は、虎溪の東林寺に山居して、世間に出でざること四十年。然るに一日陶淵明と陸修靜とが師を訪

聞して辭去の時、三人同道にて、覺えず虎溪の橋を渡りたれば、平素手慣れの虎が一大吼した故、驚いて回顧せば、誓つて渡らないと決心せし橋を渡り居たゆゑ。覺えず三人互に一笑。此處に相分れて師は元の世外に歸り、陶陸の二人は世間へと出た。之が所謂虎溪の三笑である。昔は山居に無限の價値があつたが、今日では殆ど無用の徒事。如何な大徳でもやはり隨波逐浪でなくてはならない。

名輶利鎖は、世間有漏の名利は、我身を繫ぐ所の馬の轡か、足を繫ぐ所の鎖かである。故に其の名利の巷には住まらぬ。而して我が足跡を此の鳳儀山中に晦まし止むる。生活状態は、越後の良寛和尚と瓜二つ。足の折れた傷物鍋で、大根や人參の野菜を煮る。而して古人の山を愛する脱俗の美風を效ひ學ぶとの事。煮るに煎を用ひたのは、如何なる故にや。之は例の油で野菜を煎じて造る所のケンチン汁を意味したのであるまいか。

同 (仄起・粘法)

艸屋單丁二十年。未下持一鉢。望人煙。千林果熟携籃拾。食罷谿邊枕石眠。

單丁とは、孤單零丁とて、獨身で零落してゐる意。併し謙遜の詞である。其他は皆文字通り。

同 (仄起・拗體)

萬象之中獨露身。更於何處著根塵。回首獨倚枯藤立。人見山兮山見人。

之は偈頌の方である。結句が面白い。起句は誰れも同じ事で、森羅萬象、山川草木の中に、我れ獨り身を呈露して活動してゐて、獨りの全面目ゆゑ、待對はない。故に何處に六根と六塵との交渉があるか。六根とは、吾人の所有せる眼、耳、鼻、舌、身、意、六塵は、之に對する客觀的の、色、聲、香、味、觸、法の六境を謂ふ。獨露身なるが故に、何れの處にか六塵を著けんとの意。枯藤は、古き藤椅子でもよし又は木に纏へる古藤葛でもよし。其れに倚り懸つて眺むれば、吾は山を見、山は吾を見て、何れが吾か山かの區別も無くなつたとの意。之を人境不二の境界と曰ふ。

此處が偈頌たる所以で、大に眞理を發揚してゐるのである。今は詠歎的の助字彼の唐の李白も、流石は斯道の大家で、次の五言絶句の如きは、やはり一種の偈頌である。

獨坐敬亭山 (仄起粘法)

唐 李

白

衆鳥高飛盡。孤雲獨去閒。相看兩不厭。只有敬亭山。

之は忘我の境で、只だ敬亭山のみあると曰ふ。亦人境不二の境界。何れの處にか根塵を著けんと同一意旨。

同

(平起不粘法)

焚香獨坐長松下。風吹寒露濕禪衣。有時定起下雙澗。瓶汲五更殘月歸。

五更は、夜明け。早起して佛壇に阿迦を供せんとして、西方山の端に入り残れる月影を宿せる谷河の水を汲んで寺に歸るだけの意。純然たる漢詩である。

同

(平起粘法)

空林卓錫トニ幽栖。冷淡家風實可悲。荷葉滿地無線補。白雲爲我坐禪衣。

空林とは、秋の山を謂ふ。樹木の葉が落ちて空漠であるから。卓錫は、錫杖を高く立て懸け置く意。幽栖は静かな奥深い住居。冷淡は今日の冷淡とは異なる。俗熱なき淡泊の意。可悲は少しなさない言ひ振りであれど、枯淡の生涯を意味した者。荷葉云々は、一池荷葉衣無盡の意である。池に満てる蓮荷が、其儘吾が衣裳ゆゑ、絲以て之を補ひ緩る心配はないと云ふこと。只だ文字を借るのみ。

故に或は荷葉を衣と爲し、或は浮び來たる白雲を衣と爲して、其の間に無我の獨露身を坐禪せしめ居るとの意。

是れも偈頌と云ふ程の者ではない。

同

(仄起粘法)

終日搬柴運水中。分明顯露主人公。三千日月觀成敗。坐斷須彌第一峰。

之は偈頌である。運水搬柴は、山中人の常住三昧。我が永平寺に於ては、其の外

春は巖作務ワラヒサムや、筍作務タケノコサム。秋は裏山に大根作務。續いて雪の軒がこひ作務。冬は雪作務。晴天の日は掃除ソウジの日天作務。何れも分明に主人公を顯露して活動してゐる。之が本山安居の商賣である。決して之を厭ひ苦にしてはならぬ。厭ひ苦にする者は、

主人公を滅却せる所の臭皮袋の有象と曰ふべきのみである。

三年の日月とは、一年は舊曆で三百六十日。故に十年ならば三千六百日。山居十年以て吾人の道行が圓滿なるや將た缺失があるか、無事に主人公を顯露し居れば成キである。若し臭皮袋ならば敗イである。之を觀ミるとの意。然るに吾れは幸ひ障魔もなく此の須彌山の第一峰、即ち鳳儀山の眞只中マツダナカに坐禪して、日々是れ好日の佛境界を現出して居るとの意。氣象高邁。流石は大智禪師である。

斷トは坐についての助辭。故に坐し切るとか、絶對的の坐とか、即ち坐禪一枚に爲る意。

右の外尙多數あれど、殆ど同一ゆゑ之れで省略する。併し大智偈頌は、難解の偈頌

の方が多數である。

次に宋の蘇東坡居士が、照覺常總禪師に呈せし偈に曰く、

溪聲便是廣長舌。山色無非清淨身。夜來八萬四千偈。他日如何舉コ似人。

(平起・不粘法)

然るに禪師は之を見て然りと爲して、悟道を證明せられたと云ふ。是れ亦純然たる偈頌である。普通に口を開けば、溪聲廣長舌、山色清淨身と云ふのは、便ち東坡の此の句である。此の意味を曹洞宗の開祖道元禪師は、和歌に詠じて、

溪タニの響ヒジキミネ嶺リに鳴ナく猿サルたえだえに、

たゞ此經を説くところを聞け。

峰の色溪の響も皆ながら、

我が釋迦牟尼の聲と姿と。

全く其の通りである。谷川の潺湲センクワンたる水聲が、其の儘諸法實相の説法である。又山

岳の翠色が、其の儘佛陀の清淨法身である。畢竟人我二面なく、生佛不二の實相であるから。天地同根萬物一體と云ふも同じ道理で、佛の説法は、法爾如然ハツニニヨク。溪聲の法爾如然と同一枚。佛の淨身は何等の汚穢なく、内外表裏の私もなく、全く碧山翠嶺の、表裏もなく穢れのないと一如である。故に萬物一體と曰ふ。彼は憎い、此は可愛い。此物は欲する、彼物は欲しくないでは、所謂物我相對的の、六塵が六根に涉入して、六根は塵埃に汚濁せらるるのである。故に凡身解脱を高唱するのである。然るに若し大死一番しての後の如法活動ならば、其れが即ち溪聲の廣長舌と、山色の清淨身と一體不二と爲るのである。之が起承二句の説明。

次に八萬四千偈とは、人間の塵勞とて、種々の邪見や煩惱に、八萬四千ありと云ふ。無論法相學上の黑豆勘定なれど、一應の理窟で、色々と乗じて八萬四千と爲る。法門も亦是等を退治する爲に八萬四千ありと云ふ。便ち一種の對傷療法である。委しくは諸乘法數に出でてゐる。要するに八萬四千、一々の法に一偈ありと假定して、

東坡は八萬四千の偈と曰つたのである。夜來とは昨夜よりとの事で、從來と云ふに同じ。是れまでの各種法門を悟入した後日に、如何様にして人々に擧げ示すべきかとの意で、之は其の裏面に如何様に説き示す必要もないとの意を含む。何故なれば説かんとする吾れも清淨法身なれば、聞かせらるる衆生も亦同一の清淨法身であれば、恰も水に水を入れ、火に火を加ふる如き者である。故に何にも態々舉似する必要もあるまいとの意。法華經の中に、心佛及衆生、是三無差別と説くのも、或は諸法實相と説くのも、天台にて一色一香無非中道と言ふのも、皆音聲は佛の廣長舌色相は佛の清淨身であるからである。故に常總禪師も之を見て、然り然りと證明せられたのである。此處が偈頌と漢詩との趣旨を異にする所以である。之を要するに世俗の漢詩中にも偈頌あり。又僧侶の偈頌中にも漢詩がある譯である。畢竟は其の作る所の形式が全く同一一致であるからである。故に偈頌を學ばんと欲せば、勢ひ漢詩を學ばざるべからず。漢詩の作成法をも了知せずして、直に偈頌を作らんと欲す

るは、中等學校をも卒業せずして、直に高等専門學校に入らんとする如き者である。

尼戴益の詩に

盡日尋春未見春。芒鞋踏遍隴頭雲。歸來偶過梅花下。春在枝頭已十分。

(仄起・粘法)

之れも一種の偈頌である。眞理を説き得て面白し、佛を他方に尋ねたとて、探り得べき者ではない。自己の胸三寸に向つて汝は何物ぞと質問せば、卻つて眞の主人公に相見せん。

一休禪師の歌に

極樂は西にもあれば東にも、來た(北)道さがせみんな身(南)にある。

と。流石は一休禪師だ。全く其の通り。

碧巖錄第五十三則に、

舉馬大師、與百丈行次、見野鴨子飛過。大師云、是什麼。丈云野鴨子。大師云、什麼處去也。丈云飛過去也。大師遂扭百丈鼻頭。丈作忍痛聲。大師云、何會飛去。

是の問答が分れば、春在枝頭已十分の意も明瞭に分かる。馬大師とは、馬祖道一大和尚。百丈とは、百丈懷海禪師。野鴨子とは鴨の事。什麼は當時の俗語で、今日の如何に同じ。野鴨子と云つたとて、彼方此方を見廻はすやうでは、眞の野鴨子を發見することは不可能である。退身三步以て如何んと、深く工夫し見るべし。春は枝頭に在つて已に十分。野鴨子と汝とは是れ同か是れ別か。其處を篤と研究せねばならぬ。

次に蘇東坡の詩に

廬山煙雨浙江潮。未到千般恨不消。到得還來無別事。廬山煙雨浙江潮。

是も亦最も有名なる詩であるが、やはり純然たる偈頌である。巧妙極りなし。前

半は凡身未解脱。所謂未到地の見解で、後半は解脱して安心已到の境界を述べた者である。之を喩へて略解せば、學校卒業以前の顔面と、卒業以後の顔面に差別ありや否や。邪惡心のあつた時の心臓と、正善心の起つた時の心臓に區別ありや否や。三十歳以前の釋迦牟尼と、三十歳以後の釋迦牟尼に、幾らの差別ありや。解脱以前にも二杯の御飯を戴いた。解脱以後にも二杯の御飯を戴く。此に省察する所がないならば、未だ到らざる時で、千も萬も恨は消えない。残念至極。然れども其處に省察が出来たならば、到得還來無別事の意も明瞭になる。虚言を吐かば舌を抜かれ惡事を爲さば手が後に廻はる。盧山には煙雨し、浙江には潮が満干する。此の理を悟らずんば、彌勒下生の時を待たずばなるまい。偈頌門を説く序を以て、徒に挖泥滯水し、眉鬚墮落を顧みなかつた。識者の一祭を博するのみ。

第五章 本書中記載の作詩家略傳

但し排列は記載中の順序に依る。

菅 茶 山

備後神邊の人。名は晉帥。字は禮卿。通稱太仲。私塾黃葉夕陽村舎を建てて子弟を教育し、特に詩を以て鳴る。同國福山侯に聘用せられ、爲に私塾を郷校と爲し、名を廉塾と改む。寛政十年八月歿す。壽八十。詩集を黃葉夕陽村舎と稱す。前後兩編あり。

廣 瀬 淡 窗

豊後日田町の人。名は建。字は子基。俗稱求馬。淡窓又は峇陽と號す。筑前の大儒龜井南溟に學び、詩名特に高し。私塾を咸宜園と曰ふ。育英に従ふこと五十年。安

政三年十一月歿す。壽七十五。大正四年十一月正五位を贈らる。詩集を遠思樓詩鈔と曰ふ。前後兩編あり。淡窓の窗を窓若くは窗に作る。併し窓は俗字である。故に本書では殆ど皆窗に作れり。

平野 五岳

眞宗大谷派の僧。豊後日田町の願正寺に住す。名は聞慧。古竹と號す。廣瀬淡窓の咸宜園に學び、詩及び書畫を善くす。世に詩書畫三筆の稱がある。明治二十六年三月歿す。壽八十三。

長 三 洲

豊後日田町の人。名は茂ミツ。字は世章。通稱光太郎ミツタラウ。三洲と號す。咸宜園に學び、神才秀悟。淡窓目して神童と爲す。又大阪に遊びて、廣瀬旭莊の家塾に學ぶ。攘夷論起るや、長藩高杉晉作等の率ある奇兵隊に投じ、大に勤王の爲に奔走せり。故に明治維新の成るや、出でて文部大丞に累進し、明治大帝の爲に習字の御補導を承つた

と稱する。明治二十八年歿す。壽六十七。著書には三洲居士集十一卷あり。

廣 瀬 旭 莊キョクソウ

名は謙、字は吉甫。旭莊又は梅墩バイトンと號す。日田町の人。淡窓の弟である。一時咸宜園の教授を監督せしも、間もなく大阪に出で、家塾を開きて教授せり。作詩の多きこと、我邦古今に稀なりと稱す。清國兪曲園の來たるや、旭莊を以て東國詩人の冠と爲し、東瀛詩選に上下二卷として之を蒐録したり。文久三年八月歿す。壽五十七。詩集には梅墩詩集十二卷、梅墩遺稿二卷あり。

秋 月 橘 門キツカド

日向の人なり。名は龍、字は伯起。通稱小相。橘門と號す。年十六にして日田に來たり、淡窓に師事す。後又筑前龜井昭陽の門に學び、其の他三都を遊歴して日向に還る。豊後佐伯藩サイキの教授と爲り、又明治元年徵されて三河縣の知事と爲り、又轉じて葛飾縣の知事とも爲れり。桂冠して後東京に住し、深く佛理を崇め、手に念珠を

離さず。又終生殺生戒を持したりと云ふ。明治十三年歿す。壽六十二。詩集には橘門韻語二冊あり。

唐 王 維

字は摩詰。唐代太原の人。玄宗帝の開元初年、十九歳にして進士及第。累遷して三たび尚書右丞に擧げらる。詩名最も高し。又畫を能くす。文人畫の開祖と仰がる。壽六十一。十七歳の時の名吟は、本書中に記載してある。

唐 李 益

字は君虞。唐代涼州姑臧の人。第八代代宗帝の大曆四年に進士及第。詩を獻じたる爲、憲宗帝召して秘書少監と爲す。後更に禮部尚書に遷り致仕して卒す。

唐 王 翰

字は子羽。并州の人。少うして豪宕。才を恃んで不羈。縱酒を喜ぶ。厩に名馬多く家には妓樂を蓄ふ。夙に張説の推許する所と爲り、祖詠、杜華、等と親善。杜少陵

以て翰が鄰居を願ふに至れり。翰の才名の當時に喧美せらるるや、高しと謂ふべし森槐南曰く、清朝の李滄溟、王鳳州と共に唐一代の絶句に就いて、其の壓卷を定めんと欲したれば、滄溟は、王昌齡の秦時明月を推し、鳳州は、王翰が此の葡萄美酒を推したり。亦以て翰が此の作の警動異常なる者あるを證すべしと。

唐 李 白

字は太白、青蓮と號す。岷山に隠れて、州舉あるも應せず。樂しむ所は醉郷酣飲の興に非ずんば、嘯山吸水の適である。一度玄宗帝の徵に應じて京師に至るも、讒に逢うて直に去る。太子の賓客賀知章が一見して曰く。子は誠に謫仙人なりと。壽六十二。唐朝第一の詩人である。

唐 劉 廷 琦

森槐南曰く、劉は唐の玄宗帝開元中の人。其の爵里、考を失すとある。而して此詩を評じて曰く、俯仰低回、懷古の致を曲盡す。又思は悲思の思で思ひ。故に讀んで

去聲と爲す。聲律に疎なるに非ずと。

唐 長孫佐輔*

唐朝九代德宗帝時代の人。弟公輔仕へて吉州の刺史と爲る。佐輔往いて焉れに依れりと云ふ。刺史とは州知事。

唐 柳宗元

字は子厚、唐代河東郡の人。博學宏詞科に及第して、文名特に著はる。永州の司馬より柳州の刺史に徙る。由つて柳州と號す。永州に於ける間の記事文の如きは、實に古今獨歩の名文である。壽四十七。

明 高青邱*

名は啓、字は季迪。明代長州の人。吳の淞江の青邱に居る。由つて號と爲す。明初吳下に詩人多し。青邱その冠たり。元史を修あ、戸部侍郎に擢でらる。時事を諷詠して帝の怒に遇ひ、遂に腰斬せらる。壽三十九。

唐 張謂

唐第六代玄宗帝の天寶二年に進士及第。使を長沙に奉じ第八代代宗帝の大暦年間禮部侍郎と爲る。謂少うして書を嵩山に讀み、清才拔萃、汎覽流觀。敢て權貴に屈せずして、自ら奇骨に矜りたりと云ふ。

唐 沈佺期

字は雲卿、唐代相州内黄の人なり。進士及第。協律郎より給事中考功郎に除せらる。後又起居郎兼修文館直學士に拜し、帝の宴に侍る。尋いで又中書舍人太子詹事を歴て、玄宗帝の即位開元の初に卒す。

宋 蘇軾

名は軾、字は子瞻。宋代眉山の人。蘇老泉の長子。母程氏の教育を受け、禮部の試験に應ず。主任官の歐陽脩曰く、吾れ當に此人の一頭地を出だすを避くべしと。室を東坡に築きて、東坡居士と號す。儒學の外、禪に參じて、造詣尋常の律すべきに

非ず。弟蘇轍と俱に宋代文豪の白眉たり。數州に歴仕し、遂に常州にて卒す。壽六十。詩文集に東坡集あり。父老泉を老蘇、子瞻を大蘇、蘇轍を小蘇と稱す。

祇陀大智

肥後宇土郡長崎村の人。七歳出家。二十五歳の時海に航して元に入り、在元十一年歸朝するや加賀河内の莊に一字を創建し師子山祇陀寺と號す。後肥後の太守菊池武時の請に因り、同國菊地郡に鳳儀山聖護寺を構へて之に寓せり。後又肥前高來郡に赴いて、水月庵を築いて養老の所と爲し、後村上天皇の正平二十一年十二月遷化す壽七十七。遺著大智偈頌、大に叢林に行はる。

村上佛山

名は剛、字は大有。俗稱彦左衛門。豊前稗田村ヒユタの人。幼時秋月侯の世臣原古處に學び、後又龜井昭陽に學ぶ。明治十二年九月歿す。年七十。詩集を佛山堂詩鈔と曰ふ。

唐杜甫

字は子美、少陵と號す。唐代襄陽の人。玄宗帝開元十九年吳越の間に客遊す。同二十三年進士に應じて及第せず。齊趙の間に遊びて詩思を養ふ。其後諸官を経て工部員外郎と爲る。故に人杜工部と稱す。壽五十九。詩律に工。李白と俱に唐代の詩聖と稱せらる。

唐嚴武

字は季鷹。世々華陽に居る。幼時より豪爽。玄宗帝天寶中劍南節度使と爲り、杜甫と最も厚し。鄭國公に封せらる。

天胤

著者松崎覺本、字は天胤。叱石シツセキ又は金華山房と號す。大分縣豊前宇佐郡の産。本姓松本、名は實二郎。同郡和氣に生れ、十二歳の時叔父松崎覺道の養子と爲り、姓名を改む。十六歳豊後涵養舎に入學し、駕海米岳、同弟陽谷の兩先生に就いて漢文學を專攻し、二十歳の一月豊前藏春園に轉學して、恒遠精齋先生より特に漢詩の薰陶

を受くること約三年。後東京に遊學すること七年。著書には詩經詳解、漢詩入門、其他數種あり。

唐 無名氏

無名氏とは、我國にて某氏と曰ふに同じ。和歌集などでは、讀む人知らずとある。同意味である。森槐南曰く、伊州歌は、便ち唐の開元中、嘉運と云ふ者、西涼の節度使たりしとき、採進せし曲にして、偶ま其の姓氏を逸すと。

叱石道人

前述松崎の號である。叱石とは、神仙傳に、黃初平と云ふ者が、金華山中にて牧羊してゐるのを、兄の初起が聞いて、一日道士に隨ひ尋ね到り、羊何處に在るかと問へば、初平曰く、近く山の東に在りと。初起往いて視るに、唯だ白石無數を見るのみ。因つて初平に問ふ。便ち俱に往き、初平鞭を以て叱叱羊起きよと言へば、白石皆起きて、大小の羊數千頭と成つたと云ふ故事から取つたのである。無論無可有の

説なれども、蚩々たる頑民も、起しやうに因つては覺醒し得べしとの喩にはならう。又其れが著者の信念である。

唐 盧綸

字は允言、唐代河中蒲縣の人なり。第八代代宗帝大曆の初め進士に及第せざれども、無載其文を取つて以て閩郷の尉に補す。監察御史に累遷し、又檢校戸部郎中に遷る。大曆十才子の一人として稱せらる。十才子とは、吉中孚。韓翃。錢起。司空曙。苗發。崔峒。耿漳。夏侯審。李端。及び盧綸。

唐 雍陶

字は國鈞、蜀の成都の人。詩を能くす。唐第十六代宣宗帝の太中八年、國子學の毛詩博士より出でて、簡州の刺史と爲る。

唐 高蟾

唐第十八代僖宗帝の乾符二年進士及第。第十九代昭宗帝乾寧中御史中丞たり。初め

累擧すれども及第せず。詩を作つて不平を述べたれば、明年李韶の知る所と爲つて貢擧及第すとあり。

唐 王 勃

字は子安、唐代絳州龍門の人なり。兄弟三人、皆材名あり。杜易簡稱して三珠樹と爲す。第三代高宗帝の時、對策高第す。未だ冠せざるを以て朝散郎を授け、後に虢州の參軍に補せらる。其の父交趾の令に左遷せられしに囚り、之を省せんとして海を渡り、水に溺れて死す。年二十九。

唐 王 之 渙

唐代并州の人、詩を善くす。少うして俠氣あり。從遊する所は、皆五陵の少年。悲歌縱酒す。詩は情致雅暢にして、齊梁の風を得たり。作ある毎に、樂工輒ち取つて以て聲律に被らしめたりと云ふ。

唐 盧 仝

茶事を善くして自ら玉川子と號す。嘗て月蝕の詩を作つて、以て元和の逆黨を譏る。韓愈其の工なるを稱す。甘露中に官者の爲に殺さる。元和は唐第十一代憲宗帝の年號。逆黨とは李逢吉、李宗閔、兩李朋黨の隙爭。甘露變とは、第十四代文宗帝の太和九年十一月の變を謂ふ。宦官大に跋扈せる爲の争である。

梁 川 星 巖

名は孟緯、字は公圖。通稱新十郎。美濃の人。江戸に於ては玉池吟社を開き、京都に於ては鴨沂小隱と曰つて、吟社を設け、到る所漢詩を以て鳴る。又禪に參じて識見爲に一頭地を抜く。又一面勤王の士として、逸事多し。安政五年九月歿す。壽七十。明治二十四年四月正四位を贈らる。詩集には、星巖集あり。近代詩人の大家大沼枕山、小野湖山、森春濤及び彦根藩の名族岡本黄石等、著名の士、皆詩を星巖に學びたりと云ふ。

元 田 竹 溪

名は彝、字は伯倫、通稱百平。竹溪と號す。豊後速見郡杵築町の人なり。帆足萬里の門に入り、學成りて杵築藩の教授に任せらる。時に國家多事、因つて攘夷私論を作り、閣老に上る。爲に停職禁錮せらる。王政復古に及び赦宥せられて藩の大屬と爲り、力を民政に盡したり。明治十三年二月歿す。年八十。著書には、大學標註、中庸集解、攘夷私説等あり。

藤井竹外

名は啓、字は士開、竹外の外、雨香仙史との號あり。攝津高槻藩の名族たり。頼山陽に學び、晩年京都に住す。作詩は絶句以外に出でず。故に老儒碩學も、氏の絶句に推服して、絶句竹外と稱するに至れり。慶應二年七月歿す。壽六十。竹外詩鈔、竹外二十八字詩等の著あり。

田能村竹田

名は孝憲、字は君彝、仙齋と稱す。後に行藏と改む。豊後竹田町の産なるを以て、

竹田と號せり。明治の軍神廣瀬中佐と同郷たり。京師に赴き、村瀬考亭を師とす。又我國填詞ナシの衰頹せるを慨き、填詞圖譜を撰び、世に刊行す。所謂宋詞元曲と云ふ宋詞〇なる者が是れである。又詩餘とも曰ふ。夙に南畫を好み、遂に其の堂奥に達し、世に畫聖を以て稱せらる。天保六年八月歿す。壽五十九。父を碩庵と曰ふ。

岡松甕谷

名は辰、字は君盈、甕谷は其の號なり。豊後大分郡高田村の人、業を帆足萬里に受く。熊本藩の侍講と爲り、或は吏職と爲る。明治維新に及び、大學少博士に補せられ、後に帝國大學教授と爲り、學士會院に列せらる。明治二十八年二月歿す。壽七十六。詩集には甕谷遺稿あり。然れども氏の長所は寧ろ文章にあり。

唐杜牧

名は牧、字は牧之。進士及第後、賢良方正に擧げらる。侍御史より出で、宣城の幕僚と爲り、後二十餘年にして四郡守を経て、殿中侍殿史に遷り、又中書舍人に遷

つて卒す。年五十。詩に工、人稱して小杜と曰つて、以て老杜の杜甫に別つ。

唐 孟 郊 然

字は浩然、唐代襄州襄陽の人。初め鹿門山に隱る。五言の詩に巧、年四十、京師に出で、諸名士と遊び、特に張九齡、王維等と親交あり。玄宗帝開元の末、疽を病んで卒す。年五十一。

宋 黃 山 谷

名は庭堅、字は魯直。山谷は其の號。進士及第後、北京に於て教授す。後出で、諸州に知と爲り、宣州に居る。江西詩派の祖と仰がれ、蘇軾に配して蘇黃と稱せらる。山谷嘗て曰く、士大士三日書を讀まずんば、理義胸中に交はらずと。

脇 蘭 室

名は長之、字は子善、儀一郎と稱す。豊後速見郡豊岡町の人。蘭室又愚山と號す。始め三浦梅園に學び、年二十一肥後に遊び、藪孤山に學ぶ。又大阪に赴き、中井竹

山の門に入る。然れども竹山は以て賢友と爲せり。細川侯之を招き、儒員に列す。文化十一年十月歿す。壽五十一。著書には愚山集、蘭室集略等あり。

宋 陸 放 翁

名は遊、字は務觀。放翁は其の號。宋代山陰の人。性忠孝。然れども文學の交を爲すに禮法に拘はらず。人其の類放を譏る。因つて自ら放翁と號す。後渭南伯に封せられ、食邑八百戸。壽八十五。詩作の多きこと、唐宋を通じて第一と云ふ。

唐 韓 退 之

名は愈、字は退之。昌黎と號す。唐代鄧州南陽の人なり。年廿五にして進士及第。監察御史に任せらる。第九代徳宗帝の貞元中貶せられ、憲宗帝の元和の初に權りに國子博士を知り、河南の令を拜し、又潮州の刺史に貶せられ、又召されて國子祭酒に拜す。後又京兆の尹兼御史大夫と爲り、又吏部侍郎と爲る。第十二代穆宗帝の長慶四年に卒す。年五十七。禮部尙書を贈らる。唐代第一流の文豪たり。柳子厚と並

稱せらる。

賴山陽

名は襄、字は子成、山陽は其の號。安藝竹原町の人、藝州侯の藩儒春水の長子なり。家學より出で、尾藤二州に學び、後京都に出で、鴨河の畔に寓居して、山紫水明處と稱す。教授の傍ら日本外史及び日本政記を著作して、天保三年九月歿す。壽五十三。明治初年に正四位を贈られ、又昭和六年九月、百年祭に當りて從三位を追贈せらる。

宋方秋崖

名は岳、字は巨山。秋崖と號す。詞翰に長ず。小菴あり。方澄孫之に序して曰く、奇々怪々の文、其人の如く、磊々落々の氣、其文の如しと。官は中秘書たり。出で、康廬秀水の二郡に守たり。

龜井昭陽

名は昱、字は元鳳。通稱昱次郎。空石又昭陽と號す。道載の長子。福岡藩の儒醫。天保七年歿す。年六十四。著書には、尙書考、讀學庸解、讀孟子、國語獨了等あり。

安藤秋里

名は秉、字は維義。秋里又は介軒と號す。通稱太郎。大阪に住す。篠崎小竹の門人たり。嘉永安政年間の人と云ふ。俱に孝明天皇の年號。

僧雲華

名は大舍、雲華と號す。豊後竹田町滿徳寺に生まる。後に豊前下毛郡古城の正行寺に住す。博學洽識。出で、東本願寺の講師たり。特に蘭畫を善くし、仁孝天皇其の名を聞き給ひ、蘭畫を獻せしむ。人以て殊榮と爲す。賴山陽と親交あり。山陽嘗て耶馬溪に遊ぶや、雲華之に伴ひ、歡待到らざるなかりき。嘉永三年十月歿す。壽七十八。

草場船山

名は廉、字は立大、肥前の人、佩川の男なり。家學より出で、篠崎小竹に學び、詩書を能くし、又墨竹に巧み、後京都に出で本願寺の大學寮に久しく漢文學を教ふ。明治二十年一月歿す。壽六十九。大正十三年二月從五位を贈らる。

齋藤 拙堂

伊勢津藩の儒士。名は正謙、字は有終、俗稱徳藏。拙堂又鐵研と號す。致仕の後拙翁と稱す。文章を能くし、拙堂文話最も著名である。慶應元年三月歿す。壽六十九。大正十三年正五位を贈らる。

秋山 玉山

名は定政、字は子羽、通稱儀右衛門。玉山又青柯と號す。豊後鶴崎の人。年十九にして細川侯より儒員に擢んでられ、江戸に出で、林鳳岡に就いて業を受くること前後十年。博學洽聞。詩及び古文辭に長ず。寶曆十三年十二月歿す。壽六十二。著書には玉山詩文集、玉山遺稿等あり。

三浦 梅園

名は晉字は安貞、梅園又變山、東川等と號す。豊後東國東都富永村の産。醫を業と爲す。寛政元年三月歿す。壽六十七。明治四十四年名教に功勞ありしを以て、從四位を贈らる。著書には、玄語、贅語、敢語、詩轍、梅園集、媮婉錄、梅園叢書、歸山錄、養生訓等數十部あり。

唐子 子漪

名は漬^{フシ}字は子漪、唐朝の詩人。未だ其の傳を詳にせず。人名辭書にも其名見えす。

米良 東嶠

名は倉、字は子庾、通稱倉次郎。東嶠は其の號。豊後日出町の人。明治四年三月歿す。年六十一。幼にして帆足萬里に學び、後四方に遊學して、佐藤一齋、朝川善庵、龜井昭陽等に學ぶ。歸國して萬里の家塾を受け、又藩の家老職と爲る。著書には、讀書纂言、東嶠存稿等あり。

清 袁 隨 園

名は枚、字は子才、隨園と號す。清代錢塘の人。乾隆四年の進士。官は知縣に至る。年四十意を仕途に絶ち、隨園を江寧城の西に開いて、吟詠著作を樂しむ。第七代仁宗帝の嘉慶二年卒す。年八十二。

松 本 奎 堂

名は衡、字は士權、謙三郎と稱す。三河の人。刈谷藩主土井侯に仕ふ。江戸昌平覺に學び、京都にて教授す。文久三年中山侍從を奉じ、勤王の兵を大和に擧ぐ。事敗れて自殺す。年三十四。明治二十四年十二月從四位を贈らる。詩文集に、奎堂文稿奎堂遺稿あり。

劉 君 鳳

名は翥、字は君鳳、通稱三吉。石舟、石秋、綠芋村莊等の號あり。豊後玖珠郡の人。本姓合谷。其の祖先が漢の高祖から出たと云ふを以て、劉と稱せり。淡窗門下の秀

才。中島子玉と併稱せられて、宜園の雙璧と呼ばれたり。年五十を過ぎて帷を京都に下す。元治年間禁中に召されて經書を講せり。明治二年五月歿す。年七十四。著書には、綠芋村莊詩鈔正續四編あり。

帆 足 萬 里

名は萬里、字は鵬卿、通稱は里吉。豊後日出藩家老職帆足典膳の第二子なり。又文簡と號す。經濟、天文、醫法に通ず。年十四教を脇屋蘭室に受け、後大阪に出で、中井竹山に學ぶ。歸つて再び蘭室に學び、學業大に進む。詩文は三浦梅園、廣瀬淡窗と共に豊後の三偉人と稱せらる。父の後を繼いで亦家老職と爲つて藩政を釐革すること多し。嘉永五年六月歿す。年七十五。明治四十五年從四位を贈らる。

大 槻 磐 溪

名は清崇、字は士廣、通稱平次。磐溪又寧靜子と號す。仙臺藩醫磐水の第一子なり。明治十一年六月歿す。年七十八。大正十三年二月從五位を贈らる。著書近古史談は

最も著名である。詩集には、寧靜閣詩文集あり。

宋 道 潛

釋道潛の臨平道中の詩は最も有名なれども、未だ師の傳記を詳にせず。支那人名辭書にも其の名見えず。

明 石 秋 室

名は肅、字は雨若、通稱大助。秋室と號す。豊後杵築藩の人なり。佐伯藩士明石氏子なきを以て養子と爲さんと乞ふ。秋室曰く、貴藩は頗る圖書に富む。余をして書物奉行たらしめば應諾せんと。藩侯之を聞いて書物奉行と爲す。是より群書を涉獵し、學識大に進む。安政年中に歿すと云ふ。壽不詳。

恒 遠 精 齋

名は仁、字は子信、通稱敬吉郎、精齋と號す。豊前藥師寺村の儒。幼にして父醒窗の家塾に學び、十八歳京師に遊學し、後又肥後月田蒙齋に學び、二十三歳の時歸つ

て父の後を繼いで私塾を擴張し、名づけて藏春園と曰ふ。經學に邃く、又最も漢詩に長せり。著者は薰陶を蒙むること約三年。後又京都龍谷法主の聘に應じて、文學寮の教授と爲る。明治二十八年十一月六日歿す。年五十四。父醒窗は廣瀬淡窓の高弟で、通稱頼母。其の門下より勤王の國防僧月性を始め、國事に奔走せし諸名士の出でたるを以て、大正四年十一月醒窗に従五位を贈らる。

角 田 九 華

名は簡、字は大可、通稱才次郎、九華と號す。大阪府岡藩邸の計吏仲島休治の子なり。豊後岡藩即ち竹田町の醫士角田東水、九華の才を奇として養ひて子と爲す。文化の初め田能村竹田と俱に藩政紊亂を憂慮して、屢封事を上りたり。安政二年十二月歿す。年七十二。著書中、近世叢語續近世叢語の如きは、最も世に推重せらる。

宋 邵 康 節

名は雍、字は堯夫、安樂先生と號す。洛に居ること四十年。宋朝第六代神宗帝熙寧

の初、著作郎に徴されたれども至らず。卒して康節と諡す。年六十七。皇極經世六十卷、擊壤集二十卷を著はす。程子稱して曰く振古の豪傑なりと。

龜田 鵬齋

江戸の儒者、名は長興、字は稗龍、鵬齋又は善身堂と號す。井上金峨の門に學ぶ。文政九年三月歿す。年七十三。論語撮解、國學者、善身堂文集等あり。

唐 白樂天

名は居易、字は樂天、唐代太原の人、進士及第後、對策して翰林學士と爲り、事に因つて江州の司馬に貶せらる。又忠州の刺史に徙り、穆宗帝の長慶中書舍人より杭州の刺史と爲り、武宗帝會昌の初年に刑部尙書たり。致仕して六年に卒す。年七十五。尙書右僕射を贈らる。詩集には白氏長慶集あり。

長 梅外

名は允、字は世文、梅外又南梁と號す。豊後日田郡の人。淡窓の門に學ぶ。學成り

て長州天草等にて教授す。長子三洲、長州に入り尊王攘夷の舉に投せしを以て、累を父梅外に及ぼし、追捕甚だ急なり。次子黄は、捕へられて獄に死す。梅外僅に妻兒と共に遁れて長州に走る。王政復古に及んで東京に遷り、明治天皇伊藤博文の邸に臨幸せらるるや、御前に召されて書を揮毫し、明治十八年十月歿す。年七十六。著書には梅外詩鈔、古傳彙箋等あり。

唐 王仲初

名は建、字は仲初。進士及第の後、陝州の司馬と爲る。韓愈、張籍等と時を同じうし、殊に籍と相友とし善し。巧に樂府歌行を作れり。

唐 高達夫

名は適、字は達夫。唐代滄州渤海の人。侍御史諫議大夫等を歴て、蜀の彭州の刺史と爲り、又入つて刑部侍郎と爲り、又出でて渤海侯に封せらる。年五十にして始めて詩を作りて工なり。第八代代宗帝の永泰初年卒す。

唐 李 君 虞

名は益、字は君虞。唐代涼州武威郡姑藏の人。代宗帝の大曆四年進士及第。後に幽州の劉濟營内副使と爲り。詩を獻じたる爲、第十一代憲宗帝召して秘書少監と爲す。後更に禮部尙書に遷り、致仕して卒す。

唐 韋 蘇 州

唐朝第六代玄宗帝天寶の時、遊幸に扈從し、代宗帝永泰中洛陽の丞、京兆府戸曹參軍に任せらる。德宗の建中元年比部員外に除せられ、出でて除州江州の刺史と爲り、同じく貞元の初、又蘇州の刺史たり。故に韋蘇州とも稱す。長安京兆の人なりと云ふ。名は應物。

唐 崔 國 輔

森槐南曰く、崔國輔は、王珙の近親なるに坐して、竟陵の司馬に貶せらる。竟陵は楚の地。故に楚客を以て自ら況ふと。支那人名辭書中にも其の名を缺げり。

伊 藤 仁 齋

名は維楨、通稱源佐。仁齋又は古義堂と號す。京都の大儒。三十六歳にして論孟古義、及び中庸發揮等を草定して、自説を標榜し、宋儒の性理説を排撃して、古學派を開き、帷を下して教授す。天下の士京を過ぐる者、謁を乞はざるなく、唯だ全國中、飛驒、佐渡、壹岐の人のみ、遂に門に及ばざるのみと。教授すること四十餘年。東山天皇の寶永二年三月歿す。壽七十九。明治四十年十月正四位を贈らる。

唐 鄭 谷

字は守愚、唐代袁州の人。故の永州の刺史鄭史の子なり。右拾遺と爲る。第十九代昭宗帝の乾寧中、都官郎中を以て家に卒す。六言の詩は、此の鄭谷始むと云ふ。

唐 李 商 隱

字は義山、唐代懷州河内の人。進士及第後、弘農郡尉に任せられ、後に侍御史に除せらる。又檢校工部員外を以て榮陽に卒す。文を作ること塊邁奇古。自ら玉溪生と

稱す。

梁川香蘭

紅蘭十七歳にして梁川星巖に嫁す。星巖時に三十二歳。詩を夫君に學び、畫を中村竹洞に學んで、俱に之を善くす。明治十二年三月、七十六歳を以て歿したり。詩集は女工餘事として、星巖集中に紅蘭小集二卷あり。

清宋竹垞

名は彝尊、字は錫鬯、竹垞は其の號。清代秀水の人。年十七、力を古學に盡し、家居十九年。藏書八萬卷。著述して倦まず。清の第四代聖祖帝康熙四十八年八月卒す。年八十一。經義考三百卷、曝書亭文集八十卷あり。

宋杜小山

名は秉、字は小山。未だ其の傳を詳にせず。茶酒に當つての詩は可なり有名なれども、支那人名辭書にもその名を列せず。

唐盧允言

名は綸、字は允言、唐代河中蒲縣の人なり。代宗帝大曆の初進士に及第せざれども、無載其の文を取つて閩郷の尉に補す。監察御史に累遷し、又檢校戸部郎中に遷る。大曆十才子の中の一人である。

唐韓君平

名は翹、字は君平、唐代南陽の人。第六代玄宗帝の天寶十三年進士及第。李勉、夷門を鎮する時、辟されて幕屬と爲る。第九代德宗帝の建中の初年駕部郎中、知制誥に除せられ、中書舍人に終ふ。大曆十才子の一人。

中島米華

名は大賚、字は子玉、米華と號す。豊後佐伯藩の人なり。十六歳淡窓に謁して教を乞ふ。一見以て異常の者と爲し、待つに殊遇を以てす。後二年頼山陽西遊して淡窓を訪ひし時、子玉をして侍らしむ。山陽童子と侮り一語を交へず。淡窓命じて其の

詩文を出して訂正を乞はしむ。山陽一讀、愕然として深く其の不明を謝したりと云ふ。爾來山陽は耶馬溪と并賞して已まざりしと云ふ。江戸に上り昌平黌に入り、擢でられて大學の齋長と爲る。歸藩して仕官す。天保五年三月歿す。年三十四。帆足門下の勝田季鳳、淡窓門下の中島子玉、竹田門下の高橋草坪、皆三十歳前後にて歿る。後人之を惜まざるはなし。

廣瀬青村

名は範治、字は世叔、豊前土田村の人。淡窓に學び、咸宜園の都講と爲る。淡窓子無し。因て子と爲し、家業を繼がしむ。一たび江戸に出で、又大分府内侯の賓師と爲り、學政を監督す。是時淡窓已に歿し。弟旭莊大阪に在り。其の子林外咸宜園に留守し、青村と鼎立唱和す。人稱して三廣と曰ふ。明治に及んで修史局編修に遷り、退官後半込に卜居し東宜園を開く。既にして華族學校に聘せられ、又山梨縣⁺徹典館に司教たること歳餘。明治十七年十二月歿す。年六十八。

藤田東湖

水戸藩の儒者、幽谷の子、名は彪、字は斌卿、通稱虎之助。後誠之進と改む。善く藩主齊昭を輔佐す。編輯官及び側用人たり。安政二年の震災に母と共に壓死せられたり。明治二十二年正四位を贈らる。

頼杏坪

藝州侯の儒員、名は惟柔、字は千祺、萬四郎と稱す。春水の弟。晚年郡代と爲つて政績あり。天保五年五月歿す。年七十九。

唐司空曙

字は文明、唐代廣平の人なり。進士及第。章阜に劍南に従ひ、第九代德宗帝の貞元中水部郎中たり。虞部郎中に終ふ。大曆十才子の一人。

唐賈島

字は浪仙、唐代范陽の人なり。洛陽に來たるや韓愈教へて文を作らしむ。初め浮屠

たり。無本と曰ふ。後に浮屠を去つて進士に擧げられ、武宗帝會昌の末年遂州の長江主簿を授けられ、又普州司倉參軍を以て司戸に遷り、未だ赴かざるに疾を得て卒す。年六十五。

河野 鐵兜

通稱絢夫、始め俊藏と稱す。名は維熊、字は夢吉。鐵兜と號す。播州の人。後播州林田藩主の聘に應じて、士籍に列す。藩校敬業館の教授と爲り、慶應三年二月歿す。年四十二。國學や和歌を野口隆正に問ひ、詩法を梁川星巖に受け、詩は最も其の嗜む所たりと云ふ。

唐 戴叔倫

字は幼公、唐代潤州金壇の人。蕭穎士に師事して門人の冠たり。李希烈反するや之を討じ杭州の刺史と爲る。後に容管經略に遷る。第九代德宗帝に中和節の詩を獻じて還るに及び、道にて卒す。年五十八。中和節とは、陰曆二月一日の稱

西郷 隆盛

維新の元勳、鹿兒島藩の士、吉之助と稱す。明治元年總督府參謀として東征し、陸軍大將兼參議に至る。六年征韓論を唱へて容れられず。辭して郷に還り、私學校を起す。十年同校黨に擁せられて兵を擧げ、敗れて城後の城山、岩崎谷にて自殺す。明治二十二年罪名を除かれて正三位を贈らる。氏は常に書を胸間に挿んで讀書を怠たらざりきと云ふ。

唐 趙嘏

字は承祐、嘗て浙西に家す。武宗帝の會昌二年、進士及第。十六代宣宗帝大中中に渭南の尉に卒す。

清 王子禎

字は貽士、阮亭又漁洋山人と號す清代新城の人。進士及第後、揚州推官を授けられ在任五年。退官後詩を以て海内に鳴ること五十餘年。官は刑部尙書に至る。著書に

は漁洋詩話、帶經堂集あり。第六代高宗帝乾隆三十年、文簡公と追諡せらる。

岸 富 仙

名は秀岳、富仙と號す。梅月、無爲等の別號あり。相模尾柄下郡小竹村に生まる。曹洞宗大學、及び中村敬字の同仁社等に學ぶ。性文雅に富み、漢詩文及和歌臨池の諸技に達す。詩は初め枕山に問ひ、後湖山に學び、歌は常師なし。萬葉古今を研究して成る。特に西岡宜軒、竹添井々等の名家と交友淺からざりきと云ふ。今尙老軀に策ち、貧民救濟、思想善導に活躍せりと云ふ。

清 厲 鶚

字は大鵬、樊榭と號す清代錢塘の人。第四代聖祖帝康熙庚午（五十三年）の舉人。詩を作るに精深峭潔、衆流を截斷して、自ら一幟を樹立せり。著書には樊榭山房集あり。

第六章 本文

標題。熟字。韻礎。轉句。作例。

第一節 春 の 部

(標題)【一】新年。立春節分ノ日。元旦。春日。早春。四方拜。人日小集正月七日。春日偶成。春日閑居。春日山莊。

(熟字)

○ ○ ○ ○

初陽 元旦

朝陽 朝日

春初

輕煙

● ● ● ●

舊歲

寸艸少シ芽ヲ出シタ草

暖氣

一笑

○ ● ● ○

新曆

新歲

椒酒シヤウシュ

傳飲杯ヲマハスコト

● ● ○ ○

饑寒カシラセシム

榮羹サイゴウ

太平

萬家

(韻礎)

● ○ ○ ○ 【真】

總津津スベテシシンドレモオモシロイ

萬家春

總精神ドレモイキ

草如茵クサインノゴトシ草ガシトネノヤウ

○ ○

● ●

○ ●

● ○

● ○ ○

○ ○ ○

輕陰 ウスグモ

煮餅 モチヲニ

殘雪

玉盤 野菜ヲ盛ル鉢

自由身

良辰 春ノヨキ

淡蕩 春景色

添歲

九重 御所

竹相鄰 梅ヤ松ナドト

春寒

歲首

嬉笑 うれシガリ

建寅 正月

萬天民 太古ノ人民

鶼鶼 朝廷ノ大

賀客

歡意 ころころ

啓端 元日ニナ

不憂貧 貧ヲヒヤラシヘズ

餘寒

煮茗 茶ヲニル

殘臘 冬ノノコ

舊年

醉芳醇 フヨキ酒ニエ

稱觴 杯ヲ手ニ

爆竹 竹鐵砲ヲ

恩澤 天子様ノ

政和

酒千巡 サンノムコト

芳辰 春風

艸色 クサイロ

嘶馬 馬ノ

胃寒 カシヤカス

斗當寅 正月ニナル

東風 春風

解凍 氷ヲトカ

風日 風ノアル

罷朝 役所カラ

綺羅新 袋ガデキタ

東君 春ノ神

瑞雪 ヌメダキ

遲日 春ノ日

雪消

綠鋪茵 草ガシトネ

輕寒

料峭 春風ノ

多士 多クノ

綵綵 きれいな

指回寅 正月ニナ

三元 元旦

柳眼 柳ノ新芽

賢相 賢キ宰相

聖恩

玉京人 都ノ人

祥光 メデタキ

座客 座ニヤル

簫鼓 笙ヒナリ

弄毬 手マリヲ

一番新 一段ト新シ

鶯聲 ウグヒス

節物 時節ノモ

青帝 春ノ神

萬家

啓昌辰 正月ニナ

探春 ヘルサケル

九陌 繁華ナ町

冠蓋 冠ヤ大傘

頌聲 御世ヲコト

逐時新 段々ト

迎陽 春ニナル

鞏道 天子ノ通

行樂 愉快ニシム

曙鐘 夜明ノカ

去年人

梅梢 梅ノコズ

萬戶

催暖 春ノホス

聖朝

暗催春 自然ト春

增年

萬屋

山色

雪殘

自通神

千門

雪濕 雪ガ地ヲ

清曉

九衢 繁華ナ

少年人

歡情 ヨコロブ

淑景 春ノヨキ

庭燎 庭火ヲタ

福祥 芽出度キ

四海春

今朝

樂事

民俗

綺羅 キモノ

柳色新

朝衣 禮服

盛德

風化 人民ヲ治

勝遊 アソビ

淑氣新

三杯

聖代 聖天子

軒冕 冠ト

壽杯

柳色新

陽暉 カガヤキ

待漏 夜明ケヲ

唯祝

四方

暖未勻

○ ○ 康哉 世ガ太平 得意 ● ● 端笏 役人 ● ○ 萬人 ヨロコビ
 光輝 カガヤク 水緑 當路 鞍馬 萬年 盡歡 スルヲ十分ニ
 街恩 クル 遠近 侍宴 エンハシメル
 人材 御所ニ參 拜賜 春事 水光 水ノ色
 朝官 旭日 春氣 慶門 カド
 鶯歌 庶俗 晴色 右文 プ文學ヲ貴
 輕霞 ウスガス 歡酒 コブ 物華 文明
 △天光 天ノ色 唯有 黎庶 立朝 笑歌 股肱
 風微 萬壽 新政 黎庶 立朝 笑歌 股肱
 優恩 五色 黎庶 黎庶 立朝 笑歌 股肱

芳心 喜見 ● 康健 聖時 ● ● 五柳巾 陶淵明ノ頭巾
 遷鶯 谷カラ出テ 上苑 朝廷ノ 春衫 春ノ衣裳 有年 豊年 帝徳純
 輕塵 帝力 新様 春餅 治平 軟塵 ナチリ 日月輪 太陽ヤ月
 屠蘇 有象 詔景 春ゲシキ 出門 鳥雀馴
 和風 春風 正始 元且 迎暖 雪消 喜迎 六合均 天下ガ治マ
 風光 ヨキケシキ 及俗 至ルニモ 唯願 新曆 喜迎 百福臻 幸福ノ來ル
 輝輝 カガヤキ 絳帳 儒者ノ 新曆 喜迎 百福臻 幸福ノ來ル
 ○ ○ 雲氣ノタナ 鶯花 營ト花 滿路 漸覺 鳥瑞臻 鳥ノメデキコ
 遊觀 アソビミ 仁風 政事 鳳闕 御所 景色 氣益振 元氣ガフル
 鮮雲 キレイナ 京華 京ノ文明 麥秀 九十 春三月ノ 九十 九十

〇〇

都人 ミヤコノ

平明 夜明ケ
ガタ

春禽 クワンゾ
ヨロコビ

歡娛 天ノ神
旭ノカガ

天公 天ノ神
旭ノカガ

瞳瞳 旭ノカガ
ヤキ

無私 私

微臣 私

人和 ヒトヤハラゲ

春光 春日
ハルアタカ

春溫 ハルアタカ

〇〇

年豐

祥雲 メデタキ
クモ

祥煙 多クノ人

蒼生 多クノ人

官家 朝廷

朱門

堯仁 堯舜ノ如
キメグミ

欣欣 ヨロコブ

新蔬 新シキ
野菜

餘歡 十分ナル
ヨロコビ

今春

●●

老壽

喜客 太平ノ
民ノ形チ

皤皤 民ノ形チ

喜笑 好シ

德業 天子ノ御
事業

雨露 フカキメ

逐隊 隊ヲナス
コト

●●

勸客

對酒

瑞氣

好是

恰好

正是

酒市

●●

鳥不暝

不情嘖嘖 鳥ガヤサシ
クナク
イクラデモ
顔ヲシカムル

花柳春 花ヤ柳ノア
ル春

文墨親 詩文ナドノ
シタシミ

無一塵 チリモナイ
スコシノ

風俗淳 風俗ガスナ
ホデアアル

〇●

留臘雪 十二月ノ雪ガ
マダアル

春色好 マサニシヨウアルベシナンデモ春ノ
形ガアラフ

應有象

〇〇

風俗淳

無一塵

文墨親

花柳春

鳥不暝

不情嘖嘖

應有象

春色好

留臘雪

應有象

春聲 鳥ナドノ
聲

歌吹 歌ヲ歌フ
コト

無爲

逢春

春城

堆盤 野菜ガハコヲモヨウス田畑ヲタ
チニ一杯催耕ガヤス

猶寒

詩書

椒觴 シヨウシヤウ
屠蘇ノサ
カヅキ

陽和

春盤 春ノ野菜ノ
入ツタハチ

春城

堆盤

風吹去

新開曆 年ト俱ニ新
シクナル

隨年改

休辭飲 酒ヲコト
ハルナ

何榮幸 ソナントシタ
運ノヨイ

吾何恨 コトハナイ
モウラム

偏著柳 春色ガ、、、

梅未發 梅ハマダ開カナイ

多樂事 愉快ナコトガオホイ

花柳動 花ガサキ柳ガ芽ヲ
出シ初ム

一杯酒 ワズカノ酒

【作例】

新

年 (集本書中之熟語)

韶景傳佳節。輕霞柳色新。稱觴祝開曆。皤皤葛天民。
新改レ祝

同

客來笑似野人家。仍是荒寒舊歲華。不掃讀書窗下地。

元日與立春同日到來

吐石道人

藤井竹外

菅茶山

柳黃梅碧鳥聲頻。詩興朝來盡斬新。閒叟更加恩劇事。一時迎歲又迎春。

早春雜興

梁川星巖

蕭兀埋頭亂卷堆。春晴未遽出城來。今朝忽被鶯聲誘。水竹村南去訪梅。

春初閒詠

同

手淪寒泉茶味嚴。半窗紅日照牙籤。何來饑鳥聲如磬。啄我梅花上凍簷。

春日作

元田竹溪

楊柳林園列翠帷。遊絲百尺日輝輝。簾前一鳥無聲過。數點閒花落不飛。

平野五岳

壬申新年作

未絕葛藤文字緣。我詩何免野狐禪。苦吟不願知音賞。臥故山秋五十年。

(標題) 【二】春曉。春夜。春寒。春日即事。即事トハ、見タ時ノソノママノ景ヲ謂フ。紀元節。春夜聞笛

佳節小集。春夜歩月

(韻礎)

清晨 清キアサ 曙色 シヨシヨク 夜明ケノケシキ

清露

曉光

露珠垂 ツユガ草ニ

微香

旭日

殘月

宿禽

曉風吹

晨遊

落日

庭樹

曉鐘

聽鶯兒

風清

早起

殘夢

惜花

想西施

煙迷

鳥雀

風雨

汲泉

聽鶯兒

晨鐘

露濕

星落

戴星

鳥先知

燈殘

夢覺

殘漏

曉鷄

有餘師

蒼蒼

睡覺

携箒

宿雲

遠山眉

春眠

剪剪

清曉

擁衾

暎鴛悲

衝寒

起坐

山寺

曉紅

兩催詩

餘寒

數點

欹枕

曉霞

雨催詩

茶煙

快起

催起

臥看

烟消 朝烟ガキ
待曉 夜明ケヲ
猶睡 寺ノカネヤ
曉珠露
煎茶 茶ヲニル
睡起 ネムリヨ
鐘磬 ケイスノコエ
日光 イヤカシガズマダ飯ヲ
三竿 朝日ノ少
不辨 カラナイ
晴旭 鳥ナドガ
未炊 タカナイ
鄰鷄 トナリノ
帶露 ニヌレル
驚睡 鳥ナドガ
曉寒
天明 キモノヲ
暮食 朝早クネドコノ
移影 月ガ花ノ
紙窗 紙バリノ
披衣 キルコト
曙日 夜明ケ頃
花影 カケヲウゴカス
捲簾 スダレヲ
利名 名ノハ身ヲ
獨支 手デア
晨炊 朝早クカラ
曉聽 鶯ノ聲ナ
多少 ドレダケ
喜晴 ヨロコブ
殘星 鳥ナドガ
喚覺 鳥ナドガ
朝雨 カ
曉看
最高枝 白クナツタ
上林枝 オカミノ園ノ

朝暉 朝日ノカ
早覺 早ク目ガ
將起 キントス
暖光
窗檻 ドレンジマ
晏起 オノク
閑臥 ネル
曉泉
暈暈 ガヤキ
靜憶 オモテ
明燭 アカルキ
賣花
朦朧 ウス色
靜見
紅燭 赤色ノ
映來
嬌鶯 ウグヒス
一刻
平旦 夜明ケガ
兩三
朝煙 毎朝
月白
啼鳥
月移
連朝 毎朝
竹影
鄰火 トナリノ
惱人 花ガ
平明 夜明ケ
入夢
醒酒 ス
夜窗
輕陰 ウスグモ
暗水 ドコカラカ
吹笛
漏聲 水時計ノ
春朝 旭日
獨夜
春困 春ノクタ
不眠
笑拂葉 笑ツテゴ
酒市旗 酒店ノシルシ
晨曦 旭日
靜夜
燈燭 夜ノアカ
夜深
絕妙詞 最モヨキ文詞
兩鬢絲 ビンノ毛ガ白

第六章 本 文(春)

○ ○ 花朝 東ノマド 夜市 月ノ下ヲ
 東窓 朝早ク 步月 アルク
 侵晨 朝早ク 小宴 月ノ下ヲ
 幽庭 ハクラキニ 睡起 ネムリヨ
 吟詩 徹曉 夜カマデ
 門前 ヒマナ人 夜犬 朝マデ
 閑人 ヒマナ人 夜直 アカリヲ
 庭花 庭ニアル 背燭 後ニスル
 啼鶯 ヒス ナクウグ 壘壘 カサヌル
 炊煙 飯ヲタク 日暮 城ヲ出ル
 紗窗 タマド 出郭 城ヲ出ル

○ ● ● 花睡 花ガ雨ニヌ 胡蝶 蝶々
 新月 三日月 春月 胡蝶 蝶々
 吟坐 天意 春淺 如雪 花ナド
 花外 花ノアル
 鶯語 春ノシラ
 春信 セ

● ● ● 柳邊 雨重 柳ノアル 雨ガカサ
 蝶飛 ミドリノ 綠楊 ヤナギ
 帶煙 柳ナドガ 一簾 一枚ノス
 岸花 キシノホ トリノ花
 綠茵 草ノシトネ
 只今

● ● ● 慰所思 思フ心ヲナ 綠更滋 ミドリニシゲシ マスマス
 冷透肌 キツイ 獨守雌 オトナシク シュクムヒラク 夜カラノキリ 宿霧披 ガハレタ
 曲水溜 ノホトリ 曲リ流レテキ ミツリメ水ガカキネヲ 水遠離 メグツテ流ルル 月未虧 満月
 雨露私 恩ノ深キ心 ハクロウカガフ 白鷺窺 サギガミル イクキスキ イクタバカサ 幾盛衰 カヘ又オトロフ

○ ○ 春宵 春ノ夜 微風 笙歌 又ウタウ
 千金 笙歌 又ウタウ
 花香 窓燈 アカリ
 沈沈 夜シヅマ 鄰鷄 又八月
 梅香 微明 又八月
 春星 横窓 木ノカゲ
 春燈 春ノ夜ノ トモシビ 重重 カサナル
 張燈 ナラブル 吟行
 移燈 トウロウヲ ワキニヤル 歸來
 昏昏 日クレ方 桃花

● ● ● 枕上 ホトリ 晚靄 ヤ方ノモ 一陣 風ガク
 怨雨 イヤナ雨 鎖翠 煙ナドガ草 萬象 色色ナ物
 冷雨 ツメタイ 寂寂 コトシキ 夜雨
 落盡 花ガオチ ツクス

● ● ● 梅逕 梅ノ木ノ コミチ 青草 花ガ雨ニ 雨紅 チル心 芳草 心バヘ
 情緒 又ネムル 添睡 又ネムル 常記 又ネムル 詩思 詩ヲ作ル 農務 百姓ノツ 一春 ヒトハル

● ● ● 不可追 オツツカナ スデアア 已嗶啞 ハヤ難ガナク ベツリ 十分 足ニ別離 十分 蝶未 蝶ハマダ シラマ 月上 遅マダ月ガデ

○ ○ 花影移 花ノカゲガウ 風雨馳 雨風ガ甚シ 花信遲 オソイ 新雨 淋シ 明月隨 歩ケバ月ガシ タガヒ行ク

曉 起

林烟江霧白相交。

飛鳥帶聲離遠巢。殘月不知春夜短。

依依猶在杏花梢。

春 曉

檻外啼鶯乍驚。

已看紅日映東樞。夜來驟雨江頭過。不怪春山入夢青。

即 事

小院無人雨長苔。

滿庭脩竹間疎槐。春愁兀兀成幽夢。又被流鶯喚覺來。

唐 杜 牧 之
間、同雜。

春夜洛陽聞笛

誰家玉笛暗飛聲。散入春風滿洛城。此夜曲中聞折柳。何人不起故園情。

春 夜

春宵一刻值千金。花有清香月有陰。歌管樓臺聲寂寂。鞦韆院落夜沈沈。

春 曉

春眠不覺曉。處處聞啼鳥。夜來風雨聲。花落知多少。

華 頂 春 曉

梁 川 星 巖

東方既半明。澹靄籠樓閣。不辨雪耶花。全峰惟一白。

即 事

菅 茶 山

春雨偏爲暴。終宵欲寐難。不愁吾屋漏。只恐衆芳殘。

黃 鶯

梁 川 星 巖

微雨杏花發。濛濛春欲迷。黃鶯不相近。故在別園啼。

春 曉

廣 瀨 旭 莊

已滅窗中燭。猶明樹杪星。雉鳴不知處。麥畝曉煙青。

(標題) 【三】 踏青。春雨。田園。柳。春日田家。春夜喜雨。春日野望。春日尋。

友。水亭雅會。

○ ○ ○ ○

携^ツ筇^{シテ} 笠^ヲ

載^サ酒^ケ車^ニノ^セテ^クル

○ ○ ○ ○

遊^{アツ}遍^マ 行^{イテ}向^カフ

○ ○ ○ ○

踏^キ青^草ヲ^フ 醉^サ眠^ル

● ○ ○ ○【東】

月^ツ如^レ瞳^シ 月^ガ目^ノ

事^ニ雕^レ蟲^ト 文^学ニ^フケ^ルコ^ト

鶴^ツ高^ク冲^ケル^コト^ビノ

月^ツ如^レ弓^ト

翠^リ微^ニ宮^ノ 林^ノ中^ノ宮^ノ

兩^リ相^ナ融^ケル^ニ 互^ニニ^ト

仰^ウ蒼^ク穹^ト 大^キ空^ヲ見^ル上

路^ノ難^シ窮^ク

映^キ青^ク楓^ノ 青^キ水^ノ草^ノナ

草^ノ連^レ空^ニ 草^ガ野^原一^ニ

友。水亭雅會。

○ ○ ○ ○

携^ツ筇^{シテ} 笠^ヲ

載^サ酒^ケ車^ニノ^セテ^クル

○ ○ ○ ○

遊^{アツ}遍^マ 行^{イテ}向^カフ

○ ○ ○ ○

踏^キ青^草ヲ^フ 醉^サ眠^ル

● ○ ○ ○【東】

月^ツ如^レ瞳^シ 月^ガ目^ノ

事^ニ雕^レ蟲^ト 文^学ニ^フケ^ルコ^ト

鶴^ツ高^ク冲^ケル^コト^ビノ

月^ツ如^レ弓^ト

翠^リ微^ニ宮^ノ 林^ノ中^ノ宮^ノ

兩^リ相^ナ融^ケル^ニ 互^ニニ^ト

仰^ウ蒼^ク穹^ト 大^キ空^ヲ見^ル上

路^ノ難^シ窮^ク

映^キ青^ク楓^ノ 青^キ水^ノ草^ノナ

草^ノ連^レ空^ニ 草^ガ野^原一^ニ

郊^マ原^ニ野^ノハ^ラ

麗^{レイ}日^{ジツ} 春^ノキ^レ

芳^{ホウ}草^ノ

馬^ウ嘶^シ 泣^{ナク}

滿^{マン}溪^ノ

草^{ソウ}色^{シキ}

明^{メイ}媚^ビ 春^ノキ^レ

夕^{シユ}陽^ノ夕^{シユ}

草^{ソウ}連^レ空^ニ

草^ガ野^原一^ニ

千^{セン}山^ノ

已^イ過^ク

風^{フウ}暖^{ナン}

榮^{エイ}花^ノ 夕^{シユ}陽^ノ夕^{シユ}

路^ノ難^シ窮^ク

映^キ青^ク楓^ノ

草^{ソウ}連^レ空^ニ

東^{トウ}風^ノ

縱^{ジュウ}賞^ノ 十^{ジュウ}分^ノニ^ホ

斜^{シャ}日^ノ夕^{シユ}

柳^{リウ}絲^ノ 夕^{シユ}陽^ノ夕^{シユ}

草^{ソウ}連^レ空^ニ

草^ガ野^原一^ニ

月^ツ如^レ弓^ト

事^ニ雕^レ蟲^ト

鶴^ツ高^ク冲^ケル^コト^ビノ

橋^{キウ}邊^ノ

緩^{クワン}步^ノ 步^ホ步^ホ

春^{チュウ}色^ノ

柳^{リウ}絲^ノ 夕^{シユ}陽^ノ夕^{シユ}

草^{ソウ}連^レ空^ニ

草^ガ野^原一^ニ

月^ツ如^レ弓^ト

事^ニ雕^レ蟲^ト

鶴^ツ高^ク冲^ケル^コト^ビノ

臨^{リン}流^ノ

一^{イツ}水^ノ

垂^{シュイ}柳^ノ 夕^{シユ}陽^ノ夕^{シユ}

夕^{シユ}陽^ノ夕^{シユ}

草^{ソウ}連^レ空^ニ

草^ガ野^原一^ニ

月^ツ如^レ弓^ト

事^ニ雕^レ蟲^ト

鶴^ツ高^ク冲^ケル^コト^ビノ

翻^フ翻^フ 蝶^{コト}ナ^ドト

紫^シ陌^ノ 春^ノ風^ノナ^ドフ^キ

花^{クワ}草^ノ

落^{ラク}紅^ノ 落^{ラク}花^ノ

草^{ソウ}連^レ空^ニ

草^ガ野^原一^ニ

月^ツ如^レ弓^ト

事^ニ雕^レ蟲^ト

鶴^ツ高^ク冲^ケル^コト^ビノ

臨^{リン}溪^ノ

駘^{ダイ}蕩^ノ 春^ノ風^ノナ^ドフ^キ

遲^チ日^ノ 春^ノ永^キイ

馬^ウ蹄^ノ 夕^{シユ}陽^ノ夕^{シユ}

草^{ソウ}連^レ空^ニ

草^ガ野^原一^ニ

月^ツ如^レ弓^ト

事^ニ雕^レ蟲^ト

鶴^ツ高^ク冲^ケル^コト^ビノ

陽^{ヤウ}和^ノ 三^{サン}四^シ月^ノ

蝶^{テフ}舞^フ

春^{チュウ}水^ノ

賞^{ショウ}心^ノ 夕^{シユ}陽^ノ夕^{シユ}

草^{ソウ}連^レ空^ニ

草^ガ野^原一^ニ

月^ツ如^レ弓^ト

事^ニ雕^レ蟲^ト

鶴^ツ高^ク冲^ケル^コト^ビノ

江^{カウ}山^ノ

蛺^{テフ}蝶^ノ 夕^{シユ}陽^ノ夕^{シユ}

歸^キ雁^ノ

路^ロ傍^ノ

草^{ソウ}連^レ空^ニ

草^ガ野^原一^ニ

月^ツ如^レ弓^ト

事^ニ雕^レ蟲^ト

鶴^ツ高^ク冲^ケル^コト^ビノ

雲^{ウン}收^ノ

雨^ウ後^ノ

千^{セン}里^ノ

賞^{ショウ}花^ノ

草^{ソウ}連^レ空^ニ

草^ガ野^原一^ニ

月^ツ如^レ弓^ト

事^ニ雕^レ蟲^ト

鶴^ツ高^ク冲^ケル^コト^ビノ

新^{シン}晴^ノ

野^ノ色^ノ

農^{ノウ}事^ノ

倚^イ樓^ノ 夕^{シユ}陽^ノ夕^{シユ}

草^{ソウ}連^レ空^ニ

草^ガ野^原一^ニ

月^ツ如^レ弓^ト

事^ニ雕^レ蟲^ト

鶴^ツ高^ク冲^ケル^コト^ビノ

鶯^ウ聲^ノ

四^シ望^ノ

鶯^ウ語^ノ

倚^イ樓^ノ 夕^{シユ}陽^ノ夕^{シユ}

草^{ソウ}連^レ空^ニ

草^ガ野^原一^ニ

月^ツ如^レ弓^ト

事^ニ雕^レ蟲^ト

鶴^ツ高^ク冲^ケル^コト^ビノ

尋^{ジン}芳^ノ 花^ノヲ^{タツ}ツ

樂^{ラク}事^ノ

千^{セン}里^ノ

日^{ニチ}長^シ

草^{ソウ}連^レ空^ニ

草^ガ野^原一^ニ

月^ツ如^レ弓^ト

事^ニ雕^レ蟲^ト

鶴^ツ高^ク冲^ケル^コト^ビノ

遊^ユ人^ノ

嫩^{ニン}草^ノ 夕^{シユ}陽^ノ夕^{シユ}

杖^{シユウ}頭^ノ 夕^{シユ}陽^ノ夕^{シユ}

杖^{シユウ}頭^ノ 夕^{シユ}陽^ノ夕^{シユ}

草^{ソウ}連^レ空^ニ

草^ガ野^原一^ニ

月^ツ如^レ弓^ト

事^ニ雕^レ蟲^ト

鶴^ツ高^ク冲^ケル^コト^ビノ

春^{チュウ}光^ノ 花^ノヲ^{タツ}ツ

酒^{シュウ}興^ノ 夕^{シユ}陽^ノ夕^{シユ}

隨^ジ柳^ノ 夕^{シユ}陽^ノ夕^{シユ}

少^{シウ}年^ノ 夕^{シユ}陽^ノ夕^{シユ}

草^{ソウ}連^レ空^ニ

草^ガ野^原一^ニ

月^ツ如^レ弓^ト

事^ニ雕^レ蟲^ト

鶴^ツ高^ク冲^ケル^コト^ビノ

青^{セイ}青^ノ 草^ノヲ^{タツ}ツ

醉^シ眠^ル 夕^{シユ}陽^ノ夕^{シユ}

遊^ユ辰^ノ 夕^{シユ}陽^ノ夕^{シユ}

綺^キ霞^ノ 夕^{シユ}陽^ノ夕^{シユ}

草^{ソウ}連^レ空^ニ

草^ガ野^原一^ニ

月^ツ如^レ弓^ト

事^ニ雕^レ蟲^ト

鶴^ツ高^ク冲^ケル^コト^ビノ

青^{セイ}青^ノ 草^ノヲ^{タツ}ツ

縱^{ジュウ}目^ノ 十^{ジュウ}分^ノミ^ル

遊^ユ辰^ノ 夕^{シユ}陽^ノ夕^{シユ}

綺^キ霞^ノ 夕^{シユ}陽^ノ夕^{シユ}

妻^{セイ} 木^ノノ^シ

醉^シ眠^ル 夕^{シユ}陽^ノ夕^{シユ}

春^{チュウ}服^ノ 夕^{シユ}陽^ノ夕^{シユ}

醉^シ眠^ル 夕^{シユ}陽^ノ夕^{シユ}

春^{チュウ}光^ノ 花^ノヲ^{タツ}ツ

酒^{シュウ}興^ノ 夕^{シユ}陽^ノ夕^{シユ}

隨^ジ柳^ノ 夕^{シユ}陽^ノ夕^{シユ}

少^{シウ}年^ノ 夕^{シユ}陽^ノ夕^{シユ}

遊^ユ人^ノ 花^ノヲ^{タツ}ツ

嫩^{ニン}草^ノ 夕^{シユ}陽^ノ夕^{シユ}

杖^{シユウ}頭^ノ 夕<

○ ○ ○
 和風 春風
 蝶戲
 青郊 青草ノハ
 野店
 杖屨 杖ヲツクツエト
 良辰 ヨキ日
 花紅
 勝地 スグレタ
 鶯歌 ウグヒスノ
 處處 トコロ
 春山 ヒラタキ
 湧起 ワキオコル
 拂面 ハラフ春風ガ
 倚杖 ツエニヨ
 獨歩 ツテ立ツ
 李白 スモモノ
 花ノ白イ
 眼界 カギル
 晴景 ハレテヨ
 春日 キケシキ
 春半 ヘルナカハ
 閒聽 シヅカニ
 春社 ロノヤシ
 亭午 ヒル
 晴暖 アタタカ
 東作 春ノ農事
 春露 春ノモヤ
 出遊
 勸杯 ヲムル
 啜茶 チヤラスム
 把杯 ハイラトル
 放歌
 百花
 弄花
 巖薇 センマイ
 渺茫 ヒロビロ
 滿村 花ナドガ
 滿山 花ナド
 驚蝶
 春露 春ノモヤ
 東作 春ノ農事
 晴暖 アタタカ
 亭午 ヒル
 春社 ロノヤシ
 閒聽 シヅカニ
 春半 ヘルナカハ
 春日 キケシキ
 晴景 ハレテヨ
 眼界 カギル
 李白 スモモノ
 花ノ白イ
 獨歩 ツテ立ツ
 倚杖 ツエニヨ
 湧起 ワキオコル
 春山 ヒラタキ
 鶯歌 ウグヒスノ
 處處 トコロ
 勝地 スグレタ
 花紅
 杖屨 杖ヲツクツエト
 野店
 青郊 青草ノハ
 蝶戲
 和風 春風
 ○ ○ ○
 與天同 草ノ色ナド
 意何窮 リガナイ
 弄天風 松ナドガ
 自含風 柳ナドガ
 ○ ○ ○
 四望同 眺ハドコモ
 問牧童 牛ガヒノ子
 杳靄中 モヤノ中
 夢射熊
 麥浪風 ヲムギバダケ
 十八公 松ノコト

村野 廣野
 別墅 下ヤシキ
 信步 勝手ニア
 社鼓 社ノ太鼓
 水綠
 趁暖 アタタカイ
 躑躅 花ツツチノ
 紫藤 フジノ花
 盡日 一日中
 入夜
 處處 ドコロ
 細濕 ハ、ハ、
 鶯懶 カラ、ハ、
 簷溜 アマダレ
 籠笠 カサ
 香雨 花ト雨
 膏雨 春ノヨキ
 煙雨
 晚晴 夕方ハレ
 晚烟 夕方ノ
 及時 ナツテ
 濯枝 ハ、ハ、
 出雲 山ナドガ
 入簾 風ガスダ
 隔簾 トハコシ
 雨露功 天地ノ神ハ
 造化工 上手
 句未工 詩句ガウ
 一點紅 リアカイ
 萬丈虹 長イニジ
 曲逕通 マガツタコ
 似轉蓬 ヨモギノ風
 曲未終 音曲ガマダ
 庭下桐
 蕉卷筒 ガツツノハウ
 村野 廣野
 別墅 下ヤシキ
 信步 勝手ニア
 社鼓 社ノ太鼓
 水綠
 趁暖 アタタカイ
 躑躅 花ツツチノ
 紫藤 フジノ花
 盡日 一日中
 入夜
 處處 ドコロ
 細濕 ハ、ハ、
 鶯懶 カラ、ハ、
 簷溜 アマダレ
 籠笠 カサ
 香雨 花ト雨
 膏雨 春ノヨキ
 煙雨
 晚晴 夕方ハレ
 晚烟 夕方ノ
 及時 ナツテ
 濯枝 ハ、ハ、
 出雲 山ナドガ
 入簾 風ガスダ
 隔簾 トハコシ
 雨露功 天地ノ神ハ
 造化工 上手
 句未工 詩句ガウ
 一點紅 リアカイ
 萬丈虹 長イニジ
 曲逕通 マガツタコ
 似轉蓬 ヨモギノ風
 曲未終 音曲ガマダ
 庭下桐
 蕉卷筒 ガツツノハウ

第六章本 文(春)

○ ○ 繁華 麥隴 春草 亂雲 三尺 〇 〇 〇 〇

○ ○ 紅塵 叢祀 初乾 潤葉 吹面 雨成 〇 〇 〇 〇

○ ○ 桃紅 吟哦 不絕 衝雨 夜鐘 沈沈 帶香 樹樹 〇 〇 〇 〇

○ ○ 春畦 青帘 道遙 接野 花盡 竹窗 深 〇 〇 〇 〇

○ ○ 聯翩 花濃 野水 猶冷 曉鶯 吟 〇 〇 〇 〇

○ ○ 聯翩 花濃 野水 猶冷 曉鶯 吟 〇 〇 〇 〇

○ ○ 聯翩 花濃 野水 猶冷 曉鶯 吟 〇 〇 〇 〇

○ ○ 聯翩 花濃 野水 猶冷 曉鶯 吟 〇 〇 〇 〇

○ ○ 繁華 麥隴 春草 亂雲 三尺 〇 〇 〇 〇

○ ○ 紅塵 叢祀 初乾 潤葉 吹面 雨成 〇 〇 〇 〇

○ ○ 桃紅 吟哦 不絕 衝雨 夜鐘 沈沈 帶香 樹樹 〇 〇 〇 〇

○ ○ 春畦 青帘 道遙 接野 花盡 竹窗 深 〇 〇 〇 〇

○ ○ 聯翩 花濃 野水 猶冷 曉鶯 吟 〇 〇 〇 〇

○ ○ 聯翩 花濃 野水 猶冷 曉鶯 吟 〇 〇 〇 〇

○ ○ 聯翩 花濃 野水 猶冷 曉鶯 吟 〇 〇 〇 〇

○ ○ 聯翩 花濃 野水 猶冷 曉鶯 吟 〇 〇 〇 〇

○ ○ 草色侵 綠苔侵 臥松陰 綠苔侵 〇 〇 〇 〇

○ ○ 草色侵 綠苔侵 臥松陰 綠苔侵 〇 〇 〇 〇

○ ○ 草色侵 綠苔侵 臥松陰 綠苔侵 〇 〇 〇 〇

○ ○ 草色侵 綠苔侵 臥松陰 綠苔侵 〇 〇 〇 〇

○ ○ 無聲 新霽 雨過 雨深
 輕寒 陰雲 匡地 暖煙
 經旬 十日ニナカ 輕霽 少シバカ
 敲窗 雨ナド 濛濛 クラクナ
 衝泥 ミチノワルイチ 癡雲 黒マツタ
 烟沈 晴鳩 ハレタヒノ
 沾衣 雨カ露カ 昏昏 クラクナ
 烟絲 細雨 摧殘 ソコナフ
 沾巾 涙、 閒花 シツカナ
 風輕 芳洲 カキツバタ
 鶯花 トハナ 新蒲 イガラシ
 離離 草ノシゲ 客舎 山ノミドリ
 連天 ナドガ 翠色 ノイロ
 如烟 ケムリガ一メ 送客 柳絲 ヤナギノ
 如絲 雨又ハ 烟迷 シニタナビク
 風光 芊芊 草ノシゲ 萬縷 フノ枝ナ
 迎風 如茵 草ガシトネ 翠黛 リナド
 蒙茸 草ノシゲ 芳心 ルココロ 細細 フノ枝ナ
 ○ ○ 無邊 ナイガ 輕柔 ヤハラカ 掩映 ウツリアフ
 平郊 ノハラ 青青 アラニクニ 雨濺 アソソ
 江隄 ミノツツ 新栽 アラニクニ 細雨 アソソ
 垂楊 ヤナギ 長堤 ニヒルガ
 依依 柳ノ枝ノウカセニヒルガ
 風、 濕柳 雨、 臨水

(轉句)
 岸深ノ處ガフカイ
 風光好
 低飛蝶
 低平野
 陰雲合
 雲俱黑
 花如雪
 翻風舞
 江橋畔
 春來處

池塘 ツツミ 離離 草ノシゲ 客舎 山ノミドリ
 和煙 ス草ナド 連天 ナドガ 翠色 ノイロ
 如絲 雨又ハ 烟迷 シニタナビク 送客 柳絲 ヤナギノ
 風光 芊芊 草ノシゲ 萬縷 フノ枝ナ
 迎風 如茵 草ガシトネ 翠黛 リナド
 蒙茸 草ノシゲ 芳心 ルココロ 細細 フノ枝ナ
 ○ ○ 無邊 ナイガ 輕柔 ヤハラカ 掩映 ウツリアフ
 平郊 ノハラ 青青 アラニクニ 雨濺 アソソ
 江隄 ミノツツ 新栽 アラニクニ 細雨 アソソ
 垂楊 ヤナギ 長堤 ニヒルガ
 依依 柳ノ枝ノウカセニヒルガ
 風、 濕柳 雨、 臨水

長含笑 山アルトコ
 千山暮 清世シバナ
 清狂興 多ニ楊柳
 浮雲外 天一色
 花似雪
 連夜雨
 經宿雨
 消不盡

○ ○	柳ノ枝ノ ダクサン	留春 春ヲヒキ トムル	● ●	細葉	○ ●	ウラミヲヒク 色々ノウラ 牽レ恨ミ心ガ オコル
○ ○	柳ノ枝ノ 木ナドガ	年年 毎年	● ●	柳色	○ ●	攀折 セツ柳ノ枝ヲヨ ヂノホツテラル
○ ○	草ナドガ 、、	垂垂 柳ノ枝ガ タルル	● ●	柳是	○ ●	堤暖 ツ、ミアカカ
○ ○	和風 花ナド	九十 春三月ノ 九十月	● ●	含露	○ ●	雙眼 ゾウガンホガカ 目ガハツキ 露リ
○ ○	夜雨 カタチヒ	點滴 マシツタ	● ●	吹動 フキウゴス風ガ 柳ナ	○ ●	微雨 少ノアメノ 後
○ ○	催花 ハナヲモヨホス 雨ナドガ	雨 マシツタ	● ●	吹柳 フキウゴス風ガ 柳ナ	○ ●	芳草 草アルコミ 徑チ
○ ○	受風 柳ノ枝ナ 、、	時雨 シグレ	● ●	誰道 ダレカイフ イフカ	○ ●	何覺 ナンゾサズル ノオソキドウシテ 目ガサメナシ
○ ○	別離 カタチヒ	疎雨 少シノ シグレ	● ●	吹柳 フキウゴス風ガ 柳ナ	○ ●	嫌日 ヒノシカキヲ キアラフ
○ ○	陌頭 町ノ中	烟鎖 ケムリトサス ガコメタ	● ●	還入 マタキキニイル 鳥ナドガ	○ ●	衫袖 サンシウヒヤカ 春ノキモノ ガズズシイ
○ ○	綠波 木ノウツツ タ川ヤ波	殊雨 シグレ	● ●	還入 マタキキニイル 鳥ナドガ	○ ●	亂如 ミダレテシヨノ ゴトシミダレ 雲ガワサメナシ
○ ○	舞腰 マウコン ツキ	烟鎖 ケムリトサス ガコメタ	● ●	雨多少 雨ガドレクラ ヒフツタカ	○ ●	雨多少 雨ガドレクラ ヒフツタカ

踏 青 (集ニ本書中之熟語)

携、節、微雨、後。晨、晨、草、連、空。春社、無、人、在。桃花、一、點、紅。

踏 青

白白紅紅相間。開。三三五五踏青來。戲隨、胡蝶、不、知、遠。驚見、行人、笑、卻、回。

春 草

萋萋、近、接、泊、舟、汀。苒、苒、遙、連、賣、酒、亭。牛、犢、歸、來、煙、雨、晚。江、南、十、里、笛、聲、青。

春 雨

戎、戎、雲、氣、蘸、春、波。更、有、何、人、鼓、柷、過。茅、屋、酒、香、孤、賞、好。杏、花、時、節、雨、聲、多。

春 日 田 園

種、桃、繞、屋、是、吾、家。樹、樹、樹、頭、圓、絳、霞。嫁、女、西、鄰、呼、可、答。隔、花、機、杼、響、啞、啞。

第六章 本 文(春)

春風偏著^ニ柳條^一吹。一日能伸一寸絲。手把^ニ麈尾^一還獨語。拂^ニ青苔地^一定何時。

· 初春雨中作

廣瀨淡窗

鳥未^ズ遷^ラ喬花未^ズ開。牆陰殘雪尙成堆。誰知東帝回^ラ春處。卻自^ニ空濛蕭瑟^一來。

春日作

元田竹溪

楊柳林園列^ニ翠帷。遊絲百尺日輝輝。簾前一鳥無^レ聲過。數點^ノ閒花落^レ不^レ飛。

春雨到^ニ津庵^一

廣瀨旭莊

菘園葱畦取^ル路斜。桃尤多處是君家。晚來何者敲^レ門至。雨與^ニ詩人^一與^ニ落花^一。

春雨乍晴泛^ニ舟于龍溪^一

秋月橋門

柳渚梅洲載^セ酒行。一篷殘雨滴^ル新晴。濕雲徐被^ニ風吹去^一。多少青山次第生。

春雨

協蘭室

蕭蕭夜雨撲^ツ幽局。秋思暗知庭草青。不^レ問春城吹^レ海。孤燈讀盡太玄經。

太玄經者、老子道德經。

南塢

廣瀨淡窗

菰蒲映^ニ小橋。宛有^ニ陂塘趣。翠禽不^レ得^レ魚。猶立^ニ垂楊樹^一。

北塢

同

諷詠聲何處。柴扉曉已開。小窗人不^レ見。竹外一枝梅。

春雨

宋陸放翁

春陰易^レ成^レ雨。客病不^レ禁^レ寒。又與^ニ梅花^一別。無^レ因^ニ一倚^レ欄。

柳巷

唐韓退之

柳巷還飛^レ絮。春餘幾許時。吏人休^レ報^レ事。公作^ニ送^レ春詩^一。公退之對^ニ屬僚^一之白稱。

獨柳

唐杜牧之

含^ム煙一株柳。拂^ヒ地搖^レ風久。佳人不^レ忍^レ折。悵望回^ニ纖手^一。

東窗

廣瀨淡窗

窗外雙楊柳。東風已掛^レ絲。黃鶯先^レ曉至。呼起讀書兒。

(標題)【四】賞花。梅花。櫻花。桃花。蘭。牡丹。鶯。蝶。花下小酌。芳野賞

櫻。嵐山看花。題蘭畫。聽鶯。

●○○○【庚】

欲傾城 美花ノ形容

自多情

值初晴 一レタ

暗香清 梅ノ香ガキ

弄嬌聲 一ナクヒスノ

笑相迎

隔溪行

賣花聲

○ ○

春光 春ゲシキ

含情

奇葩 梅ハメヅラシキハナ

馨香 カウバシ

多情

遊蜂

寒梅

疎梅 枝ノマバラナウメ

○ ●

妖艷 非常ニツヤツヤシ

含露 花ナドガ

開晚 花ナドガ

顏色

明媚 キレイ

胡蝶

晨起

風掃 風ガ落花

○ ●

嫩紅 花ナドガ

雨催 雨ガフリ

暗香 梅ナドノ

一枝

絕塵

雪飛 落花ノミ

十分

滿衣 花ノ香ナ

○ ○ ○

透骨清 非常ニキヨキ

照眼明 花ノキレイ

綻曉英 朝カラ花ガ

破玉英 花ガサクコト

遠近清 モキヨイ

巧轉鶯 ヲクナク

不計名

養此生 一ツカニツ

○ ○ ○

為誰開

百花魁 梅ハ百花ノ

有情

苦吟

北隊

映窗

出塵

隔牆

清標

高致

殘雪

千點

欺雪

聊贈

○ ●

入座 花ヤ風ガ

古廟

近水

一樹

帶月

印得

萬木

滿座

醉臥

素月

玉色

雪後

芒鞋

● ●

花魁 梅ハ花ノサキガケ

冰魂 梅ノミダ

清香 梅ノ香

浮香 梅ノ香

橫斜 梅ノ枝

清癯 梅ノコト

南枝

溪橋

溪邊

江南

羅浮

芒鞋

○ ●

疎影 ノカゲ

村路

携酒

詩興

臨水

花信

清標

高致

殘雪

千點

欺雪

聊贈

○ ●

曉窗 夜明ケノ

返魂

曉粧

折來

一枝

隔牆

出塵

映窗

出塵

殘雪

千點

欺雪

聊贈

有情

○ ○ 梅ノカゲ 梅ノカゲ
 横窓 ナド、ハ、 數點 ハ、ハ、 山路 花ナド
 前村 細見 コマカニ 和雪 花ナド
 尋香 花ヲサガ 正見 マサニミ 香冷 梅花ノカ
 林間 靜見 シヅカニ 寒影 グナド
 蕭條 サムシイ 蕪水 ミズニヒダス水ニ入レ 高潔 一瓢 落花 水涯 リホト
 黄昏 ニウカタ 野水 香近 賞心 ホムル心
 梅花 踏雪 落花落フ 和月 月ト共ニ
 籬根 カキネノ 氷肌 水ノ如キ 踏雪 落花落フ 和月 月ト共ニ
 飄零 散リオツル 開遅 花、ハ、 曲逕 ミチ 芬郁 イカウバシ
 氷姿 梅水ノ如キ 殘香 緜約 仙人ノ如ク 吟賞

○ ○ 小橋 醉歸 水涯 落花 一瓢 賞心 和月 芬郁 吟賞
 獨銜杯 酒ヲノム
 暮鐘催 寺ノカネガナ
 入簾來 風力花カ蝶
 上崔嵬 ニノボル
 白皚皚 コト
 酌金罍 酒ヲノム
 一枝梅 金ノカメノ
 共徘徊 月ト共ニウ
 曲江隈 クマ
 曲江隈 クマ

孤山 林和靖ノ 隱居所ノ 凌晨 朝早クカ
 香風 花ノ風 孤高 イ、梅花 雅淡 高尙ニ
 芳心 花ヲ賞ス 逋仙 宋ノ林和靖、名ハ 林下
 玲瓏 玉ノ如ク 寒枝 梅ノ枝 一片 花ヒトヒ 依舊 ママ
 無塵 詩情 萬紫 藤ノ花ナ 空谷 サビシキ
 無雙 ナラビナ 初開 ルコト 樂事 花見ナド 幽谷 オクアカ
 吟懷 詩ヲギンズ 尋香 花ヲサガ 笑語 ヌイトリ
 嬋妍 コト キレイナ 梅魂 梅ノ花 錦綉 ニシキヤ
 清新 清馨 清馨 清クカゲ 妙舞 上手ニマ
 仙姿 仙人ノ如キ 花神 藉草 テスワル 藉草 テスワル
 紛紛 形容 新詩 載酒 酒ヲモツテ 花下 十分ニ酒
 氷葩 氷ノ如キキ 千林 戴酒 酒ヲモツテ 酣暢 ニエフ

○ ○ 花下杯 酒ヲノム
 先後開 キニヒラクカ
 雪作堆 落花ガウヅ
 絶ニ點埃 少シノチリ
 掃ニ綠苔 苔ヲハラ
 枕水臺 ノウテナ
 傍水栽 川バタニ
 踏月來 月下ニ來
 不染埃 月ト共ニ

○ ○ 天香 牡丹ノミ 蝶舞 キヨウジツ 連日 一日中 風雨 紅雨 花ノ雨 少年 滿衣 花ノ香ガ 未央 イマダトカハナラス 詩一篇 ハナモエントホツス
ミタテ
 人生 ドコノイ 粉蝶 テフテフ 紅雨 花ノ雨 少年 滿衣 花ノ香ガ 未央 イマダトカハナラス 詩一篇 ハナモエントホツス
ミタテ
 誰家 ヘ 粉蝶 テフテフ 紅雨 花ノ雨 少年 滿衣 花ノ香ガ 未央 イマダトカハナラス 詩一篇 ハナモエントホツス
ミタテ
 丹青 蝶ノ如ク 粉蝶 テフテフ 紅雨 花ノ雨 少年 滿衣 花ノ香ガ 未央 イマダトカハナラス 詩一篇 ハナモエントホツス
ミタテ
 枝頭 ケレイ 粉蝶 テフテフ 紅雨 花ノ雨 少年 滿衣 花ノ香ガ 未央 イマダトカハナラス 詩一篇 ハナモエントホツス
ミタテ
 今朝 非 粉蝶 テフテフ 紅雨 花ノ雨 少年 滿衣 花ノ香ガ 未央 イマダトカハナラス 詩一篇 ハナモエントホツス
ミタテ
 飛花 花ナド 粉蝶 テフテフ 紅雨 花ノ雨 少年 滿衣 花ノ香ガ 未央 イマダトカハナラス 詩一篇 ハナモエントホツス
ミタテ
 成空 花、 粉蝶 テフテフ 紅雨 花ノ雨 少年 滿衣 花ノ香ガ 未央 イマダトカハナラス 詩一篇 ハナモエントホツス
ミタテ
 今朝 一語ヲヨ 粉蝶 テフテフ 紅雨 花ノ雨 少年 滿衣 花ノ香ガ 未央 イマダトカハナラス 詩一篇 ハナモエントホツス
ミタテ
 寄語 セテイフ 粉蝶 テフテフ 紅雨 花ノ雨 少年 滿衣 花ノ香ガ 未央 イマダトカハナラス 詩一篇 ハナモエントホツス
ミタテ
 爛醉 非常ニエ 粉蝶 テフテフ 紅雨 花ノ雨 少年 滿衣 花ノ香ガ 未央 イマダトカハナラス 詩一篇 ハナモエントホツス
ミタテ
 片片 花ナド 粉蝶 テフテフ 紅雨 花ノ雨 少年 滿衣 花ノ香ガ 未央 イマダトカハナラス 詩一篇 ハナモエントホツス
ミタテ
 落盡 花ガオチツキ 粉蝶 テフテフ 紅雨 花ノ雨 少年 滿衣 花ノ香ガ 未央 イマダトカハナラス 詩一篇 ハナモエントホツス
ミタテ
 宿蝶 昨夜カラ 粉蝶 テフテフ 紅雨 花ノ雨 少年 滿衣 花ノ香ガ 未央 イマダトカハナラス 詩一篇 ハナモエントホツス
ミタテ
 魏紫 魏家ノ紫 粉蝶 テフテフ 紅雨 花ノ雨 少年 滿衣 花ノ香ガ 未央 イマダトカハナラス 詩一篇 ハナモエントホツス
ミタテ
 求友 柳陰 花ノカゲガ 滿身 花ノカゲガ 柳眠 花ノカゲガ 不知 花ノカゲガ

(轉句)

迎朝露 朝早クカラ 知誰共 處ニシヨ 猶堪賞 マダホムル 留人醉 ヒトヲトメテエハシム 青春樂 春ノタノシ 臨芳樹 花木ノ下ニ 無雙艶 ツツヤ

姚黃 姚家ノ黃 月影 ナソミテヒン 何用 ヒトリシム 獨占 ヒトリシム 飛爲雪 ヒトリシム 無情物 ヒトリシム 應傾國 花ノミダテ 勞遊展 アソブ爲ノ
 詩成 ホネトホル清キ香ガ 透骨 ホネトホル清キ香ガ 行樂 ユキツツ 競誇 ホネトホル 無情物 ヒトリシム 應傾國 花ノミダテ 勞遊展 アソブ爲ノ
 朝來 アサカラ 酒美 酒ノミ 春色 春ノイロ 國香 國ノカニ 無情物 ヒトリシム 應傾國 花ノミダテ 勞遊展 アソブ爲ノ
 紅稀 花ガ少ナ 細雨 細ノアメ 春色 春ノイロ 國香 國ノカニ 無情物 ヒトリシム 應傾國 花ノミダテ 勞遊展 アソブ爲ノ
 迎風笑 花ナド、 君知否 キミシルヤイナナ 如欲語 花ノミダテ 溪澗碧 谷川ガミド 明月上 ノボル 皆錦綉 ニシキカ 紅一點 緑ノ中ニ
 觀花客 成ニ何事 成何事 ナニヲナス 如欲語 花ノミダテ 溪澗碧 谷川ガミド 明月上 ノボル 皆錦綉 ニシキカ 紅一點 緑ノ中ニ
 眠方熟 粉如霰 粉如霰 落花 知獨秀 蘭ライフ 明月上 ノボル 皆錦綉 ニシキカ 紅一點 緑ノ中ニ
 嬌欲語 花ガミレドモダラズ 看亦好 ミルモダ 紅映水 スベテヨウゼツ 還自愧 カヘツテツツカラハツ 悅人耳 鳥ノ聲ナドガ
 芳草徑 スベテヨウゼツ 都勝絕 ドレモ 還自愧 カヘツテツツカラハツ 悅人耳 鳥ノ聲ナドガ

第六章本 文(春)

○●●●●
○●●●●
○●●●●
○●●●●
○●●●●
○●●●●
○●●●●
○●●●●

難ニ自晦一シキレナイ花底住ム
花ノ下ニス
微雨後
化工妙
妙天地造化ノ
多ニ嫵媚一フコヒヘツラ
人失曉
アサネシ
無ニ一句一
白ニ於雪一
花ノミダテ

【作例】

觀ニ 牡丹 (集ニ本書中之句)
天 嵐

袅娜無雙艶。天香帶露鮮。芳心看不足。開宴玉階前。

梅 花 梁川星巖

超然風骨玉槎枒。紫俗紅凡枉自誇。誰道乾坤不相黨。盡傾清氣向梅花。

菅 茶 山

四野梅開二月天。吾筇日被暗香牽。客來若問吟遊處。多在村橋石澗邊。

月 瀨 梅 花 原六首 賴 山 陽

傍水環村幾簇梅。高低相映盡花開。吾穿此雪肌何粟。出雪翻然入雪來。

月 瀨 觀 梅 原三首 藤井竹外

尋常步步不知知。路繞樵家又酒家。二月山中雪初盡。一村全白是梅花。

觀ニ梅子月瀨村 原三首 梁川星巖

杳然別是一乾坤。峰轉溪回果得村。曾見城西漁隱說。梅花亦自有仙源。

漁隱者、指服部文祿。

有梅無雪不精神。有雪無詩俗了人。薄暮詩成天又雪。與梅併作十分春。

墨 梅 圖 原四首 田能村竹田

滿枝香玉壓籬笆。且喜陰朋約到家。山裏別無高尚事。一生唯不負梅花。

花 朝 書 事 前數日與應龍。飲談郎所贈酒。 龜井昭陽

偶值花朝人事忙。何能把酒對春芳。開簾乍見桃櫻色。近憶應龍遠駿郎。

左 久 良 安藤秋里

艷態芳姿獨足誇。春風飈蕩占繁華。何須假借他櫻字。自是皇州作樂花。

芳野 菅茶山

一目千株花盡開。滿前唯見白皚皚。近聞人語不知處。聲自香雲團裏來。

嵐山看花 同

萬樹櫻桃擁碧漣。花間無處不芳筵。風來岸岸齊篩雪。失卻中流上下船。

東山賞花 藤井竹外

夕陽紅歇一聲鐘。仰見香雲又幾重。縱令春城歸路遠。可憐能花底不停筇。

雨中觀花 原二首 雲華大舍

山人折簡報春華。日夜神飛不在家。自笑泥途勞杖屨。一蓑風雨賞櫻花。

櫻 草場船山

西土牡丹徒自誇。不知東海有名葩。徐生當日求仙處。看做祥雲是此花。

太田村桃園 藤井竹外

逕自一牛鳴處通。滿園爛見晚霞紅。鳧葵燕麥休除去。儘傍桃花同動風。

和孔密州東欄梨花 龜葵、尊菜之異稱。

梨花淡白柳深青。柳絮飛時花滿城。惆悵東欄一株雪。人生看得幾清明。

孔密州、高密太守孔宗幹。

牡丹 菅茶山

李溪桃塢已成塵。何處風光慰藉人。獨有牡丹尤解事。艷粧緩緩向殘春。

牡丹 平野五岳

桃紅李白已香埃。猶見羣芳落日開。亦是花中孟之反。牡丹緩緩殿春來。

孟之反 論語、子曰、孟之反不伐。奔而殿。將入門、策其馬曰、非敢後也。馬不進也。

詠蘭 齋藤拙堂

芳根空谷養幽情。知己千秋有獨醒。只是國香難自晦。被人折去上金瓶。

素心蘭 梁川星巖

露沈香逾烈。瑩然迥出塵。紫緋吾厭汝。友此素心人。

蘭

廣瀨淡窗

孤生幽谷裏。豈願世人知。時有清風至。芬芳難自持。

小景

秋山玉山

村邊杏花白。橋畔楊柳青。獨抱孤琴去。不教漁父聽。

蘭

三浦梅園

孤根託絕崖。宿霧滴清露。山履不逢人。只聞幽香度。

題蘭畫 原詩七十首

釋雲華

伴石生空谷。幽姿不喜肥。露沾高士佩。香滿逸人衣。羣花凡百種。各自弗無香。我愛幽蘭好。微風獨吐芳。

曉鶯

梁川星巖

滿城花霧月朧明。黃鳥占春誇善鳴。大抵春眠人失曉。綿蠻枉費百般聲。

聞籠鶯

藤井竹外

誰家籠裏有鳴鶯。遊子乍聞無限情。記得竹林茅屋曉。東窗生白兩三聲。

蝶 原七首

菅茶山

春郊不起風。夜氣扇和煦。宿蝶夢難成。雙雙出花舞。衝風觸花樹。花落撲吟榻。一片忽還枝。知佗是胡蝶。合、葉、通韻。

春好 福岡城下地名。

廣瀨淡窗

吏隱聚成村。蕭然春好處。疎籬不護花。野蝶來還去。

感事

唐于子漪

花開蝶滿枝。花謝蝶還稀。惟有舊巢燕。主人貧亦歸。

雜題 原三首

長三洲

疎鐘出深綠。何處有僧家。白雲飛不去。應是暮山花。

畫蘭。辱天眷。喜賦。

僧雲華

水墨唯蘭竹。平生養素心。塗鴉經御覽。野雀躍中林。天眷仁孝天皇之御覽。

〔標題〕【五】暮春。送春。春日所感。春日懷友。藤花。客舍聞鶯。

○ ○ ○

花殘

蝶恨

鶯語

惜花

○ ○ ○

綠陰

紅稀

雪落

吹盡

淡香

綠陰圍木が家ナド
ミドリバコヲナス樹木ノ茂ツ
タミタテ

鶯愁

欲去

花片

啄殘

春光

落絮

黃鳥

一聲

成陰

一片花

山鳥

一聲

飄香

永日

啼破

夜來

花飛

草閣

啼鳥

落花

泥新

野地

流水

斷雲

前林

流水

斷雲

斷雲

碧相依
ナミダガ衣
ヲウルホス
碧樹ガヨリ
アフ

禽聲

麥秀

芳草

潦花

苔錢

濕雨

風雨

雪消

鶯聲

草色

殘月

樹根

空勞

柳密

三月

柳陰

桃花

遍地

人倚

細風

殘花

燕語

春暖

點紅

鄉關

豈解

春色

一鳩

低連

數樹

鶯語

數聲

桃花

夢裏

吹綠

落花

輕陰

細水

贏得

晚花

浮花

仰見

雙燕

老鶯

芳姿

小雨

携酒

惜花

踏花歸

踏花歸
センコウノ
ウケムリガカ

篆煙

篆煙
ウケムリガカ

雨霏

雨霏
細雨ガフル

野人

野人
田舎人ノ門

蝶雙飛

蝶雙飛
ツバメガト

到晚

到晚
夕方ニナツ

紫與

紫與
赤ノ花ト

燕子

燕子
ツバメガト

半掩

半掩
半分トビラ

草色

草色
草ノ色ガコ

柳映

柳映
ヤナギガ川

○ ○ ○
 誰人 暮雨 看盡 映山
 藤花 著雨 啼鳥 滿池
 春林 野水 鶯語 棣棠
 煙沈 雨暗 春草 只憂
 千林 欲暮 啼到 藥畦
 深深 尙賞 飛蝶 夜來
 池塘 寂寂 晴雨 數聲
 欄干 院落 誰亦 五更
 梨花 百舌 唯有 別春
 花容 宿醉 流水 送春
 黃蜂 不定 春老 日長

蝶影 稀
 已懶飛
 紅樹微
 心事遠
 煙雨霏
 花亂飛
 扶醉歸
 燈影微
 水東流

春來 春カ
 難禁 況復 無恨 惜春
 春殘 不 何處 滿庭
 明朝 獨酌 腸斷 一鵬
 東風 綠暗 新綠 不堪
 林鶯 斷送 如血 未成
 池邊 滿院 啼血 賦詩
 春光 蝶怨 猶拆 一杯
 紛紛 別我 紅紫 玉壺
 殘花 柳暗 風雨 一瓢
 絲藤 落盡 猶冷 賞心
 春殘 管絃

○ ○ ○
 小 雨 無 恨 惜 春
 况 復 何 處 滿 庭
 不 管 無 奈 半 宵
 獨 酌 腸 斷 一 鵬
 綠 暗 新 綠 不 堪
 斷 送 如 血 未 成
 滿 院 啼 血 賦 詩
 蝶 怨 猶 拆 一 杯
 別 我 紅 紫 玉 壺
 柳 暗 風 雨 一 瓢
 落 盡 猶 冷 賞 心

○ ○ ○
 雨 中 愁 酒 消 憂
 憶 同 遊
 翠 條 柔
 筍 芽 抽
 使 人 愁
 醉 人 頭
 興 偏 幽
 映 吟 眸
 月 如 鈎
 總 成 愁

紅愁 雨フルタ 欲盡 メニ、ハ、 風妬 風ガ花ヲネ 紫藤 フヂ 日醉遊 毎日エヒテ

紅稀 葉底 ハノ下ニマ 吹盡 風花ヲ 醉眠 フヂ 獨上樓 毎日エヒテ

多情 クラクナ 昏昏 クラクナ 躑躅花 チヨクツツジノ 行樂 ユキナガラ 涕泗流 ナミダガデ

徐斟 オモロシクム 成陰 木葉カゲ 草色 チヨクツツジノ 花盡 ユキナガラ 志未酬 ドウシテモ

殘春 テスリニ 餘春 シヤウビ 燕子 カキツバ 悵悵 ナゲク 宿雨收 昨夜カラノ

憑欄 ヨリカカル 薔薇 バラ 杜若 カキツバ 悵悵 ナゲク 有意不 心ガアルカ

垂綸 魚ヲ釣ル 何妨 ヘハナイ 藤架 フヂダナ 多 コト、ハ、 宿鳥投 鳥ガ林ニ宿

濃紅 ナシラサマ 飄零 花ガオツ 滿架 フヂダナ 連雨 コト、ハ、 月一鉤 コウ 三日月

東君 春ノ神 園林 ツルヲノ 引蔓 バスルヲノ 枝上 ツルヲノ 春雨稠 シゲク

三春 春ミツキ 風光 ツルヲノ 蓋地 落花、 風雨 ツルヲノ 春回 カサネカワ

倉庚 ウグヒス 青苔 ウグヒス 早筍 早く出ル 花落 タケノコ 花外鳩 花ノ外ニオ

千枝 早 早起 ウスシロ 胡蝶 カニクム 客愁 ウスシロ 風滿樓 花ノカゲガ

開花 淡白 閉酌 ウスシロ 醉來 ウスシロ 醉來 ウスシロ 花影浮 花ノカゲガ

遊人 一 去 ヒトダヒサツテ、 對花 ヒトダヒサツテ、 對花 ヒトダヒサツテ、 【轉句】

瓊筵 ムシロイナ 醉夢 ムシロイナ 不嫌 ムシロイナ 不嫌 ムシロイナ 空中去 落花ヤ

家家 自笑 吹落 ムシロイナ 爲開 ムシロイナ 爲開 ムシロイナ 風光好 イケシキガヨ

斜陽夕日 樹樹 芳蔭 花ノカゲ 更憐 ムシロイナ 更憐 ムシロイナ 人空老 ヒトムシクオエ

重回 カサネカワ 首 カヘリミル 經句 ツユフアルメ 雨 アメ 多因 ムシロイナ

春將盡 カサネカワ 春如夢 カサネカワ 猶堪賞 ムシロイナ 猶堪賞 ムシロイナ 啼老綠 ウグヒスハナク

春將盡 カサネカワ 猶堪賞 ムシロイナ 猶堪賞 ムシロイナ 猶堪賞 ムシロイナ 啼老綠 ウグヒスハナク

春將盡 カサネカワ 猶堪賞 ムシロイナ 猶堪賞 ムシロイナ 猶堪賞 ムシロイナ 啼老綠 ウグヒスハナク

春將盡 カサネカワ 猶堪賞 ムシロイナ 猶堪賞 ムシロイナ 猶堪賞 ムシロイナ 啼老綠 ウグヒスハナク

春將盡 カサネカワ 猶堪賞 ムシロイナ 猶堪賞 ムシロイナ 猶堪賞 ムシロイナ 啼老綠 ウグヒスハナク

春將盡 カサネカワ 猶堪賞 ムシロイナ 猶堪賞 ムシロイナ 猶堪賞 ムシロイナ 啼老綠 ウグヒスハナク

○ ● ● ● ● ○ ● ● ● ● ○ ● ● ● ● ○ ● ● ● ● ○ ● ● ● ●

俱掃地トホニチヲハラフ ナニモカモ 留不住トムレトゴラス 春去、 花又落 一樽酒カキネニヨツ

何處覓イツクニカモトメンドコニモト ムルカ 紅雨亂花ト雨トミ 春已老 倚牆立カキネニヨツ

人又去△△△ 春寂寂春モサビシ 聊取適イフ、カテキヲトル少バカリ 雨纔霽アノワツカニハル 雨ガヤウヤウ

【作例】

春日所感 (集本書中之句)

天胤

殘花芳草多クハルニ 因雨。閒酌何妨ソクダシク 獨上樓ニ。無シ奈イカントモスルム惜春人又去ル。凭欄惆悵憶フ同遊ヲ。

三月盡與二童閒行

菅茶山

此日風光棄テ、我行ク。百花無ク跡鳥空鳴シク。喧沙芳草村橋路ノ。携ヘ步詩童ヲ看ル晚晴ヲ。

暮春散步

廣瀬淡窗

田間步去到江潭ニ。麥浪搖搖一徑深シ。三月香魚方上網ニ。人聲多在綠楊陰ニ。

寄懷如亭山人

梁川星巖

同遊事往已三年。花下琴檜月下筵。贏得柏家安樂法。日高方起夜深眠。

山人云、朝眠夜坐。我家安樂法也。

春晚絕句

同

友風子雨易銷魂ヲ。滿院青苔晝掩門ヲ。殘夢驚回春寂寂。一鵲啼度落花村。

野遊所感

村上佛山

風過池塘萍葉分レ。偶看科斗正成羣ヲ。世間萬事皆更變ス。唯有昆蟲似古文ニ。

題藤花

田能村竹田

兩株高柳夾僧家ヲ。偶爾憑欄興自佳ナリ。籬畔末修去年架。半庭橫臥紫藤花。

春日訪有臺途上作

廣瀬旭莊

昨夜風吹麥尚斜ヲ。即從疎處一見黃花ヲ。春晴恰好出門步スルニ。多恐詩人不レ在家ニ。

遊靈藤寺

米良東嶠

百年蕭寺碧溪頭ヲ。問柳尋梅儘自由ヲ。別有白藤花半發ク。微風搖動水晶簾。

春 日

粵紅駭綠雨初晴。燕子飛飛風外輕。菱笠幾群驅犢去。綺羅一隊踏花行。

杜 鵑

岡 松 巽 谷 長 三 洲

溪雲欲曉月無痕。燈影誰家臨水軒。知有愁人同我聽。一鵑啼過落花村。

雨 中 送 春

廣 瀨 旭 莊 廣 瀨 淡 窗

東風吹雨洒雕輪。楊柳依依欲斷魂。真箇送春如送客。滿山花草有啼痕。

遊 櫻 祠

松 本 奎 堂

花開萬人集。花盡一人無。但見雙黃鳥。綠陰深處呼。

饒 春

秋 山 玉 山

欲迹春歸處。問春春不語。流水與落花。悠然背人去。

澗河夜泊聽鵲

蓬窓雨蕭蕭。歸思滿煙落。一聲澗河曉。杜鵑不知處。

小園雜詩 原二首

田 能 村 竹 田

四檐多鳥語。日氣泛蒼苔。昨夜東風急。隣花悉落來。

春 山

廣 瀨 淡 窗

春山雨初晴。一路禽聲集。古廟定誰祠。行人見花入。

春 遊 嵐 山

劉 君 鳳

長橋入山麓。寺出樹樛樑。此裏趣多少。不關花有無。

第二節 夏 の 部

【一】首夏田家。山居。早起。曉發。梅雨。夏日即事。水亭觀螢。

清陰	キヨキカ	葛	葦	セイセイ	草ノシゲ	綠樹	千章	木ノ多キ	樂	時ノ太平ヲ
濃	カキカ	ガ	交	コト	ハハル	綠葉	佳木	下羊腸	山ノ曲リ坂	下ニ羊腸
森	タルコト	木ノ茂ツ	薰風	四月頃ノ	風	夏日	修景	永キ日	僻幽	ナカ

○ ○ 微風 四月頃ノ
 ○ ○ 清和 伏義
 ○ ○ 羲皇 伏義
 ○ ○ 藏鶯 木葉ナド
 ○ ○ 葱籠 アフキカ
 ○ ○ 夏景 ナツノ日
 ○ ○ 首夏 ナツ
 ○ ○ 孟夏 ナツ
 ○ ○ 四月 ナツ
 ○ ○ 蒼翠 ミドリ
 ○ ○ 新緑 ミドリ
 ○ ○ 遮日 樹木ガ
 ○ ○ 清晝 樹木ガ
 ○ ○ 更無芳 ウレウ心ガ
 ○ ○ 暗愁長 ナガイ
 ○ ○ 醉爲郷 コト
 ○ ○ 半栽桑 半分ニハク
 ○ ○ 有餘涼 十分スミシ
 ○ ○ 枕邊香 マクラベガ
 ○ ○ 沒斜陽 夕日ガシヅ
 ○ ○ 好風光 ヨキケシキ
 ○ ○ 傍林塘 木ノアルツ
 ○ ○ 管艷陽 四月ハ
 ○ ○ 近竹牆 木ノアルツ

蟬聲 ナクセミ 茂樹 ツモレル
 鳴蟬 ナクセミ 積翠 ミドリル
 青苔 靜聽 留客 梅熟
 林亭 中ノ小屋 竟日 一日中 簷溜 マダリア
 陰深 雨歇 行潦 路上ノタ
 欣 遠舍 蛙 路ニ同ジ
 扶疎 枝ノ盛ンニ 烏雀 籠ニ同ジ
 殘 多イコト 蛙 籠ニ同ジ
 殘 多イコト 蛙 籠ニ同ジ
 參天 高キ木ガ 靜對 シヅカニタイス
 西窗 隔葉 鄰舍 夕陽
 階前 翠滴 林濕 濯枝 雨ノ、
 連枝 永日 簷暗 木ガ茂ツ 竹窗 竹ノアル

〇 〇 〇
 破塘 ツツミヤ
 斜陽 夕日
 園林
 窗前
 餘芳 花ノコレル
 朗看 ミルシヅカニ
 南郊 村ハヅレノ
 鷄鳴
 柴門 折リド
 蒼松 青キマツ
 清泉
 〇 〇 〇
 萬壑 ヤ谷ノ山
 徑路 コミチ
 小徑 ミチルコ
 鳥語
 碧樹 村ノ路ニ
 滿巷 一バイ
 雨霽 ヒトスヂノ
 雨暗 ヨコグモノ
 咫尺 八寸カ
 睡足 ネムリダ
 〇 〇 〇
 螢火 ホタル
 千點 ホタル
 水聲
 夜光 螢
 照書 螢デ、
 點莎 螢ガ草ニ
 晚涼 タ方スズ
 傍林 テマハル
 夜深
 逐風 ホタルナ
 去留
 酒家
 〇 〇 〇
 老竹村
 農事 繁ガシイ
 〇 〇 〇
 溪上村 長イ竹ノソ
 修竹園
 烟雨 繁 雨ガ多イ
 〇 〇 〇
 枕ニ清川 トリニネル
 汎ニ樓船 ヤカダブネヲ
 屬ニ茫然 マフコト
 共歡然 トモニヨロ

幽居 オクアブカ
 螢光
 流螢 トンデキ
 流星 ホタルノ
 孤光 一四ノホ
 〇 〇 〇
 螢 犬吠
 地僻 ヘンビ
 一徑 コミチノ
 我愛 アレアス
 一點 ホタル一
 螢火 ホタルノ
 臨波
 浮波
 盛衰 螢ヲ、
 徘徊 ブラブラ
 含輝
 〇 〇 〇
 濃淡
 殘滴 オチノコリ
 庭館 ヤカタル
 斜月 ナクコト
 鷄唱 ナクコト
 半疑
 繁露
 欹枕 コト
 庭宇 ニハ
 方夢 ラミル
 深處
 殘曉 夜明ケガ
 〇 〇 〇
 雨如 烟
 落 吟邊
 玉几 前 机ノマヘ
 樂 堯天 太平ノ世ヲ
 雨餘 天 アマアガリ
 綠蒼 然 ミドリガア
 〇 〇 〇
 經 幾年 何年タツタ
 驚 午眠 雞ナドガ
 獨學 仙
 雨後 天

雨後新綠 (集本書中之句)

天胤

花飛春色去。雨後出都門。行樂那邊好。新篁溪上村。

梅雨 (同前)

同

幽居誰是伴。盡日雨如烟。黃昏臨水坐。熠燿落吟邊。

首夏田家 (同前)

同

睡起幽觀倚樹根。葱籠密葉爽詩魂。雞鳴犬吠無愁事。茅屋垣頽樂亦存。

早 (同前)

同

眠覺蕭蕭雨一犁。白烟深處月沈西。冷泉幽石中庭暗。靜聽深林杜宇啼。

雨中村莊

梁川星巖

村北村南水滿田。端三端五雨如烟。土公廟下無多願。只禱今年是稔年。

稔年、豐年也。

霖雨偶晴

廣瀨旭莊

葉背孤蟬忽爾鳴。陰雲一罅放新晴。斜陽不解黃昏近。復在綠槐高處明。

比叡山

劉君鳳

閒坐叡峰雲霧間。清風六月拂仙寰。玉皇當日簾前雪。一點香爐是此山。

清少納言仕一條帝之後宮、應命推簾故事。

山中口占

平野五岳

亂山堆裏掩柴門。繞屋松泉聞不喧。唯使老僧高臥穩。白雲一片亦天恩。

訪山居

脇蘭室

煙嵐深占一乾坤。岸上桃華掩洞門。落日春風流水迥。千山如畫向黃昏。

西庵雜詩 原三首

帆足萬里

觀瀑巖罅路幾層。陰崖噴霧濕衣藤。一行都怕長蛇出。定是垂崖老紫藤。

山中五聲 原五首

岡松甕谷

瑟瑟隨風灑。濛濛隔水兩三家。山窓晝靜香灰盡。轉愛春聲到杏花。

夏 日

歛^{ムル}昏^ク雨^ヲ過^{ケテ}滌^フ煩^ヲ襟^ヲ。竹^ノ露^ノ松^ノ風^ノ翠^ニ更^ニ繁^シ。且^ツ喜^ブ閒^ニ中^ノ意^ヲ適^ス。讀^ミ殘^ニ道^ノ德^ヲ五^ノ千^ノ言^ヲ。

早 發

寒^シ馬^ノ蕭^々蕭^々月^ノ欲^ク斜^ト。板^ノ橋^ノ曉^ノ色^ヲ。榮^ニ霜^ノ花^ヲ。十^ノ里^ノ荒^ノ村^ノ人^ノ未^ダ起^カ。桔^ノ槔^ノ架^ノ上^ニ立^ニ寒^ニ鴉^ノ。

長 三 洲

早 起

鄰^ノ井^ノ啣^ニ啣^ニ響^ニ。轆^ノ轤^ノ。摩^ノ挈^ノ困^ニ眠^ニ下^ニ階^ヲ。一^ノ籬^ノ風^ノ露^ノ殘^ニ蟾^ノ曉^ヲ。恰^モ及^フ碧^ノ花^ノ纒^ニ統^ニ初^ト。

大 槻 磐 溪

虞、魚、通 韻。

早 起

汲^リ罷^シ井^ノ華^ヲ天^ノ未^ダ明^ケ。露^ノ叢^ノ處^ノ處^ノ暗^ニ蛩^ノ鳴^ヲ。殘^ニ蟾^ノ影^ノ逗^ル疎^ノ籬^ノ角^ヲ。照^シ見^ル牽^ル牛^ノ綴^ル碧^ノ英^ヲ。

梁 川 星 巖

曉 發 途 上

幾^ノ綫^ノ炊^ル煙^ノ颺^ル曉^ノ晴^ニ。遙^ニ知^ル茅^ノ屋^ノ飯^ノ方^ニ成^ル。田^ノ園^ノ景^ノ象^ノ自^ラ然^ニ好^シ。不^レ獨^リ雞^ノ鳴^ル犬^ノ吠^ル聲^ヲ。

藤 井 竹 外

卽 事

蒼 茶 山

走^リ雨^ノ過^リ山^ノ彩^ノ霓^ノ生^ル。殘^ニ雲^ノ洩^レ日^ノ翠^ノ映^ル明^ヲ。欲^ク知^ル詩^ノ畫^ノ無^ニ佗^ノ趣^ヲ。出^テ戶^ヲ呼^ビ童^ノ看^ル夕^ノ陽^ヲ。

曉 發

叱 石 道 人

一^ノ村^ノ送^リ盡^シ一^ノ村^ノ迎^フ。殘^ニ月^ノ依^リ稀^ト露^ノ氣^ノ清^シ。何^ノ處^ノ農^ノ家^ノ人^ノ早^ク起^ル。聞^ク他^ノ晨^ノ井^ノ轆^ノ轤^ノ聲^ヲ。

雨 後 過 城 南 田 舍

藤 井 竹 外

蓑^ノ衣^ノ亂^レ颺^ル竹^ノ籬^ノ深^シ。送^リ得^ル黃^ノ梅^ノ十^ノ日^ノ霖^ヲ。早^ク已^ニ青^ノ秧^ノ藏^ニ牛^ノ鷲^ヲ。雨^ノ前^ニ一^ノ大^ノ如^ク鉞^ノ。

觀 螢

大 槻 磐 溪

柳^ノ外^ノ流^ル光^ノ照^ル水^ノ清^シ。無^ク風^ノ無^ク月^ノ夜^ノ三^ノ更^ト。一^ノ螢^ノ忽^チ被^レ垂^ニ條^ニ觸^ル。誤^リ墜^ル波^ノ心^ノ滅^ル復^ル明^ト。

螢

蒼 茶 山

雙^ノ影^ノ熒^々出^テ除^ノ翔^ル。愛^シ看^ル開^ノ闔^ノ近^ニ吾^ノ傍^ニ。忽^チ然^ニ入^リ柳^ノ無^ク蹤^ノ跡^ヲ。風^ノ約^ク垂^ニ條^ニ復^ル露^ノ光^ヲ。

所 見

村 上 佛 山

快^ク雨^ノ樹^ノ皆^ク鳴^ル。疾^ク風^ノ波^ノ欲^ク立^ト。釣^ル童^ノ爭^ヒ路^ノ歸^ル。荷^ノ葉^ノ戴^ヒ爲^レ笠^ト。

晚 望

同

晚雲濕不飛。村火遠依微。多少插秧女。青蓑帶雨歸。

獨坐敬亭山

衆鳥高飛盡。孤雲獨去閒。相看兩不厭。唯有敬亭山。

唐李白

螢

庭竹粘孤螢。寒光穿紙牖。忽飛不ニ太高。還著ニ鄰家柳。

劉君鳳

(標題)【三】新荷。蓮花。竹。筍。池亭觀蓮。移竹。

蓮塘

清池

荷花

芙蓉

芙蓉

芙蓉

魚戲

花氣

香遠

張蓋

君子

藕花

雨餘

綠波

綠池

滿池

柳絲鄉

藕花塘

引杯長

送微涼

水中央

圓荷

紅妝

輕舟

幽香

亭亭

池心

朱華

風涼

青錢

微風

乘涼

凝珠

冉冉

淨友

不染

露冷

淨植

麗質

綽約

葉卷

倚檻

玉憂

綠竹

勁直

含露

擊雨

荷淨

無數

侵曉

雲錦

浮水

抽錦

龍角

心事

長笛

高節

襲人

蘸波

雨荷

碧雲

出池

此君

曉烟

傍軒

月來

淤泥

六郎

跳珠

好銜觴

是誰莊

過瀟湘

色蒼蒼

水禽翔

照新篁

發幽香

水殿香

智慧光

自滿堂

翠蓋張

○ ○ ○

無塵袖チリニヨゴル 汗天質汗ニシツケガス

開來往カシニイワウス 偏宜夏ヒトニナツニヨロシ

朝來露アサカラノ 分清影月夜ノ竹

能持操イセイセツ 夷齊節伯夷ヤ叔齊ノ

微風觸無二人見 居物表チリニケガ

坡仙筆蘇東坡ガ朱竹 干霄氣ソラヲオカ 嬌欲語蓮花ガ 娟娟淨ケンケントシテキヨシキレイデ

穿苦碧竹ガ 如西子越ノ美女西施ヲ西子トモ曰フ。吳王ニ送リタレバ、吳王之ヲ溺愛シテ遂ニ越王ノ爲ニ滅サレタ。今ハ蓮花ニ比ス。

【作例】

觀 蓮 (集本書中之句)

麗質清如拭クシテシ 芙蕖十里塘フツテヲ 繞徑閑來往ニ 微風水殿香シ

同

同

同

○ ○ ○

花十丈蓮ノ大ヲ云

先有節竹ハ地中ノ時ヨリ節ガアル 露龍角露ニ龍角

人莫折ヨリ節ガアル

三更雨スベテサツバ

因風度竹葉ノ動クハ

渾灑酒風ノクルニヨル

天 胤

迎風翠蓋送微涼ヘテツ 花氣幽香自滿堂ハ 紅妝映水如西子スルハ 含露芳姿似六郎ムノヲ

臨平道中

風蒲獵獵弄輕柔トシテス 欲立蜻蜓不自由スレバ 五月臨平山下道スレバ 藕花無數滿汀洲ムツ

不忍池寓園雜吟

香霧濛濛水氣清トシテ 逗籠殘月影朧明トドマルノ 每朝支枕費幽聽ト 髣髴錦苞初發聲ト

荷

盆大蓮池也足誇モマダ 青錢點水有新荷ツテニ 三三五五君試數ニ 較比阮生囊裏多ハ

詠

此竹自生人不栽ノ 一竿竿裊立蒼苔タラヤカニシテツ 除非散髮挾琴客ヲ 獨許清風闌入來ヲ

夜聽竹風

第六章 木 文 (夏)

一陣風來一陣鳴。虛檐夜靜見秋生。萬竿脩竹非吾有。只領萬竿脩竹聲。

竹

廣瀨旭莊

風枝露葉無塵垢。直節虚心耐雪霜。晉代七賢唐六逸。宦情都爲此君忘。

(七賢)(晉) 嵇康。阮籍。山濤。向秀。劉伶。阮咸。王戎(謂之竹林七賢)

(六逸)(唐) 李白。韓準。裴政。張叔明。陶沔。孔巢父(謂之竹溪六逸)

自寫竹

明石秋室

恩恩逸筆詎爲竹。聊將胸憶寄毫端。非介非分隨手抹。是蘆是柳任人看。

種竹

同

養成叢碧一單窓。紗坐看濃陰苔色加。南陌紅塵高十丈。何曾半點到吾家。

畫竹

米良東嶠

曾描東嶠胸中竹。鸞尾婆娑月影寒。老去如今忘筆法。空看言序碧琅玕。

謝某生惠筍

村上佛山

寄來新味自山園。頓使貧儒飽晚餐。從此吾文多變化。腹中收得幾龍孫。

竹

恒遠精齋

重重介影午陰涼。閒睡只須移我床。滿枕清風吹不斷。一場好夢過瀟湘。

新竹

三浦梅園

昨夜風吹籟。新陰暗古道。時時低拂雲。可待幽人到。

竹林微雨

梁川星巖

尚竹森如東。夕陽微雨懸。入林渾不見。漠漠只輕烟。

移竹

叱石道人

六月天將熱。爲移竹數竿。南軒枕書臥。介介逼人寒。

(標題) 【三】 苦熱。納涼。驟雨。晚步。夏夜。牽牛花。

○ ○

● ●

○ ●

● ○

● ○ ○ 庚

炎天

畏日 夏ノ日

長夏 日ノ長イ

火雲 夏ノクモ

竹生聲

○ ○ ○
 奇峰 雲ノカタ
 炎風 イシヲトカス
 涼風 シヨウフウ
 清風 セイフウ
 乘風 セフウ
 流金 アツサガ
 浮瓜 水ニ、
 微涼 スミミダ
 涼棚 ナ
 蟬聲 カタビラ
 稀衣 カタビラ
 海岩 非常ニア
 燦石 イシヲトカス
 殿閣 タカドノ
 倚檻 シヨウアヲラフ
 滌暑 オシラトク
 解慍 風ガ熱ヲ吹キ去ル
 拂袖 風、
 竹院 竹アル家
 徒榻 ウツシヤル
 熱鬧 アツグ
 坦腹 テハララダス
 三伏 夏ノ事
 沈李 スモ、ヲ水ニ入レル
 炎熱 朱ヌリノ
 朱檻 テスリ
 涼月 蓮ノ葉ガ
 荷淨 キヨイ
 邀月 ツキヲムカヘ月ノ上ル
 遊月 ノヲマツ
 捲簾 ヒテヲマテ
 竹深 ヒデヲマテ
 北窓 ヒデヲマテ
 脫巾 ヒデヲマテ
 趁涼 リヤウヲオフスマシサヲ
 晚涼 夕方スマ

○ ○ ○
 一望平 雨ナドガ
 打窗聲 雨ナドガ
 落雷轟 ラクトライトノロク
 寂無聲 サマシキ
 付一棊 一日ヲ碁打
 樹陰清 ニマカス
 皎月明 白キ月ガ明
 點點明 一ツ一ツア
 飲一觥 酒一バイノ

疏簾 メノアラ
 迎風 イサダレ
 迎秋 サシラアラフ
 螢飛 ワカケケテ
 移牀 コシカケテ
 天涼 ウツシヤル
 蛙鳴 シウ
 衣襟 キモノノ
 揮塵 カゲヲカシマニス
 林泉 カゲガサカ
 風清 ニウツル
 清流 ニウツル
 雨霽 マクアラフ
 風露 無レ暑
 水禽 水ニ
 風露 風露
 水禽 水禽
 晚樓 ウツシヤル
 坐看 ウツシヤル
 綠陰 ダケノ
 竹牀 コシカケ
 醉吟 アツイ
 驕陽 アツイ
 火雲 夏ノクモ
 早雲 ヒデリノ
 洗心 クモ

宿鳥驚 スナクカハセミガ
 翡翠鳴 ナク
 展齒輕 ゲタノハガ
 作二雨聲 風聲、
 正四更 夜半スギ
 罽一枰 ゴバン一ツ
 舟自橫 ボート
 詩思清 シ
 山雨晴 ヤマヒトリ
 還獨清 ヒトリ

第六章 本 文(夏)

○ ○ 吟哦詩ヲギンズル ● ● 永晝永イ日 ○ ● 杯酒三日月 ● ○ 斷雲コトヒルネ

○ ○ 前川ヨクシヤテ 浴罷上ツテ 新月三日月 黑甜コトヒルネ

○ ○ 傳杯水殿 水殿イヘハノ 明月 送涼

○ ○ 池亭風籬 風籬ルニフカル 枕水スバミダナ 堤柳

● ○ ○ 炎氛空アツイ 千燈 白羽扇子ナド 風細

● ○ ○ 喧闐カマビス 冰壺ツボ 盛暑 清爽

風窗 侵肌 入夜 山寺

藤牀トウカヅラ 油雲黒雲 月白 斜路

風軒スバシキ 優遊ユツクリ 竹密 微月

△中庭 絃歌 坐ソウニサス 千里

絶塵埃

一聲雷

暮鐘ヨウモヨホス 催タナリ 亂峰ランホウウツダカシ 堆雲カタリ 堆雲ハジメダ 堆雲ハジメダ 堆雲ハジメダ

兩三杯酒、夕陽開夕日ガハレ

入簾來風、

樓臺 襟懷キナクワイムネノ 翫月ツキヲモテアソブ 胡蝶夢ニハ、トナル 飄然デンセントシテワラワラ笑フカ

橋頭ハシノホ 天涼 緩步ユルユル 煙裊ケリタラカヤ 曲江限曲ツタ川ノ

長風遠クカラ 漁家 紫電イナビカ 松籟松ノ風 好徘徊ハイクワイ

乘風 徘徊 澗墨黒雲 蛙吹ナク事 載月回舟ニハ、

歸鴉 澄江 趙盾夏日ノタ 驚起 動地來智ヤ大雨ガ

沿溪ヒミ、シ 黄昏 午夢ヒルネノ 安得エタイ 密不開黒雲ガ、

斜暝シヤクシヤク 轟雷コウライ 水館水ノホト 何處ドコカ 密不開黒雲ガ、

● ● 百尺臺高イウテナ 拂面來清風、 蕙草摧ニホヒ草ガ雨 遶殿雷メケルノヲ

○ ○ 避日槐ケルエノキ 石上苔 夾道槐

○ ○ 鳴還走雷ナド、 衣流汗衣ガアセニ 天河露天ノ川ガアラ 應望雨マヤニアンノナムベシ

○ ○ 走雷雷ナド、 衣流汗衣ガアセニ 天河露天ノ川ガアラ 應望雨マヤニアンノナムベシ

第六章本 女(夏)

南山霹靂起龍雷。倏忽颺風驅雨來。隔岸臨江是誰子。夕陽明處坐銜杯。

夏日雜詩 原十二首

苔一茶山

滂沱雨聲逐人行。踈聽荷池亂點鳴。俄頃奔雲洩殘日。稻田仍有踏車聲。

病中暑甚。憶舊事而作。原六首

同

溪間終日打香魚。不覺通身汗綴珠。倦命行厨坐松蔭。林風吹倒酒胡盧。

魚、虞、通韻。

四更

藤井竹外

過盡三更到四更。新涼坐守讀書檠。判知月出東山上。樹樹樹頭鴉噪聲。

晚雨

角田九華

疎樞小閣畫如烘。葵扇奈無些子功。雨意蒸雲天潑墨。微涼先著透簾中。

夏夜即事

村上佛山

葉葉芭蕉大。清風時一揮。月從其上過。露向我邊飛。暑氣於今盛。涼宵如

稀。恰逢吟叟到。況有酒童歸。

清夜吟

宋邵康節

月到天心處。風來水面時。一般清意味。料得少人知。

題畫

平野五岳

急雨從東到。涼生戶牖間。殘雷聲已遠。又看夕陽山。

驟雨圖

吐石道人

霹靂驅雲急。宿禽出樹忙。卻怪行人影。三三隱綠楊。

季夏晚望

廣瀨旭莊

隔畝農人去。殘煙淡似秋。鐸聲聞未已。暝色沒歸牛。

第三節 秋の部

(標題)【一】立秋。新涼。秋夜。秋日雜詠。初秋郊行。秋夜懷友。水亭新秋

○ 雲容 クモノカ
 一味、ノ涼
 ○ 心緒 心バヘ
 涼思 スバシキ
 蕭爽 サハヤカ
 ○ 夕陰 リ ヌウグモ
 就涼 スバシキ
 紫梨 ナシ
 ○ 獨彈箏 ヒトトリデコ
 響丁丁 ナド
 ○ 對孤榮 シビニ向フ
 ○ 初秋 葉上、ノ露
 ○ 涼秋 枕簟 枕トシキ
 ○ 芳檻 キムクゲシ
 ○ 清景 秋ゲシキ
 ○ 孤雁 書物
 ○ 一雁橫
 ○ 夜自明 涼シサガ
 ○ 月正明
 ○ 日夜生 ヲノハ
 ○ 水樣清 水ガキヨイ
 ○ 試短榮 勉強ヲケテ始ム
 鱸魚 故事後出
 丹棗 ナツメ
 寒叢 サムキク
 寒蟬 秋風ノ音
 驚蟬 白露、
 橫江 詩ヲ作ル
 詩懷 オモヒ
 颺颺 秋風ノ音
 鮑魚 故事後出
 思葦 故事後出
 清秋 故事後出
 薄鱸 同レ前
 寒蟬 秋風ノ音
 寒蟬 白露、
 橫江 詩ヲ作ル
 詩懷 オモヒ
 颺颺 秋風ノ音

燈青 殘雷 絡緯 ス キリギリ
 雲歛 ソバ
 月滿城 カクツナマ客ノ心ヲ
 惱客情 クルシムル
 萬里明 明月、
 早已驚 秋ノ早ク來
 竹梢鳴 竹ノ枝ガ風
 促織鳴 ハタヲリ蟲
 碣石鳴 アマダレノ
 爽氣生
 筆硯清
 蟋蟀聲 ノコエ
 數點聲
 節序更 ツタ
 燈花 トモシビ
 秋陰 リ アキグモ
 蕭殺 ミタテ
 零落 チブル、オ
 秋葉 霜葉
 秋葉 霜葉
 衣冷
 秋景 商飆 秋風
 砧杵 キヌタ
 鴻雁 大ガンヤ
 霜月
 風冷
 一夜 浙瀝 風ガ物ヲ動カスコエ
 風冷
 胡枝 ハギ
 牽牛 星ノ名又 アサガホ
 素節 秋ノ事
 秋葉
 寂寞 サビシイ
 霜葉
 染出 霜ガ木ノ色ヲ
 衣冷
 片葉 落葉ナド
 拂檻 落葉ナド
 秋景 商飆 秋風
 砧杵 キヌタ
 鴻雁 大ガンヤ
 霜月
 風冷
 新霜 霜楓
 新添 ソフ 涼氣新ニ
 三秋 秋、七、八、九
 忽覺
 砧杵 キヌタ
 鴻雁 大ガンヤ
 霜月
 風冷
 秋情 三秋 秋、七、八、九
 蛩音 ノコエ
 今宵 淅瀝 風ガ物ヲ動カスコエ
 風冷
 風聲 今宵 淅瀝 風ガ物ヲ動カスコエ
 風冷
 姮娥 月ノ異名
 水輪 テ 月ノミタ

終宵	前庭	浮雲	長空	流天	精華	如霜	婆娑	玲瓏	嬋娟	金波	○○
ヨドヲシ				天ノ川 ドガハ、ハ			葉ガ月影ニ ウゴク事	玉ノ如ク キレイ	ウツクシ	キレイ	
影弄	宿鳥	此夜	碧落	萬頃	練白	冷艶	皎潔	乞巧	七夕	七夕	●●
カケラズ ドウゴク事	竹ノカケナ ドウゴク事		大空	萬町モア ル廣イ事	物ノ白イ 形容			手ノタクミ ヲコフ事	タナバタ 牛女ニ星ニ	タナバタ	
牛女	風葉	涼颯	蒲柳	疏雨	霜菊	山瘦	天遠	衰柳	風木	搖落	○●
牽牛星ト 織女星ト	風ガハラ チラス	リッハヒツウ 秋風	ヤナギ	少シノア メ					アタル 風ガ木ニ	木ノ葉ガ オツル事	
白雲	石榴	暮砧	客衣	薜花	簡編	短檠	一涼	晒書	暗蟲	暑除	●○
	クダモノ	ボチシ 日クレ方ノ キヌタノオト		アサガホ	書物	昔ノ行燈		シヨラサス 書物ヲ日 ニホス事	草ムラノ 中ノムシ	シヨラソク	
風露清	○●○	葉底笙	一雁征	一葉輕	月滿營	百慮盈	故國情	逐月行	繞砌鳴	乞巧	
		谷川ノ音ノ 形容	一匹ノガ ガトビユク		月色ガ陣營 ヲ照ス事			月ト共ニ西 ニアルク事	メグツテ 蟲ガナク	ベッタナ 祭ルタナ	

闌干	分明	無聲	溪聲	虛堂	蒼煙	孤鳴	傷懷	多情	寒聲	朝來	誰家
カン ナミダノ デル事				ムナシキ イヘ		一匹ハナレ ナナク事	ムル心ヲイ タムル事				ドコノイ ヘカ
捲盡	永夜	露滴	斷續	樹老	夜月	歲月	又歎	不識	靜夜	坐見	仰見
マキツク ケル			ガンノコエ ナドハ、ハ				又ナゲク				
良夜	冰鏡	清影	光彩	千里	晴盡	如洗	秋半	知已	秋院	烏鵲	雲淨
	月ノミダ テ	月カゲ	月ノ光ヲ			月夜ノケ シキ		ワレヲ知 ル者	秋ノ家	カサ、ギ	
織成	捲簾	孟秋	桂花	送涼	露枝	二星	皎然	箇中	月光	一輪	一天
オリナス		初秋	木犀ノ花		枝ニツユガ カ、リヲル	牛女ノ ハ、ハ	月ノ白キ 事	コノウチ			
砧杵鳴	寒有聲	秋水清	殘月明	星斗明	誰撫箏	詩思清	山雨晴	孤雁鳴	清白名	秋暗生	【轉句】
キヌタノオ トガスル	風木ノコエ ナド		北斗七星ナ ド明カ		ヲヒクノカ ヲヒクノカ			一匹ノガ ガナク	キヨキケツ バクノナ		

〔思葦鱸〕晉ノ張翰ガ都ノ洛陽ニ在官ノ節、秋風ノ起ルヲ見テ、我ガ郷里ノ葦菜ノ羹ト鱸魚ノ膾トヲ思ヒテ、遂ニ官ヲ辭シテ郷里ノ吳ニ歸ツタト云フ故事。

〔乞巧〕七夕ノ夜、牽牛星ト織女星トヲ祭ツテ、男ノ子ハ習字ノ巧ナランヲ乞ヒ、女ノ子ハ裁縫ノ巧ナランコトヲ乞フト云フ故事。

〔宋心〕楚ノ宋玉ノ心トテ、彼ガ文章ヲ作ツテ、秋ヲ悲シミタルヲ曰フ。宋玉ハ屈原ノ弟子。

【作例】

立

秋 (集ニ本書中之句)

天

胤

瑟瑟西風度。秋光日夜生。一天渾月色。千里候蟲聲。

秋日雜詠 (同)

同

金風入樹晚涼生。忽覺詩懷筆硯清。烏鵲寒蛩秋萬里。思葦永夜對孤檠。

通 天 橋 京都東山

恒 遠 精 齋

通天秋色冠東山。戀賞紅楓尙未還。滿地夕陽多笑語。餘霞散入醉人顏。

初 秋

梁 川 尾 巖

幽階露白峭涼生。一片吟愁夢不成。殘夜雲銷河漢近。似聞織女弄梭聲。

村 居 秋 來

蒼 茶 山

山村早覺素秋通。數曲疎籬不障風。浸種插田如昨日。驚看涼葉沒莨童。

江 月

龜 田 鵬 齋

滿江明月滿天秋。一色江天萬里流。半夜酒醒人不見。霜風蕭瑟荻蘆洲。

秋 夕 鴨 堤 散 步

藤 井 竹 外

未結家家乞巧棚。火雲無跡暮天晴。丁東擣出如眉月。秋自村砧聲裏生。

秋 日 雜 詠

菅 茶 山

隣僧乞我小園芳。蕃菊胡枝秋海棠。忽掣一籃來作報。帶泥松蕈滿廚香。

秋 懷

宋 陸 放 翁

圓丁傍架摘黃瓜。村女沿籬採碧花。城市尙餘三伏熱。秋光先到野人家。

秋 宵 獨 坐

脇 蘭 室

林塘風起拂_ニ烟嵐_一。月動漣漪青若_レ藍。半夜樓頭人未_レ睡。數行新雁向_ニ江南_一。

秋景橫_レ坡

田能村竹田

山光近映_ニ水光_一清。移_ニ宅湖頭_一不_レ掩_レ荆。蕉影竹竿桐數樹。終朝使_ニ客聽_ニ秋聲_一。

秋夜

元田竹溪

白露秋堂夜氣清。無_レ人織月照_ニ三更_一。西風忽入_ニ長松_一落。吹向_ニ書帷_一作_ニ雨聲_一。

山房口占

秋月橋門

半是輕雲半夕陽。何來爽氣入_ニ山房_一。木犀猶未_レ傳_ニ芳信_一。野稻花開秋自香。

水亭新秋

長三洲

水邊亭子夕陽斜。獨凭_ニ虛欄_一數_ニ晚鴉_一。清露有_レ聲秋始動。微風吹度白蓮花。

牽牛花

廣瀨淡窗

妖紅兼_ニ冶翠_一。街_レ色踰_ニ鄰牆_一。底事貪_ニ微露_一無_レ心向_ニ太陽_一。

即事

菅茶山

出_レ戶看_ニ新霽_一。餘飛尙在_レ庭。檐端老松蓋。中洩兩三星。

即事

村上佛山

枕簟已收後。詩書未_レ講前。孤雲落_ニ我目_一。送到碧山巔。

早秋獨夜

唐白樂天

井梧涼葉動。鄰杵秋聲發。獨向_ニ檐下_一眠。覺來半牀月。

長安秋望

唐杜牧之

樓倚_ニ霜樹外_一。鏡天無_ニ一毫_一。南山與_ニ秋色_一。氣勢兩相高。

初秋

臨蘭室

午睡南軒下。涼風枕上生。靜聽_ニ松樹響_一。一半已秋聲。

秋山談_レ古圖

田能村竹田

野明雲氣薄。林豁葉聲殘。素友來談_レ古。山秋語語寒。

溪行

帆足萬里

○ ○
 何之 イックニクドコニ
ニクカ
 南樓 サレビダシズ
ナクコト
 愁人 不レ失
列ラウシ
ナハズ
 天倫 寂寞
水闊 ヒロク
 沙汀 スナアル
ミギハル
 天低 天ガヒク
タル
 銀盤 月ノミダ
テ
 氷輪 月
月
 金波 月ガ水ニ
ウツリテ
 金盆 月ノ見立
 孤輪 一輪ノ月
 ● ●
 叫斷 サレビダシズ
ナクコト
 不レ失 列ラウシ
ナハズ
 寂寞 水闊 ヒロク
 淡月 ウス色ノ
月
 片月 一、
、
 皓月 白キ月
月
 柱影 月ノ見立
 玉兔 月ノ異名
 皎皎 月ノ白キ
色
 素影 月
 ○ ●
 紅蓼 リキウ
アカキタ
 秋月 明月
 明月 孤月
 孤月 新月 三日月
 新月 三日月
 江月 江上ノ月
 纖月 ホソキ月
三日月
 弦月 ユミハリ
月ノ半月
 玄兔 月ノ異名
 沈璧 ウツル事
 山月 委波 月色ヲナミ
マカセル
 ● ●
 暮雲 月明
 月明 月圓
 月圓 玉ノタラヒ
トテ月ノ事
 玉盤 玉ノタラヒ
トテ月ノ事
 半輪 弦月
 一輪 、月
 桂華 月ノ見立
 一彎 月ノ事
 素娥 月ノ異名
 躍金 ウツル事
 委波 月色ヲナミ
マカセル
 ● ○ ○
 斷腸聲 ハラワダアツノコエ尤モカナ
シキコエ
 夢魂驚 ユメガオド
ロク
 宿鴉驚 トマルルカ
ラスガオド
ロク
 半窗明 夢難成
 夢難成 滿江城 月色
 雁南征 雁ガ行列ヲ
 別懷榮 マコトワカレノ心
ガマツハル
 自成行 雁ガ行列ヲ
 客心驚

嫦娥 月ノ異名
 金蟾 月
 銀蟾 月
 蟾蜍 月ノ異名
故事
 清光 照席 月光
 明輝 月ノカマヤキ
 清輝 同
 光輝 同
 團圓 月ノ丸イ
 沈沈 静ニ沈ミ
ユク意
 亭亭 高キカタ
 清涼 忽見
 入レ戸 月色、
、
 在レ手 掬レ水月
 靜影 水ニ映ジ
タ月カゲ
 吐月 山ノ端
 照席 月光
 海上 今夕
 倚檻 望久
 望久 ノゾムコトヒサシ
 點翳 月ニ少シ
ノクモリ
 地白 月光テラ
 獨步 三五 十五夜ノ
 忽見 何厭 ハン
 殘夜 夜半スギ
 江上 捲レ簾
 人影 月下、
、
 秋半 月明
 今夜 舉レ杯
 今夕 十分
 衰落 故事後出
 雲盡 一年
 光滿 夜分 夜半
 佳興 夜分 夜半
 三五 十五夜ノ
 何厭 奈何
 入レ簾 月光、
、
 捲レ簾 素月明 白キ月ガ明
 不眠 皎月盈 白色ノ滿月
 月明 轉ニ二更 月ガ十時ス
ギニナツタ
 舉レ杯 暗又明 雲ノタメニ
 十分 映レ水明
 一年 四海清 ドコモキヨ
 夜分 月未明
 夜半 月正明
 夜半 十倍清 月色
 管絃 碾ニ太清 月ガメグリ
メグリ上ル事
 夜半 萬里明 月色
 奈何 逐月行

說。只夕用心ノ善キ話ト云フノミノ事デアル。

【作例】

觀月 (集本書中之句)

天 嵐

中庭疑有雪。皎月出雲頭。萬里天如洗。倚欄百尺樓。

恆遠精齋

石山賞月

水面雲晴月色流。紫姬閣畔滿天秋。多情最是溶溶影。曾照佳人獨夜愁。

同

湖上雜詩 琵琶湖

村家斷續枕川流。捲盡湖雲一雨收。紅葉林前斜照處。幾人洒布立沙頭。

梁川星巖

京寓聞雁

萬瓦霜寒殘月明。相呼相喚過高城。好教下十丈塵中客。夢落江湖聞鷺聲。

藤井竹外

雁

一聲聲落客愁邊。每望尺書天末傳。今日故園歸臥穩。卻聞征雁憶前年。

中秋賞月。是夕陰晴不定。

梁川星巖

滿簾風露桂花秋。坐到鐘殘漏盡頭。撥得雲帷一旋復。閨中嫦娥畢竟見人羞。

山寺賞月

叱石道人

門頭殊覺月華鮮。初夜鐘聲報入禪。山煙峽霧看低盡。髣髴人間兜率天。(拗體)

中秋望月

唐王仲初

中庭地白樹栖鴉。零露無聲濕桂花。今夜月明人盡望。不知秋思在誰家。

客舍聞蟲

村上佛山

小蟲知節亦何奇。催促令人早上機。遙想山妻猶未寢。青燈影裏織寒衣。

支、微、通韻。

塞上聞吹笛

唐高達夫

雪淨胡天牧馬還。月明羌笛戍樓間。借問梅花何處落。風吹一夜滿關山。(拗體)

笛曲、有落梅花。

夜上ニ受降城ニ聞レ笛

唐李君虞

同樂峰前沙似_レ雪。受降城外月如_レ霜。不知何處吹_ニ蘆管_一。一夜征人盡望_レ鄉。

客中作

三浦梅園

霜落瀟湘樹影稀。鄉書空見雁南飛。移_レ舟夜泊啼猿岸。不耐秋風送_ニ搗衣_一。

中秋無月有感 悼妻

釋雲華

桂林秋雨望茫茫。夜坐西風暗送_レ香。不_ニ獨_一中天無_ニ好月_一。梧桐白露冷_ニ空房_一。

遊_ニ黑老祠_一

廣灝旭莊

獵獵西風水上過。蓼花紅老委_ニ滄波_一。一林黃葉末_ニ全落_一。只覺秋聲此處多。

秋江釣月

秋月橘門

漁笛吹殘月欲_レ斜。一篷高臥穩_ニ於家_一。夢魂不下向_ニ人間_一。落上三十六灣蘆荻花。

聞雁

唐韋蘇州

故園渺何處。歸思方悠哉。淮南秋雨夜。高齋聞_ニ雁來_一。(拗體)高齋、郡之官宅。

晚望

唐白樂天

江城寒角動。沙洲夕鳥還。獨在_ニ高亭上_一。西南望_ニ遠山_一。(拗體)寒角、以_ニ獸角_一所_レ作笛。

軒窓

宋蘇東坡

東鄰多_ニ白楊_一。夜作_ニ雨聲_一急。牕下獨無_レ眠。秋蟲見_レ燈入。

(標題)【三】重陽。登高。山行。秋雨。菊花。天長節。村舍雜詠。觀_ニ友人菊園_一。

秋雨訪_レ友

空山 秋ノ山

● 嶺 高クカサ

○ 葉

● 雨 如_レ麻

深山

● 嶺 ナツタ山

○ 葉

● 雨 如_レ麻

寒山 秋ノ山

● 嶺 ミドリノ

○ 葉

● 雨 如_レ麻

層巒 丹崖

● 嶺 ミドリノ

○ 葉

● 雨 如_レ麻

巖巖 嶂

● 嶺 ミドリノ

○ 葉

● 雨 如_レ麻

第六章本 文(秋)

飛泉	清高	籬根	松明	雲根	憑危	奔雲	憑高	懸崖	岩松	穿松	○ ○
				石、 ヲナス	ニアナイトコロ ニヨリカカル			ガケ ガケシキ		松林ヲ通 リヌク	● ●
俯瞰	俯視	亂石	試脚	曲折	問路	入谷	易晚	峽路	訪古	踏破	● ●
ヲ見 下ス	上カ 下ラ		アシ コロム				日、 、			ハス フミ ニユク	
陶令	遺世	逢節	盈把	殘菊	籬菊	秋菊	家住	雲影	飛瀑	天豁	○ ●
陶淵明ノ コト	ヲヲス ル	住、 ニアフ	菊ノ 花一 杯		カキ ネノ 下ノ キク		イハ ハツ ス			ホガ ラカ	● ●
靜聽	濕雲	雨來	送寒	不眠	露滋	命觴	散金	晚風	數枝	冒霜	● ○
ハ 平	シ クモ	シ マツ				サ カ ツ キ ヲ	小 菊 ノ				○ ○
智慧光	橘柚鄉	意氣揚	到底香	白間	勁傲	滿檻	獨有	露瀼	度羊腸	露瀼	● ○ ○
	ノ イノ サ ト			ハ ハ ハ	ハ ハ ハ	ハ ハ ハ	ハ ハ ハ	ツ ユ ガ 多 イ	ノ ル ヲ	ツ ユ ガ 多 イ	

溪橋	題詩	奔流	黃花	東籬	○ ○	金葩	芬芳	幽香	殘香	飄零	簫疎
				菊ノ アル ト	コ ロノ カ キ	黄 金 ノ ハ ナ	カ ウ バ シ			木 葉 ノ オ ト	サ ビ シ イ
路險	著履	展齒	拾果	鹿迹	● ●	雜樹	老去	節物	爽氣	十里	月暗
ゲキ ツク	下 駄 ヲ ハ	下 駄 ノ ハ		シ カ ノ ト ヲ							
霜後	佳色	朝露	高興	風雨	○ ●	千朵	庭砌	無數	瀟洒	偏愛	寒雨
		モ シ ロ サ	ケ ダ カ キ オ		千 ノ エ グ	千 ノ エ グ	セ イ ニ ハ		サ ツ バ リ		
寂寥	夜窗	滴階	葉聲	敗荷	● ○	濺衣	對牀	酒醒	打窗	竹窗	阻程
		ガ ハ ダ レ		ハ ス ノ ハ	雨 ノ ナ ド	雨 ノ ナ ド			雨 ヤ 木 葉 ノ ナ ド	ノ キ ヲ ラ	ノ ク ノ ラ
沍露芳	野趣	雨送	俗慮忘	蝶似	月照	一日糧	一夜涼	○ ●	○ ●	黃葉秋	空斷腸
ハ ハ ハ	ハ ハ ハ	ハ ハ ハ		ハ ハ ハ						ハ ハ ハ	ハ ハ ハ
花 ガ	ハ ハ ハ									ハ ハ ハ	ハ ハ ハ

アル。

（陶家。送酒）晉ノ陶淵明ガ、九月九日ニ東籬ノ下ニアル菊花ヲ摘ンデ手ニ盈テ、借テ酒ナキヲ如何セント思ヒタル處ニ、白衣ヲ著タル人ガ、酒ヲ携ヘテ訪問シテ來タ。見レバ知友ノ王弘デアアル。因ツテ大ニ喜ンデ共ニ酌ミ、此ノ佳節ヲ祝ツタトノ故事。

【作例】

詠ニ 菊、花一（集ニ本書中之句）

天 胤

陶菊東籬下。重重白間黃。不妨鳴斷雁。佳色滿庭香。

重 陽 賴 山 陽

山妻買菊對牀斜。知是重陽到我家。一病因循猶不死。今年又及看黃花。

看、平仄兩韻之字。

九月九日憶山東兄弟一

唐 王 維 時年十七

獨在異鄉爲異客。每逢佳節倍思親。遙知兄弟登高處。遍插茱萸少一人。

九 日 唐 崔 國 輔

江邊楓落菊花黃。少長登高一望鄉。九日陶家雖載酒。三年楚客已霑裳。

山 行 唐 杜 牧

遠上寒山石逕斜。白雲生處有人家。停車坐愛楓林晚。霜葉紅於二月花。

村 舍 雜 吟 原五首 梁 川 星 巖

連朝霜氣得牢晴。閒水尋山取次行。野菊鑄金楓曝錦。人家籬落太分明。

秋 雨 雜 吟 村 上 佛 山

前山後嶺雨紛紛。釀得秋寒一味新。苦竹幽蘭誰不瘦。就中尤瘦是詩人。

文、眞、通韻。

觀ニ 菊、花一 吐 石 道 人

大葉長莖各自誇。黃金白壁競華奢。富貴卻存秋圃裏。如今誰說牡丹花。（拗體）

菊

秋容淡淡^{トシテフ}。傍^ニ荒坡^ニ。薄暮無^シ人載^{セテ}酒過^ル。蕭索一叢真活計。淵明籬下不^レ須^ヒ多^ク。

十日菊

唐 鄭 谷

節去蜂愁蝶不知^ラ。曉庭還繞折殘花。自緣^ニ今日人心別^ニ。未^シ必^シ秋香一夜衰^ハ。

菊

花

唐 白 樂 天

一夜新霜著^レ瓦輕。芭蕉新折敗荷傾。耐^ル寒唯有^ニ東籬菊^ニ。金粟花開曉更清。

九日書感

三 浦 梅 園

慘淡浮雲暗結^レ愁。淒涼落日尙含^レ樓。風光不^ニ是尋常暮^ニ。露冷東籬遺愛秋。

題

菊

釋 雲 華

黃菊秋容隱^ニ土家。風吹雨打任^ニ橫斜^ニ。嗤他世俗誇^ル肥大^ニ。枉作^ニ青油幕底花^ニ。

詠

菊

角 田 九 華

秋深庭冷漸將^レ蕪。獨有^ニ菊花肥且腴^ニ。不^レ似柴桑舊時態。紛紛悉著錦袍濡。

樂桑居士、字淵明、姓陶。

九 日

元 田 竹 溪

秋山石逕白雲斜。携^テ酒登臨遙思^フ家。日晚醉場人散盡。蕭蕭寒雨灑^ニ黃花^ニ。

甲 山 路 上

菅 茶 山

迎^テ人石相揖。驅^レ馬雲將^ニ碾^ト。樵者指^ニ前程^ヲ。路^ハ橫歸鳥背。

登^ニ樂 遊 原^ニ

唐 李 商 隱

向^テ晚意不^レ適。驅^レ車登^ニ古原^ニ。夕陽無^ク限好^ク。只是近^ニ黃昏^ニ。

夜 雨

唐 白 樂 天

早蛩啼復歇。殘燈滅又明。隔^テ窗知^ニ夜雨^ヲ。芭蕉先有^レ聲。(拗體)

雨中過^ニ玉遮山^ニ

明 高 青 邱

尋^テ鐘入^ニ蒼茫^ニ。一澗復^ニ一嶠。落葉去^ニ方深^シ。山扉雨中掩。

懷 友

平 野 五 岳

別後只如^レ夢^ノ。逢時未^レ竟^レ談^ヲ。酒醒聽^ニ雁語^ヲ。秋雨似^ニ淮南^ノ。聽、平仄兩韻之字。

雜題 原八首

長三洲

籬菊亂^ニ秋風^ニ。家僮掃^レ葉畢^ス。閉門人不^レ來^ス。一犬眠^ニ涼日^ニ。
人家遠樹間。一抹上^ニ煙縷^ニ。秋色渡^リ江來^リ。孤舟橫^ニ暮雨^ニ。

(標題)【四】秋晚。秋盡。紅葉。秋晚即事。暮秋夜坐。秋江晚眺。觀楓。停車。

泛溪

○○

○○

●●

○○

●●

○○【東】

三秋

秋七八九
ノ三月

深秋

橘柚

橘ヲユ
ニダチバナヤ
ユズナド

雲歛

オサマル雲ガナク
ナツタ

與誰同

ダレト同ジ
ク遊バウカ
本年ハ豊年

凄風

モノスゴキ
サムイカゼ

悲風

浙瀝

風ノ音
ナ風ノ音

殘菊

チンキョ
キヌタノ
コト

說二年豐

ト

煙霏

秋ノソラ
モヨウ

烟凝

秋塞空ノ
ケムリ

葉下

ハノシタ

砧杵

チンキョ
キヌタノ
コト

散晴空

黄葉、、、

疎砧

マバラナキ
ヌタノオト

初寒

滿逕

落葉、、

搖落

葉ガウゴイ
テオツル

舞秋紅

西風、、、

悲秋

ウレライク
秋ノ悲レ

懷愁

キ、、

掩鏡

カガミヲ
ヒカブス

黃落

黄葉ガオ
ツル

滴梧桐

秋ノ露ガ
、、、

清霜

木葉ガ枝カ
ヲオツル

愁容

秋ノカナシ
キモヤウシ

往事

過雁

廣寒宮

月夜ノ景色

辭柯

光陰ノ早
イコト

石出

紅葉

秋ノ木葉

九秋

秋三月ノ
九十日

葉聲中

ソノ中ヲユ
キキスル

流年

夜具ガサ
ムイ

枕冷

夜サムイ
コト

黃葉

同前

暮秋

夕陽中

アマリ景色
ガヨイカラ

燈殘

明リガキ
エカカル

柿葉

ガ稀

霜重

オモク

晚秋

逐西風

西風ト共ニ
トブコト

蓬頭

頭髮ガ半
白トナル

橘綠

ダチバナ
ノミドリ

秋葉

プヨシ

授衣

冬衣ヲア
タエル

任西東

西行東行自
由ニ任ス

寒鴉

ハスノハニ
シモガカル

露葦

ツユニダ
レダヨシ

風勁

ハ、ハ、菊ヲ

築場

秋收米ノ
準備

認歸童

ミドム

霜荷

ハスノハニ
シモガカル

亂葉

ブ木葉
レト

霜倒

ハ、ハ、菊ヲ

傲霜

菊花ガ
ハ、ハ、

畫圖中

ミドム

寒林

ハスノハニ
シモガカル

歲稔

豊年

歸興

カヘリタ
イ心

搗衣

コト

路如弓

ミドム

蘆花

アシノハ
ナ

故葉

モトノカ
レハ

成醉

サケニエ
フコト

早寒

月懸弓

三日月ノ
形容

驚寒

カンナド
ロク

暮色

夕方ノ
ケシキ

惆悵

ナゲキウ
ラム

草枯

梵王宮

寺ヲ云フ

枯條

カレ枝

斷柳

縁葉ノナク
ナツタ柳

衣單

ヒト

刈禾

イネツカ
リトル

比年豐

毎年豊年

○ ○ ○	風 凄 <small>スサシク</small>	酒 力 <small>ハツダツ</small>	○ ○ ○	愁 裏 <small>シユク</small>	○ ○ ○	晚 禾 <small>オクテ</small>	○ ○ ○	淡 雲 籠 <small>コムウ</small>
○ ○ ○	衣 衾 <small>キモノ</small>	髮 脫 <small>カミゲガ</small>	○ ○ ○	荷 盡 <small>ツク</small>	○ ○ ○	肅 霜 <small>シユク</small>	○ ○ ○	月 玲 瓏 <small>クキレイ</small>
○ ○ ○	落 雁 <small>オノスゴ</small>	霜 露 <small>シユク</small>	○ ○ ○	霜 果 <small>クダモノ</small>	○ ○ ○	曉 霜 <small>オハサ</small>	○ ○ ○	兩 三 鴻 <small>ガン</small>
○ ○ ○	庭 燕 <small>ニハガア</small>	墮 栗 <small>クリ</small>	○ ○ ○	柑 熟 <small>ミカ</small>	○ ○ ○	暮 山 <small>アラス</small>	○ ○ ○	錦 成 叢 <small>リ</small>
○ ○ ○	幽 叢 <small>オク</small>	葉 盡 <small>キ</small>	○ ○ ○	霜 後 <small>ドウ</small>	○ ○ ○	白 頭 <small>ムル</small>	○ ○ ○	白 雲 通 <small>根</small>
○ ○ ○	昏 煙 <small>ク</small>	鴨 脚 <small>アツキ</small>	○ ○ ○	寒 色 <small>ニホ</small>	○ ○ ○	病 來 <small>ムル</small>	○ ○ ○	斷 根 蓬 <small>ア</small>
○ ○ ○	駿 駭 <small>イコト</small>	落 葉 <small>キ</small>	○ ○ ○	香 粳 <small>ウル</small>	○ ○ ○	橙 黃 <small>ノ</small>	○ ○ ○	水 淅 淅 <small>サ</small>
○ ○ ○	寒 雲 <small>稲ノ見立</small>	煖 酒 <small>ハレ</small>	○ ○ ○	紅 稻 <small>赤ク</small>	○ ○ ○	亂 鴉 <small>トビ</small>	○ ○ ○	感 不 窮 <small>イ</small>
○ ○ ○	黃 雲 <small>石 逕</small>	○ ○ ○	○ ○ ○	寒 事 <small>冬ノ</small>	○ ○ ○	荻 花 <small>花</small>	○ ○ ○	賞 晚 楓 <small>ニ</small>

○ ○ ○	悲 涼 <small>ナカバ</small>	半 染 <small>ナツ</small>	○ ○ ○	何 計 <small>ゾラン</small>	○ ○ ○	露 凝 <small>コム</small>	○ ○ ○	鼓 角 風 <small>音</small>
○ ○ ○	昏 鴉 <small>ノ</small>	碎 錦 <small>ク</small>	○ ○ ○	凄 緊 <small>ノ</small>	○ ○ ○	疾 風 <small>ト</small>	○ ○ ○	午 夜 風 <small>夜</small>
○ ○ ○	黃 柑 <small>タ</small>	錦 綉 <small>シウ</small>	○ ○ ○	丹 葉 <small>ノ</small>	○ ○ ○	乍 寒 <small>チ</small>	○ ○ ○	一 笛 風 <small>フ</small>
○ ○ ○	紅 柑 <small>同前</small>	楚 岸 <small>楓ノ</small>	○ ○ ○	楓 樹 <small>名所</small>	○ ○ ○	晚 花 <small>菊</small>	○ ○ ○	野 火 烘 <small>明</small>
○ ○ ○	霜 林 <small>紅</small>	帶 雨 <small>楓</small>	○ ○ ○	楓 葉 <small>ノ</small>	○ ○ ○	嫩 蔬 <small>ワ</small>	○ ○ ○	樹 樹 紅 <small>ガ</small>
○ ○ ○	孤 林 <small>紅</small>	晚 樹 <small>キ</small>	○ ○ ○	霜 葉 <small>赤ク</small>	○ ○ ○	苦 吟 <small>ワ</small>	○ ○ ○	楚 岸 楓 <small>ガ</small>
○ ○ ○	寒 遲 <small>照</small>	照 水 <small>水</small>	○ ○ ○	霜 樹 <small>赤ク</small>	○ ○ ○	慘 淒 <small>イ</small>	○ ○ ○	半 染 紅 <small>霜</small>
○ ○ ○	新 蕩 <small>ア</small>	臘 脂 <small>ニ</small>	○ ○ ○	殘 葉 <small>木</small>	○ ○ ○	曉 霜 <small>冬</small>	○ ○ ○	細 雨 中 <small>ハ</small>
○ ○ ○	疎 蕩 <small>ア</small>	蜀 錦 <small>ト</small>	○ ○ ○	霜 染 <small>木</small>	○ ○ ○	換 衣 <small>カ</small>	○ ○ ○	唧 唧 蟲 <small>鳴</small>
○ ○ ○	霜 庭 <small>掃</small>	掃 葉 <small>風</small>	○ ○ ○	霜 醉 <small>黃</small>	○ ○ ○	燒 空 <small>紅</small>	○ ○ ○	樂 未 終 <small>フ</small>
○ ○ ○	田 收 <small>入</small>	點 岸 <small>ニ</small>	○ ○ ○	微 雨 <small>一</small>	○ ○ ○	夕 陽 <small>一</small>	○ ○ ○	興 豈 窮 <small>ハ</small>
○ ○ ○	登 場 <small>仕</small>	散 亂 <small>落</small>	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	菊 與 楓 <small>ハ</small>

○ ○ 丹楓 澗水 疎雨 滿庭 五穀豐
 千林 疊嶂 秋色 畫屏 百慮空
 林間 拉友 霜後 翠微 化育功
 停車 坐石 流水 暮山 句未工
 寒山 古寺 蕭寺 暮煙 滿眼紅
 ○ ○ 空山 題詩 曲岸 暮雲 月似弓
 楓林 添愁 映日 石頭 鶴髮翁
 風飄 愁人 絕澗 彩虹 碧水通
 紅霞 飄零 掃石 祇林 晚日烘
 吳江 隨流 樹杪 暮鐘 飄葉紅

西風 丹青 寂靜 鹿羣 秋葉紅
 經霜 丹崖 落葉 對雲 霜葉風
 秋山 相携 欲暮 半丹 心更雄
 殘陽 行廚 一望 勝春 黃石公
 殘楓 溪橋 落木 詩景 零雨濛
 危橋 潺湲 且喜 如畫 橋似虹
 穿林 崎嶇 野老 山寺 又楓林
 蒼苔 莓苔 染盡 清淺 白雲深
 尋幽 禪房 料得 人跡 照鄉心
 迴廊 晴嵐 水碧 贏得 入雲尋
 鐘聲 無僧 老卻 空院
 參禪 霜刀 記取 空院

○ ○ ●

秋霜染 シモガ木葉

砧杵響 チンキョノヒキキ
トキヌタノオ

高岸錦 楓ノ見立

風露冷

微煙起

敲敗葉 ダクノ 西風、

紅葉老 モミヂモス

輝錦樹 ニシヤノカレヤカスノキ
楓

霜偏重 ヒトヘニオモシシモガオオ

新雨過 ヒトヘニイラナケザム

人易感 ダレカ吾ト

秋欲暮 ヘラフキツクス

不能畫 ユキケシキ

梧桐雨

同此意 ハハハ、ハハ、ハハ、ハハ、

吹葉盡 ハラフキツクス

築場圃 稻ノシアゲ

人寂寂 人モサビシ

山骨瘦 葉ガオチダ

秋寂寂 秋モサビシ

十年業 サイラクニマカヌ木葉ノクダケオヒトトモニツク

光景換 カハル

秋已老

秋雨裏

任摧落 ツルニマカス

俱水逝 人モ月モ

千萬樹 ヒルガヘル

容俗跡 俗人ヲモイ

飄落葉 風ニヒルガ

灑助興 オモシロサヲダ

〔楚岸〕 吳江 南部支那ノ楊子江沿岸地方ノ大海ニ近イ方ガ吳デ、是ヨリ西南一帯ヲ楚ノ地トスル。其ノ地方ノ川岸ナドニ紅葉ガ多クアルト見エル。只ダ楓ノ名所トシテアルノミデア。併シ我が國ノ立田ノ川ノ錦ナリケリト詠ジタ立田モ、今ハ楓ガアルヤ否ヤ。

〔砧杵〕

砧ハキス。タトテ、衣打デア。併シ今日デハ餘リ用ヒナイヤウデア。支那デハ餘程盛ニアツタト見エテ、李白ノ詩ニモ、長安一片ノ月。萬戸衣ヲ擣ツノ聲トアル。朝鮮デモ中々盛ニ洗濯ヲ爲ス。而シテ其レヲ糊附ニシテ日ニ乾カシ、月夜庭前ニ於テ、短キ手杵ニテ盤上ニ連打ス。之ヲ砧ト云フ。併シ都會地ニテハ皆張板ニ張ツテ使用スル故、全ク砧杵ヲ要シナイ。從ツテ現今ノ都會人ニハ、多分砧杵ヲ知ラナイ者が多カラウ。

〔作例〕

晩

秋 (集本書中之句)

天胤

霜風敲敗葉。疊嶂錦成叢。煖酒飛煙外。題詩細雨中。

越溪觀楓 江州水源寺

恆遠精齋

怪石擁峰勢。欲盡秋神類。峰峰楓葉錦成堆。無端添我煙霞疾。極樂橋頭兩度來。

秋夕

梁川星巖

雨洗殘炎幾一空。蒲簾碧皺暮窗風。不知新月來相照。眠在桐梧疎影中。

暮秋夜坐

梁川香蘭

明蟾高挂古松枝。影落寒波一夜轉奇。逝水不留人易老。莫辭霜露賞多時。

秋江晚眺

村上佛山

江天歸雁雜歸鴉。鴉宿汀林雁宿沙。別有漁船炊晚飯。青煙一縷出蘆花。

過海晏寺看楓

梁川星巖

只道霜楓紅未回。不知風力暗相催。錦標高出白雲表。欲使遊人望得來。

永源寺觀楓

藤井竹外

吹老秋風古澗隈。高僧遺跡尚樓臺。林間何禁燒紅葉。溫酒遊人卻不來。

天王寺看紅葉戲作

梁川星巖

清曉風刀刈祇林。紛紛如雨又如禽。紅錦地衣敷得遍。不教長者耀黃金。(勸體)

昔須達長者、性慈悲ニ富ミ、深ク釋迦牟尼佛ニ歸依シ、爲ニ黃金ヲ地ニ敷イテ佛ヲ請ヒタルコトアリト云フ。

秋晚

長三洲

霜寒未老菊花心。籬柵殘陽蟋蟀吟。松蕈如拳柿如玉。一年風味在秋林。

停車

菅茶山

停車視楓樹。古寺秋山背。丹葉照樓臺。鐘鳴始知夕。

泛溪

同

欲看霜後山。棹上溪流夕。水縮轉清澄。初知底是全石。

落葉

釋雲華

莫道春風好。秋林亦可憐。風來紅滿地。露結月團圓。

寄題櫻老泉

廣瀨淡窓

酒渴復思茶。秋宵移步履。銅瓶掛水回。一半是楓葉。

寒山讀書圖

劉君鳳

絕境讀仙書。寒雲山幾疊。蹇然若有入。歸鹿踏秋葉。

山家夜起

殘星低_ニ屋角_一。暗水入_ニ庭陰_一。露氣濃_ニ於雨_一。無_レ聲落葉深_シ。

夜坐

空庭如_ニ雨過_一。開_レ窓月色白_シ。樹影自蕭疎。落葉下_ニ簷額_一。

題畫

一江寒雨過。煙色集_ニ漁蓑_一。落葉紅浮_レ水。秋痕上_レ網多_シ。

廣瀨旭莊

秋月橘門

長三洲

第四節 冬の部

(標題)【一】初冬。冬曉。冬夜會友。雪景。冬夜卽事。初冬山居。田家雪。喜

雪。江天暮雪。夜雪。初冬雜詠。雪後卽事。冬日田家。

○霜辰_{トテ初冬} 十月 寒孟_{孟ハ始メ} 小春_{十月コハ} 夜方深_{マサニシ}
○ 吉月 十月 寒孟_{初冬} 小春_{十月コハ} 夜方深_{マサニシ}
○ 寒孟_{孟ハ始メ} 小春_{十月コハ} 夜方深_{マサニシ}
○ 寒孟_{初冬} 小春_{十月コハ} 夜方深_{マサニシ}

凝陰_{ヨキツイン} 冬 建亥_{建ニ} 十一月 玄律_{初冬} 孟冬_{初冬} 峭寒_{シウカン} 侵_{オカシ} 入_{サガオ}

純陰 十月 地凍_{地コホシ} 蟲閉_{トム} ニコモル 始氷_{タチバナノ} 玉爲_{タマヲ} 林_{ハヤシ} 雪ノ見立

初寒 閉_イ 塾_ヂ ムシガコ 爐火_{イネガ出} 橘陽_{タチバナノ} 月斜_{ツキノ} 臨_ミ

新霜 講_{コウ} 武_ブ 嘗稻_{イネガ出} 六陰_{十月ハ陰} 夜鐘_{ヨノカネ} 沈_{シヅム} 音_ネ ヤンダ

驚寒 穫_{イネヲ} 稻_カ 潜孕_{カサネ} ヲカニハラム 破寒_イ 夜鐘_{ヨノカネ} 沈_{シヅム} 音_ネ ヤンダ

疎梅_{枝ノマバ} 雪映_{ユキノ} ニウツル 迎暖_{ウケヌ} 探梅_{ウツメ} 古人_{コノヒト} 人心_{ココロ}

賓鴻_{遠方カラ} 碧瓦_{ウツロ} ハチノ木 未堅_{ヒツキ} 五絃_{イタナ} 琴_{カミナリ}

天時 短日_{冬ノ日ハミ} 和暖_{ワダシ} 雪花_{ユキノ見立} 不成_{ナレ} 音_ネ 雪_{ユキ} フレドモ

愁雲 愛日_{冬ノ日ハ} 楓醉_{カキガ赤ク} 入_{イレ} 牀_ト スナドガ

金柑_{ミカニル} 已報_{冬ノ報} 乘_{オクニ} 屋_ヤ クコト 晝_{ヒル} 茅_カ ヤラカレ

池氷 小雨_{オホシ} 晴雪_{ハルユキ} 暖爐_{ノボロ} 衆星_{オホボシ} 森_ノ 月_{ツキ} 色_{イロ} ノコ

蒼前 日暖_{ヒノ} 搖落_{ツルコト} 傲霜_{ヒノ} 花_{ハナ} 帶_{オビ} 殘_ノ 砧_ノ ノ音_ネ ノキヌダ

戀_{コイ} 寒_{サム} 衾_{カミ} シイ

宵綯 シヨウウトル ヨルハナ ハヲナフ 拂岫 シウウハラク 雲ガ山穴 ヲ出ル
 池平 チヘイ 水ガハツ テ、ハ、 結凍 クワツ 氷、
 園林 エンリン 氷落 ヒツ 秋ハ水ガ ヘルカラ
 殘楓 ザンフウ 石出 セツ 水ガヘル カラ、ハ、
 荷枯 カホ ハスノハ ガカルル 蟋蟀 セツ スキリギリ
 山川 サンチン 液雨 エキ 小春ノ雨 コハル
 愁容 シュウヨウ 北斗 ホウト 星ノ名 ホニ
 初成 シュウセイ 木落 モク 來復 ライフ 十一月ツ二陽 イチジツニニヨウ
 今朝 キョウ 寂莫 ジツ 春信 シュン 花ダヨリ ハナ
 紅爐 コウロ 悴色 クワイ 輕暖 ケイ 少シノア ウチ
 芳樟 ホウ 酒ダル ク 草木 ソウ 芳信 ホウ 梅ノ花ダ ウメ
 早梅 ソウ 梅 ウメ
 入ニ深林 ニシニシヨウ
 踏雪尋 トウ 早梅 ソウ
 冷水衾 レイ 早梅 ソウ
 綠水潯 リョク 梅 ウメ
 滿意斟 マン 十分ニ酒 ニシウ
 夜已深 ヤ
 葉底禽 エ
 值萬金 チ
 惜三寸陰 シヨク
 白雪 シロ 雪ノアル ユキ

江梅 カウ 川バタノ ウメ 氣蕭 キ 氣分ガシ タク
 寒風 カンフウ 已報 イ 寒夜 カン 寒風 ヤ
 蕭蕭 シュウシュウ 小雨 コウ 霜月 シュウ 北風 ホク
 風清 フウ 昨夜 セ 聽雪 ドウ 打窓 ウ
 蕭條 シュウ 獸炭 ジュ 梅月 ウ 擁爐 ユウ
 橙黃 テイ 向暖 キョウ 煨酒 ウイ 半醒 ハン
 糶糊 テウ 嶺雪 リョウ 留客 リウ 破窓 ハ
 疎鐘 シュ 歷歷 リ 膠漆 カウ 遠鐘 エン
 梅花 メイ 雪霽 セツ 松骨 シュウ 破柑 ハ
 蒼蒼 ソウ 冷艶 レイ 雞黍 ケイ 醉吟 スイ
 疎林 シュ ナハヤシ ラ 綠橘 キョク 佳客 ケイ 夜深 ヤ
 殘砧 ザン キヌタ キ 木葉 モク 環坐 カン 夜闌 ヤ
 霜滿林 シュウ
 游子吟 ユウ
 夕日沈 セキ
 只自吟 シ
 漸蕭條 シヨウ
 雪封條 セツ
 自分ヒトリ ジ
 ユウヒガシ ウ
 自分ヒトリ ジ
 サビシイ サ
 アンドンニ ア
 サビシ サ
 ユキ ユ
 ユキ ユ

○ ○ 樓寒 サムキヤ 曙色 アカツキ 前席 セキラス 未央 イマダナカバナラズ 雪珠跳 セツシユオドル 一茶寮 イチサウ 篆香消 センコウキエタ 脫塵囂 テンジンセウ 酒旗搖 シュウジユウ 緩瓊瑤 クワンジュウ 自昭昭 ジショウ 麥抽苗 マクシュウ 共相邀 キョウソウ 酒旗飄 シュウジユウ 暗香飄 アンコウヒョウ

○ ○ 寒衾 サムキヤ 落月 オツル月 殘火 ノコリ火 一陽 十一月カラ 不眠 シユメ 酒缸 ルツボ 寐醒 ネムリサム 短攀 ダンパン 雅懷 ガクワイ 半醒 サンセイ 滿庭 マンテイ

○ ○ 寒雲 サムクモ 曉夢 アカツユメ 新味 シンミ 中夜 ヨナカ 一瓢 イチピョウ 短攀 ダンパン 雅懷 ガクワイ 半醒 サンセイ 滿庭 マンテイ

○ ○ 微陽 十一月ノ 賞雪 サツユキ 中夜 ヨナカ 一瓢 イチピョウ 寐醒 ネムリサム 短攀 ダンパン 雅懷 ガクワイ 半醒 サンセイ 滿庭 マンテイ

○ ○ 迎長 夜ノ長キ 曝背 サササス日ニアタタ 溫酒 サツヤク 一瓢 イチピョウ 寐醒 ネムリサム 短攀 ダンパン 雅懷 ガクワイ 半醒 サンセイ 滿庭 マンテイ

○ ○ 南枝 梅ノ 秃木 ハゲキ 茶事 チャジ 寐醒 ネムリサム 短攀 ダンパン 雅懷 ガクワイ 半醒 サンセイ 滿庭 マンテイ

○ ○ 衝寒 カンキョウ 短晷 タンクウ 芸閣 ゲイカク 寐醒 ネムリサム 短攀 ダンパン 雅懷 ガクワイ 半醒 サンセイ 滿庭 マンテイ

○ ○ 中宵 夜ナカ 待臘 マツ 芸閣 ゲイカク 寐醒 ネムリサム 短攀 ダンパン 雅懷 ガクワイ 半醒 サンセイ 滿庭 マンテイ

○ ○ 山光 山ノケシ 喜見 キケン 茶鼎 チャテイ 寐醒 ネムリサム 短攀 ダンパン 雅懷 ガクワイ 半醒 サンセイ 滿庭 マンテイ

○ ○ 寒宵 サムイバ 杳靄 ヨウアイ 清味 セイミ 寐醒 ネムリサム 短攀 ダンパン 雅懷 ガクワイ 半醒 サンセイ 滿庭 マンテイ

寒燈 冬ノトモ 忽覺 ダチマサム 佳茗 ヨキ茶 不知 シラナ 響嘹嘹 ヒヤキリヨウリヨウ 好逍遙 コウシヨウ 片片凋 ペンペンシユ 更寂寥 メイシヨウ 下九霄 ゲクウ 勝昨朝 シヨウ 遠市器 エンシキ 懶拾樵 マンシウ 月色饒 ゲツシク 獨坐謠 ドクサシユ

風林 風ノアタ 掃雪 ハキユキ 情味 セイミ 起來 キライ 更寂寥 メイシヨウ 下九霄 ゲクウ 勝昨朝 シヨウ 遠市器 エンシキ 懶拾樵 マンシウ 月色饒 ゲツシク 獨坐謠 ドクサシユ

三餘 冬ハ年ノ餘リ 相對 サマサマ 冒寒 オカシテ 更寂寥 メイシヨウ 下九霄 ゲクウ 勝昨朝 シヨウ 遠市器 エンシキ 懶拾樵 マンシウ 月色饒 ゲツシク 獨坐謠 ドクサシユ

敲氷 水ヲタタ 煮茗 ヌキ 孤月 コツキ 一庭 イチテイ 更寂寥 メイシヨウ 下九霄 ゲクウ 勝昨朝 シヨウ 遠市器 エンシキ 懶拾樵 マンシウ 月色饒 ゲツシク 獨坐謠 ドクサシユ

煎茶 チヤヲセ 熊席 クマシキ 何厭 ナシイハン 赤心 セキシン 更寂寥 メイシヨウ 下九霄 ゲクウ 勝昨朝 シヨウ 遠市器 エンシキ 懶拾樵 マンシウ 月色饒 ゲツシク 獨坐謠 ドクサシユ

窓前 サマシ 酒熟 サケジユク 相遇 サマシ 數家 スウカ 更寂寥 メイシヨウ 下九霄 ゲクウ 勝昨朝 シヨウ 遠市器 エンシキ 懶拾樵 マンシウ 月色饒 ゲツシク 獨坐謠 ドクサシユ

寒窓 サムイ 月白 ツキハク 誰識 タレカシラン 一枝 イチエ 更寂寥 メイシヨウ 下九霄 ゲクウ 勝昨朝 シヨウ 遠市器 エンシキ 懶拾樵 マンシウ 月色饒 ゲツシク 獨坐謠 ドクサシユ

霜威 シユウキ 釀雪 ヌラシユキ 疑是 ウタガハラクハコレ 汲泉 キツセン 更寂寥 メイシヨウ 下九霄 ゲクウ 勝昨朝 シヨウ 遠市器 エンシキ 懶拾樵 マンシウ 月色饒 ゲツシク 獨坐謠 ドクサシユ

霜清 シユウセイ 靜坐 セイザ 新酒 シンシュ 出門 シュツモン 更寂寥 メイシヨウ 下九霄 ゲクウ 勝昨朝 シヨウ 遠市器 エンシキ 懶拾樵 マンシウ 月色饒 ゲツシク 獨坐謠 ドクサシユ

更深 コウフカシ 夜オソヒ ヨオソヒ 秉燭 メイジュク 閑坐 カンザ 照窓 テウサウ 更寂寥 メイシヨウ 下九霄 ゲクウ 勝昨朝 シヨウ 遠市器 エンシキ 懶拾樵 マンシウ 月色饒 ゲツシク 獨坐謠 ドクサシユ

更闌 夜オソヒ

莫逆 トナキ親友

月明

杯盤 盃ヤサカ
ナ入レ

一夜 晨起

細看

論文

達曙 ヨンダ

杖藜 ツエヲツク

金蘭 仲ヨキ友

開顔 事ヲ云フ

破睡 デハハ

忘年

呼童 小鼎

活火 サカナン

連床 ラヌル

呼兒 楸柑 カブ

驟雨 水音

丹心

清談 キヨキ世バナ

細話 コマヤカニハナス

叩門 タタク

挑燈 ルクスル

話舊 フスル

盈樽 ニミツル

團欒 マルコト

半醉 リエフ

留連 スルコト

飛霜 シモノフ

雪後 ユキフリ

昨夜 阿ラシ

未易 描

懶折 腰

陋巷 顔回ノ貧

白板橋 霜ノアルハ

墜葉 飄

顏子 瓢 顔回ノ故事

薪炭 饒

【轉句】

高人 興

新霜 結

千林 瘦

蘆飛 雪

春將 動

因風 起

無塵 事

收書

殮蔬

凜凜

迢迢

風流

瑟瑟

吟窓

松風

石逕

盤蔬

湯聲

對酒

餘香

沈吟

寫得

寒風

風聲

醉倒

江樓

玲瓏

凜烈

輕明

氷花

梅影

聊乘

三千里

添酒

窓前

君須

田舍

寒山

鳴寒鳥

茶沸鼎

裏

君須

松與竹

霜影白シモガシロ 眠不レ得

驚ニ曉夢一

氷始△△結

初動處△△ 一陽△△、明月夜

高臥穩ケダカク 滿ニ平野一 雪ガ、、、

堅耐ケンレイニ冷氣ダフ松ヤ竹ガ冷 晚初合バンニハツメテガツス 雲ガガツシタ

寒起カンアハラコス 粟立ツコト 兩三點肌ガ鳥毛 梅花、、、

（投轄）前漢ノ陳遵酒ヲ好ム。大飲毎ニ賓客堂ニ滿ツ。門ヲ鎖シ、客ノ車轄ヲ取ツテ井中ニ投

ジ、急ニ去ルヲ得ザラシム。轄ハク、サビ。

（顔子瓢）論語ニ、子曰ク、一簞ノ食、一瓢ノ飲、陋巷ニ在リ。人ハ其憂ニ堪ヘズ。回ヤ其ノ

樂ヲ改メズ。賢ナル哉回ヤト。

【作例】

冬日田家（集ニ本書中之句）

天胤

一陽初動處。水落麥抽苗。窓前氷始結。牆角酒旗飄。

初冬作

宋蘇東坡

荷盡ホトニシ已無ニ擊セ雨蓋ケル。菊殘猶有ニ傲ル霜ニ。一年好景君須レ記。正是橙黃橘綠時。

冬日雜句原八首

梁川星巖

畏レ寒頭角縮ニ於コ蝸ニ。衰到ニ今年一衰更加ハル。曝シ背向ニ陽窓ニ下坐。霜津如ク雨滴ニ簷牙ニ。

冬日澱江舟中

藤井竹外

兩岸無ク煙旭日紅。寒光凜凜曉晴中。黃蘆戟立葉皆偃。知是霜威嚴ニ似ク風。

冬

曉

梁川香蘭

一杵鐘來ツテガク 噩夢驚ク。羣生誰得レ免ニ營營一。君看城樹月纔ニ仄一。便有ニ寒鴉ノ飢雀ノ鳴一。

仄、傾。

冬夜卽事

菅茶山

初寒夜氣颯颯サツトシテシウタリ 颯颯キ吹動簷楹カシテ 屋似タリ舟ニ。窓納ニ月光ニ庭洒レ雨ニ。亂雲奔過竹梢頭。

冬夜作

恒遠精齋

寒枕難シ眠誰與レ親マン。起開ニ窓戶一斗當レ寅ニ。一犬吠來羣犬吠。月明村巷更無レ人一。（拗體）

冬夜雨晴

燈火消時判雪晴。布衾潑水夜三更。紙牕一面生微白。恰似東方天欲明。

藤井竹外

雪中三絕句 錄一

梁川香蘭

北風半夜叩山扉。街櫺聲寒人語稀。睡起不知天已雪。下階花片撲衣飛。

櫺、同柵。擊柵聲。

田家雪

藤井竹外

雪片粗於花片粗。不論畦畝只平鋪。嫩葱一尺猶餘半。埋得麥芽全已無。

雪霽

叱石道人

沈沈夜雪夢何醒。折竹聲寒傳後庭。高樓拈筆侵晨立。只見池塘一點青。(拗體)

喜雪

清朱竹垞

雪氣低迷海氣昏。窮陰連日暗孤村。兒童起報夜來雪。九十九峰齊到門。

冬夜

釋雲華

梧碧瀟月影冷冷。蟋蟀聲稀靜草庭。欲就寒衾續殘夢。讀書枕畔一燈青。

遊養德院

元田竹溪

夜叩寒山古梵城。凍雲深鎖月無明。談清禪榻未歸去。閒聽長松落雪聲。

冬初宇治川晚眺

廣瀨旭莊

風吹枯葦不成聲。舟過時聞沙鷓鳴。楓頂猶留殘照在。一枝紅影水中明。

寒夜梅外書堂偶坐

長梅外

滿林霜氣正稜稜。吟筆呵來手欲凝。殘月未升梅信寂。一青寒透夜深燈。

冬曉

長三洲

紅搖窓紙襯朝霞。早起怯寒猶掩紗。簾外禽聲喜何事。山茶亂發一籬花。

初冬雜詠

菅茶山

荷實收林實。索綯補竹籬。病來減書課。時作賤場師。

雪景

同

積素將無地。凝青只有天。村家未埋盡。一縷上茶煙。

小 雪 林

梁 川 星 巖

羣動聲全息。孤燈影自沈。推窗寒刺刺。微白綴庭林。

雪 後 卽 事

廣 瀨 淡 窗

雲凍藥王山。雪封菅相廟。梅花壓短筵。誰在此中釣。

江 雪

唐 柳 宗 元

千山鳥飛絕。萬徑人蹤滅。孤舟蓑笠翁。獨釣寒江雪。(物體)

夜 雪

唐 白 樂 天

已訝衾枕冷。復見窗戶明。夜深知雪重。時間折竹聲。

寒 江 獨 釣 圖

劉 君 鳳

吹雪北風來。狂瀾倒還立。貪魚人未歸。出沒蘆間笠。

西 嶺 殘 雪

廣 瀨 旭 莊

春色到山家。梅香滿籬柵。西窓猶暮寒。殘雪數峰白。

青木錦村將發。風雪甚。口占留之

長 三 洲

行色莫匆匆。今朝寒忽劇。北風吹雪來。征馬半身白。

(標題) 苦寒。雪日訪友。歲晚書懷。寒夜卽事。除夜。雪中探梅。冬夜泊

舟。

○○○

天 寒

地 凍

寒 日

裂 肌 嚴 寒、

○ ○ ○ 魚

出 無 輿 程 出 世 ン

寒 風

盛 凍

呵 筆

北 風

憶 樵 漁 ン

隆 冬 盛 ナル 冬

地 裂

寒 水

六 花 雪 ノ コ ト

永 終 譽 ン

簾 寒

凜 冽

晴 雪

素 花 雪

利 名 疎 ン

頑 雲 瓦 凍

瓦 凍

梅 早

雪 華 雪

瀟 橋 驢 故 事 後 出

重 裘 臘 雪

臘 雪

樓 上

壓 枝 雪 ガ 枝 ヲ

惜 居 諾 日 月 ノ 速 ニ

煮茶	霏霏	玲瓏	寒光	寒風	飄飄	紛紛	續續	氷條	凝華	鷺毛	○
茶	雪ノト	玉ノ如ク	雪ノ如ク	雪ガ風ニ	雪ガ風ニ	雪ノミダレ	雪ノミダレ	ツツラ	雪	雪ノ見立	○
落雪	凍合	玉樹	一色	壓竹	雪片	散亂	碎玉	積素	積雪	白雪	●
		ツクコト	雪ノ白	雪ガ竹ヲ	雪ノ見立	ミダレル	雪ノ見立	雪ノ見立	雪ノ見立	雪ノ見立	●
殘歲	晨起	何處	詩思	青眼	寒翠	投轄	談笑	呵手	爐火	乘興	○
十二月ノ	朝早く	オモヒ	詩ヲ作ル	好意ヲ以テ	ドリ	ムルコト	客ヲ引キト	フキカクル	手ニイキヲ	オモシロサ	○
挿花	雪峰	地爐	到門	叩門	剡溪	擁爐	打窗	照窗	凍雲	凍泉	○
雪ノ見立	ユキアル	キロリ	ユキアル	○							
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
三畝蔬	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ハダ	セマキハダ										

隨風	和風	狂風	寒侵	同雲	飢鴉	登樓	茶煙	○	乘舟	欺梅	枝枝
飛雪、	雪、	雪、	雪、	雪、	ウエダ						
片片	飲酒	密雪	著樹	不夜	曉色	夜色	凍雀	○	寒衣	清寒	樹樹
今夜	將盡	殘臘	多事	人事	春意	知命	燈下	○	倚檻	訪戴	雪竹
	十二月ノ										
名不虛	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ハダ	ハダ	ハダ	ハダ	ハダ	ハダ	ハダ	ハダ	ハダ	ハダ	ハダ	ハダ

池氷 輕姿 雪ノ見立 起栗 立ツモ穴ノ 雪樹
 衝寒 貪看 寒空 凍硯 晒背 向火 栗烈 形容
 清談 世ハナシレ 堆鹽 話舊 興盡 筆凍 一宵 歡
 評詩 世ハナシレ 堆鹽 話舊 興盡 筆凍 一宵 歡
 開樽 衝風 朝看 犬吠 細聽
 前村 朝看 犬吠 細聽
 重重 カサナル 窮陰 十二月ノ 獨臥 短景 偶坐
 風號 窮冬 同 掃去 雪ヲ、 歲徂 臘盡 十二月ガ
 初寒 殘冬 同 掃去 雪ヲ、 歲徂 臘盡 十二月ガ
 寒雲 嚴風 掃逕 臘盡 十二月ガ
 瓊瑤 雪ノコト 寒威 威力

氷封 池ヲ氷ガ フウジダ 殘年 ナコリスク 酒興 モシロサ 白盡 メツクス
 飢禽 流年 早キ年 硯凍 短髮 色色ト心
 如篩 雪フルコト粉 將除 一年ガ 愛日 冬ノ日ハ 感慨 ノナゲキ
 相忘 互ニワス ママニノカントス 印雪 アトヲ 臘酒 十二月ニ
 深冬 終年 一年中 倒屣 ムカフルコト 破屋 ヤブレタ
 窮年 年末ノコ 歸心 郷里ニカヘ 俗事 ユキシ
 迎春 寒窗 四壁 往事 獨坐ス
 空囊 財布ガカ 窮途 キルコト 繼晷 ニツグコト 一醉
 安食 ヒシニヤス 焚膏 火ヲトモ 映雪 ラシテ讀ム 枕冷
 潛心 心ヲ讀書ニ 功名 冬ノ三月 閉戸 勉勵スル 耿耿 目明ニシテ
 工夫 三冬 冬ノ三月 鑿壁 ガチテ明リヲトル 計拙

都浪過スミテラウクワス 來解凍ワケケナク 春風、無限意オカリトウワトク

月無色スミナシ、雲連リテ

〔瀟橋驢〕漢ノ鄭廣詩ヲ善クス。或人ノ問ニ答ヘテ曰ク、詩思ハ瀟橋風雪中驢子ノ上ニアリト之レヨリ詩ヲ思フニ結好ナル場所ト云フコト。

〔倒屣〕後漢ノ蔡邕、王燦ガ我門ニ到ルヲ聞キ、屣ヲ倒ニシテ之ヲ迎フト云フ。屣ハ下駄。迎ヘルニ急ナル意。

〔鑿壁〕漢ノ匡衡、貧學、因ツテ壁ヲ穿チテ隣舍ノ光ヲ引キ入レテ書ヲ讀ミ、後遂ニ丞相ト爲レリ。

〔剡溪訪戴〕晉ノ王子猷、一夜月明ニ小舟ヲ剡溪ニ浮ベ戴逵ヲ訪フ。門ニ入ラスシテ返ル人ツノ故ヲ問フ。曰ク、興ニ乘ジテ來リ、興盡キテ返ル。何ゾ必シモ安道ヲ見シヤト云フ故事。

【作例】

歲晚書懷（集本書中之句）

天胤

他鄉猝歲フクソウ 歲コト 殫ニツク。積素玲瓏露アラハス 遠巒ト。白首三冬無キモ 暖氣ニ。樂ミ 天知ワッテ 命ヲ 不モテヒ 須ズル 歎フ。

苦 寒

（圓機活法品題中、摘首尾四句）

四野蒼茫トシテシ 黯シ 凍雲。裂キ 膚ヲ 墮レ 指透ル 衣巾。紅爐畫閣羊羔酒。應ニ 被ラル 豪家占ニ 得春エ。

文、眞、通韻。

休日訪人レ 不レ 遇

唐 韋 蘇 州

九日驅馳シテ 一日閉カシ。尋スレ 君不レ 遇ハ 又空還ル。怪來詩思清ニ 人骨。門對ニ 寒流ニ 雪滿ル 山。

寒 夜

宋 杜 小 山

寒夜客來 茶當ツテ 酒。竹爐湯沸 火初紅ナリ。尋常一樣窗前月。纔有ニ 梅花一 便不レ 同カラ。

歲 杪 卽 事

菅 茶 山

六十五歲歲將ニ 除カント。滿地冰霜夜凜如。自顧ミル 衰躬成ニ 底事ヲ。猶挑ホケテ 燈火ヲ 讀ム 周書ヲ。

歲 晚 書 事

梁 川 星 巖

貧來無シ 計度ニ 饑年ヲ。況屬ナスル 冰霜節氣偏ニ。剝キ 取ツテ 寒葱ヲ 作シ 湯ト 了オハリ。一家環坐煖ニ 丹田ヲ。

丙 辰 歲 晚

同

無作無爲其奈何。居然有髮老頭陀。唯持半偈足能事。不用七千餘卷多。

歲晚卽事

藤井竹外

積逋得償酒人家。已有讎聲巡巷譁。囊底青錢餘幾箇。猶堪一朶買梅花。

歲

晚 (大分以文會席題分韻)

叱石道人

穀熟種穰心自舒。街頭且喜上嘉蔬。也好傳杯兼酒興。不知歲晚到階除。

除夜作

唐高逵夫

旅館寒燈獨不眠。客心何事轉凄然。故鄉今夜思千里。霜鬢明朝又一年。

雪後送人之江南

秋山玉山

雪後關山送馬蹄。一休愁萬里凍雲低。縱然埋盡江南路。纔有梅花路不迷。

丁酉除夜

釋雲華

生年六十六回除。對短檠燈感有餘。寄語兒孫能讀否。傳家遺澤百函書。

除夜見梅花有感

平野五岳

暗香浮月影橫斜。想得故山處士家。詩債幾多償未了。一年容易又梅花。

雪中訪山僧

長三洲

山茶花落履痕香。疎雪紛紛滿上方。客至不知僧所在。蕭蕭簞響出空廊。

歲暮

廣瀨淡窗

燈殘半壁明。人少連窗闕。書童還不眠。相話故鄉事。

癸酉歲杪所感

叱石道人

倚檻看梅樹。猶違五柳居。戴霜功未畢。將學梵音書。

企何傳不朽。倏忽歲云殫。人言唯有酒。未足以為歡。

張輪曰。使我有身後名。不如此時一杯酒。

第五節 雜の部

(標題)【一】山水。湖海。瀑布。遊耶馬溪。觀富士山。湖上矚目。養老瀑布。

望東觀山。山店。

○ ○ ○ 嵐光 山ノウスモスモスキ 壁 山ノケシキ 翠 壁 山ノウスモスモスキ 壁
 如眠 春山、 碧嶺 ミドリノ 坐石 高キ山ガ 屋西東 ガシニヒ
 樵聲 音 木ヲキル 嶺 山ソビヘダ 茂樹 緑衣童 ミドリノキ
 千峰 萬壑 谷 澤山ナ山 翠屏 山 鶴高冲 ヒスル 畫圖中
 長松 杏霽 アイハルカニツツ ○ 綠溪 木ノ茂ツ タニニ 水如弓 川水弓ノ如
 沿溪 景色ノヨ 勝地 イトコロ 佳絶 ヨイハナハダ 翠微 山色ノウ
 山花 水色 無伴 トモナフモ 翠微 山色ノウ 路難窮 行キツクシ
 飛泉 景色ノヨ 勝地 イトコロ 佳絶 ヨイハナハダ 翠微 山色ノウ
 蒼蒼 青イ色 躑躅 花 ツ、ジノ 如畫 杖藜 アカザノ ツエラツク
 花燃 花ノ見立、 入座 來 青山、 泉石 嶺雲 酒旗風 酒店ノシル
 松門 松ガ連ツテ 伐木、 丁丁 遙見 勝遊 ア形勝地ニ
 一林楓 ガアタル 風

晴嵐 ハレタ日ノ ウスモヤ 寂寞 尋友 隔溪 水連空 是神工
 凝眸 コトメツメル 石磴 イシダン 山雨 倚松 更幽 クブカイ 白雲 蒙サツテカブ
 孤鶩 山ノスガ 野水 晴碧 立 大空ノ見 サラニユツリ一段トオ 翠濛濛 ミドリガク
 山容 タ 碧水 深處 山ヤ林ノ 欲來 獨行 紫煙籠 煙ガカコム
 蒼峰 青キミネ 激灑 水ガ光ツテ 峰樹 ル木ニア 獨行 紫煙籠 煙ガカコム
 歸樵 カヘル キコリ 綠淨 キヨク 流水 水ガ清ク アサイ 碧山 形如玉ノ色
 桃花 野渡 野水ノワ 清淺 水ガ清ク アサイ 紫藤 響玲瓏 ヒキケレノヤウ
 山櫻 蘸柳 ニツカガ水 漁父 水ガ清ク アサイ 綠波 碧玲瓏 キレイ
 人間 輟棹 舟ヲトメ 啼鳥 染衣 綠波 響玲瓏 ヒキケレノヤウ
 丁丁 木ヲキル 一碧 水ノ色 煙浦 柳塘 ツノミアル 兩三鴻 二三ノ
 閉房 シヅカナ 歎乃 船歌 柔櫓 ヤハラカ 柳塘 ツノミアル 翠雲 叢ガアツマル
 前村 兩岸 垂釣 渺茫 カタルカチ 碧流 緑水ノ流 柳塘 ツノミアル 錦成叢 花ヤ綱ガム
 釣魚翁

第六章 木 文(雜)

〇 〇 懸崖 ケハシキ
 〇 〇 萬頃 廣サ萬町
 〇 〇 波面 ナラツナグ
 〇 〇 好山 ヨキヤマ
 〇 〇 釣船 魚ツリ
 〇 〇 半推 ナカバホウヲオス
 〇 〇 月懸 ユキニミツカク
 〇 〇 火雲 アカクラカ
 〇 〇 碧連 ヒキニミドリ
 〇 〇 柳橋 ヤナハシ
 〇 〇 各不 オノオノ
 〇 〇 問牧 マカシ
 〇 〇 香靄 コウアイ
 〇 〇 月半 ツキニミツ
 〇 〇 水欲 ミヅホク

苦磯 クキ
 如藍 アヲイ
 沙鷗 サウ
 風帆 フウハン
 臨流 リンリウ
 浮萍 フヘイ
 回塘 クワイトウ
 浮沈 フシツ
 鳧雛 フナド
 芳洲 フヨウ
 驚飛 オドロキトフ
 平流 ヘイリウ
 琉璃 リュウリ
 清波 セイハ
 隨波 ズイハ
 隨流 ズイリウ
 天光 テンカウ
 煙波 エンハ
 漁郎 リウリョウ
 漁翁 リウウ
 停橈 テイニョウ
 不盡 フツジン
 去鳥 キョウニョウ
 島樹 シマジュ
 極浦 キョクポ
 古渡 コト
 錦浪 キンナウ
 萬景 マンケイ
 過岸 カワツクリ
 風浪 フウナウ
 渡頭 ワタシバ
 櫓聲 ロノネ
 浪頭 ナミノホ
 淺沙 センサ
 渚浦 ソウポ
 雨添 アメソフ
 野航 ノウカウ
 抱村 オウムラ
 荻芽 オギノメ
 包天 オホソラ
 岸花 キナハナ
 木末 キモト
 兩岸 オノオノ
 露滴 ルツツ
 學謝 ガク
 造化 クワイガク
 綠映 キナノカミ
 樹紅 ジュベニ
 五彩 ゴシキ
 洗耳 センニ
 鳥道 トウ
 一綫 イツゼン

阿峒嶺

賴山陽

危礁亂立大濤間。決皆西南不見山。鵲影低迷帆影沒。天連水處是臺灣。

湖上矚目

楓葉蘆花灣復灣。雨餘雲斂夕陽閒。湖光一片明如鑑。照出文君黛色山。卓文君。

觀養老瀑布

藤井竹外

米樵人絕雪皚皚。千丈長松也欲摧。抵敵寒威唯瀑布。打崖激石響如雷。

曉望東叡山

梁川星巖

昌平直北是東台。山上春風曙色開。萬朵嬌雲遮不徹。鐘聲流得出花來。

不忍池寓園雜吟 原二十六首

同

千頃波平碧玦環。東台青聳樹如山。為移生計暫相寄。便是梁家銷暑灣。

養老泉下作

恒遠精齋

養老山中養老泉。慈親昔日醉頽然。酌來自耐團欒感。風樹匆匆廿五年。

山店

唐盧允言

登登山路何時盡。決決溪泉到處聞。風動葉聲山犬吠。一家松火隔秋雲。

宿石邑山中

唐韓君平

浮雲不共此山齊。山靄蒼蒼望轉迷。曉月暫飛千樹裏。秋河隔在數峰西。

秋河、銀河也。

函山道中

秋山玉山

白雲新樹玉函山。書劍年年往又還。今日山靈應笑我。空將傲骨老人間。

上二子山

三浦梅園

路入仙宮十二重。片雲流水自相從。清風日暮聞孤鶴。知是蓬萊第幾峰。

同賴子成遊耶馬溪

釋雲華

荒陬一入佳士筭。譬如良相舉遺逸。不君高眼品名山。誰以此溪為第一。

(側帶)

題 山水圖

田能村竹田

絕壑流泉開畫屏。石牀安置古丹經。高談不落羲皇後。終日唯教白鶴聽。

再觀 椎谷瀑布

帆足萬里

一別溪山三十年。依稀巖壑夢中看。老去齒牙殘缺盡。瀑泉重嗽雪霜寒。

彥山

廣瀨淡窗

彥山高處望氤氳。木末樓臺晴始分。日暮天壇人去盡。香煙散作數峰雲。

宿 彥山

中島米華

夢彼山村夜未央。殘燈明滅隔隣牆。法螺吹落中峰月。雲冷三千八百房。

比 叡山

劉君鳳

閒坐叡峰雲霧間。清風六月拂仙寰。玉皇當日簾前雪。一點香爐是此山。

夜過 二州橋

廣瀨旭莊

霜滿兼葭宿雁驚。寒雲破處月華明。依稀難認去舟影。唯有金波入棹聲。

秋江釣月

秋月橘門

漁笛吹殘月欲斜。一篷高臥穩於家。夢魂不下向人間。三十六灣蘆荻花。

望 富嶽

岡松甕谷

萬仞芙蓉何兀嶺。吾來仰止恍如失。峰分八葉聳青空。雪壓三州磨白日。

(側體)

渤海舟中所見

長三洲

闌干星斗繞輪船。回首芝罘已渺然。萬道電光東北落。臥看雷雨過朝鮮。

探 秋芳洞

叱石道人

白羊爲石石爲羊。東海此看秋吉鄉。山上磷磷頭角嶺。陳將野店色如霜。

同

秋吉臺、田大理石。

有山有谷有村落。玄窗中方爲一廊。看從金柱至金星。嘆曰神工將鬼作。

富士山圖

廣瀨青村

○ ○ ○
 關山 セキシヨ ヤヤマ 落魄 オチブレ
 銷魂 心ヲケス 坎壤 不遇デコ
 無書 オトヅレ 客淚 ハタゴヤ
 關心 心ニカ 逆旅 ハタゴヤ
 鄉關 郷里 入夢 家ノ内ノ
 無衣 カベ 四壁 家ノ内ノ
 慵耕 ノカヤスモノウシ 破屋 モノノキ
 離愁 ウレヒ 布被 モノノキ
 黃金 、盡 俗事 モノノキ
 還家 郷里ノコ 驛路 ヨシアシ
 家山 ト 得失 ヨシアシ

○ ○ ○
 孤館 一軒ノハ 短吟 タゴヤ
 岐路 ワカレミ 雁書 オトヅレ
 爲計 カヘル心 不眠 オトヅレ
 歸計 カヘル心 斷蓬 オトヅレ
 爲客 客人トナ 四方 オトヅレ
 蓬轉 世ノ常ナキ 寸腸 オトヅレ
 長欽 故事後出 寸心 オトヅレ
 彈鋏 同前 囊空 オトヅレ
 忙裏 イソガシ 布衾 オトヅレ
 忙了 イソガシ 資糧 オトヅレ
 遊子 遊學ノ書 遊子 遊學ノ書

○ ○ ○
 憶故郷 ハヤ十年
 已十霜 ハヤ十年
 菊徑荒 菊ノアル
 半夕陽 半分ハ夕日
 萬世香 ドウトク
 德化昌 カノ力ガサ
 萬恨長 カノ力ガサ
 月色涼 カガミニウ
 鏡裏霜 ツルビンノ
 百鍊剛 白ガビノ
 夢一場 ユメトナツ

青春 青年 俗了 ソクダウ
 離騷 困難不遇 搔首 搔首
 潛然 サメザメトナミ 感舊 昔ヲカ
 情懷 心ノ思ヒ 鬢髮 鬢髮
 如絲 ピンノ毛 去住 去住
 悲歡 カナシミヤ 萬感 萬感
 千山 カナシミヤ 萬恨 萬恨
 千愁 タクサン 短髮 短髮
 馳魂 心ヲ使フ 晚節 晩節
 歸程 カヘルミ 二豎 病氣ノコ
 殘骸 シニノコリ 病骨 病骨
 衰容 オトロヘタ 望國 望國

○ ○ ○
 依舊 我身ノジ 別魂 ワカレノ
 身累 我身ノジ 舊山 舊山
 辛苦 オチブレ 少年 少年
 流落 オチブレ 放狂 ヤリバナ
 如雪 ピンバツ 鬢絲 ピンガ
 千慮 千慮 苦心 苦心
 灰冷 灰冷 百憂 百憂
 天運 天運 頽然 タラレル
 千緒 千ノ思ヒ 舊歡 舊歡
 天末 遠方 客程 客トナツテ
 風土 風土 守官 守官
 中路 トチウ 噬臍 後悔及ビ

○ ○ ○
 夜未央 ヨイマダナカメナシ
 月照牀 月照牀
 野日黃 野日黃
 引領望 引領望
 晚節香 死ニギワノ
 正斷腸 正斷腸
 遊有方 遊有方
 自東流 自東流
 枕寒流 枕寒流
 此中遊 此中遊

○ ○ ○	河清	益恨	○ ●	慚愧	陸沈	○ ○ ○	發詩愁
○ ○ ○	營生	帶病	○ ●	多病	不才	○ ○ ○	發詩愁
○ ○ ○	餘生	老病	○ ●	排悶	夜寒	○ ○ ○	發詩愁
○ ○ ○	吾鄉	斷絕	○ ●	分袂	古今	○ ○ ○	發詩愁
○ ○ ○	思鄉	失路	○ ●	衣薄	夕陽	○ ○ ○	發詩愁
○ ○ ○	音書	索莫	○ ●	幽寂	戰場	○ ○ ○	發詩愁
○ ○ ○	前途	往事	○ ●	今古	昔人	○ ○ ○	發詩愁
○ ○ ○	休官	故壘	○ ●	興廢	舊時	○ ○ ○	發詩愁
○ ○ ○	茫然	壯麗	○ ●	陳迹	古碑	○ ○ ○	發詩愁
○ ○ ○	齟齬	蔓草	○ ●	喬木	斷碑	○ ○ ○	發詩愁

添愁	寂莫	千古	古祠	不堪愁
艱難	萬古	禾黍	舊煙	幾時休
泥塗	古木	原野	拔山	恨幽囚
分離	古道	松柏	弔人	羽觴浮
分襟	鬼哭	全盛	綺羅	夜啾啾
多傷	歲月	何代	折碑	○ ○ ○
離羣	物在	無主	斷碑	○ ○ ○
將迷	霸業	輪奐	黍離	○ ○ ○
寒燈	逐鹿	形勝	暮鴉	○ ○ ○
興亡	破冢	荒草	故關	○ ○ ○
英雄	廢宅	如夢	古城	○ ○ ○
傷魂	舊館	壞壁	半空	○ ○ ○

第六章 本文(雜)

遺基	行人	旌旗	巡遊	徒聞	煙霞	姦雄	于今	蕭條	發祠	高風	○ ○
ノコツタ モトキ	タ人 タニ行ツ	タ	キクコト	ケダカキ 風采	○ ○						
寒山	凄然	忠臣	宮牆	天兵	風雲	蕪城	遺風	餘芳	蕭蕭	依稀	○ ○ ○
シ モノザム	シ モノザム	シ モノザム	シ モノザム	シ モノザム	シ モノザム	シ モノザム	シ モノザム	シ モノザム	シ モノザム	イナク シナイコト	○ ○ ○
旺氣	逸樂	故地	有恨	漠漠	敵國	飲馬	運去	勝敗	自古	滿目	● ●
ワケ キ	タノシム サカナン	モトノチ	モトノチ	多イコト	多イコト	ウツカフ	ウツカフ	ウツカフ	ウツカフ	ウツカフ	● ●
宮殿	終古	依舊	人世	終日	何日	華表	風雨	陵墓	荒廟	祠廟	○ ○ ●
ラ	ムカシカ	ムカシカ	ムカシカ	ムカシカ	ムカシカ	鳥井ノコ	鳥井ノコ	鳥井ノコ	鳥井ノコ	鳥井ノコ	○ ○ ●
半月輝	到	數	兩	競	淚沾衣	故人稀	正依依	破愁	故人歸	故人歸	● ○ ○ 微
カハク	ル	ル	ル	ル	ル	ル	ル	ル	ル	ル	● ○ ○ 微

臨波	塵埃	多情	○ ○	沈吟	無窮	經過	會經	孤墳	豪華	青山	當年
ハカリエ コリヤホ	コリヤホ	コリヤホ	コリヤホ	ケルコト	ケルコト	ケルコト	ケルコト	ヒトツノ	ヒトツノ	ヒトツノ	ソノカミト
料得	易老	不返	● ●	追遊	漁歌	金甌	良籌	元勳	勤王	山河	升平
ハカリエ コリヤホ	ハカリエ コリヤホ	ハカリエ コリヤホ	ハカリエ コリヤホ	アトカラ ヒアソブ	アトカラ ヒアソブ	ハ、無缺 ト	リゴト	ヨイハカ	ヨイハカ	ヨイハカ	太平
踪跡	垂淚	何處	○ ●	沒後	幾度	舊事	寂寂	奏凱	憶起	憶昨	想像
アトカタ	ドコカ	ドコカ	ドコカ	ボツシテ	イクドモ	イクドモ	サビシイ	スルコト	スルコト	スルコト	オモヒミ
昔時	舊蹟	盛名	○ ○	唯有	風急	兵合	空苑	歌舞	西幸	行殿	名將
ムカシ	フルキ古	フルキ古	フルキ古	ムカシ	ムカシ	ムカシ	ムカシ	ムカシ	ムカシ	ムカシ	ムカシ
淚雙垂	歲華移	不能移	● ○ ○ 支	胡不歸	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○
ナシタ ス	ナシタ ス	ナシタ ス	ナシタ ス	ナシタ ス	ナシタ ス	ナシタ ス	ナシタ ス	ナシタ ス	ナシタ ス	ナシタ ス	ナシタ ス

○ ○ 沈波 シノヒ 凛烈 リンレツ 遺事 ウヰジ 可憐 カレン
 風流 フウリウ 望斷 ノゾミハダフ 池涸 チカク 野花 ノハナ
 遺音 ウヰオン 話盡 ワシツク 征伐 テイバツ 鎖門 モン
 吟魂 インコン 惱殺 ノウサツ 東伐 トウバツ 北征 ホクテイ
 寒煙 カンエン 〇 〇 孺子 ニョウシ 眼前 ガンゼン
 王師 オウシ 東流 トウリウ 無缺 ムケツ 涕零 テイゼウ
 黃塵 オウジン 登臨 トウリン 橫笛 コウフエ 受降 ウケカウ
 荒墟 オウキョ 傷情 オウジョウ 尋處 ジンヂョ 子孫 シソン
 君臣 クニチン 松枯 ソウコ 凋落 テウラク 狡童 カウドウ

● ○ ○ 豹留皮 ヒョウリウヒ 凌雲姿 リョウウンサ 步遲遲 フチチチ 角聲悲 カクシウヒ 別時悲 ベツジヒ 酒醒時 シュウセイジ 別離時 ベツリキ 遺愁詩 ウヰシュ 數歸期 スウキキ 髣如絲 フウニシ 白雲陞 ハクウンシヨウ

孤身 コシン 生前 シエン 前事 ゼンジ 古來 コライ
 雄豪 オウコウ 王孫 オウソン 衣帶 イタイ 將軍 カウジュン
 三軍 サンクン 萋萋 セイセイ 佳麗 カレイ 急降 クツカウ
 聲名 セイメイ 郊墟 コウキョ 浮世 フウセ 六軍 ロククン
 悠悠 ユウユウ 空啼 クウテイ 成夢 テイム 脫身 ダツシン
 遺恨 ウヰコン 眞主 シンシュ 爲誰 タガタメ 草枯 ソウコ
 殘壘 ザンリ 亡國 ウキョク 不還 フヘン 暮雲 モクウン
 南狩 ナンシヨ 神武 シンブ 客心 キヤクシン 野翁 ノウウ
 元帥 ゲンシュ 單騎 ダンキ 廟前 ボウゼン 不回 フヘイ
 空谷 クウコク 行盡 コウジン 姓名 セイメイ 忽驚 コトオドロク
 餘韻 ヨウイン 香火 コウカ 水流 スイリウ 可憐 カレン

● ○ ○ 暮鴉飢 モウカウキ 囊中錐 ナウチュウシ 滿清池 マンシヨウチ 濺別離 センベツリ 憶舊知 ウヰキウチ 月半規 グヱツハツキ 百世師 ヒャクセシ 正及時 テイジトキ 霸業基 ハクゲツキ 慰所思 ウヰシヨウシ

○ ● 聞レ笛 追想 月明 北風 綠草滋
 朝露 啼鳥 覺來 慨然 君莫辭
 寒水 休説 笑他 任他 向路岐
 欲レ寄レ誰 馬脱レ羈 沒字碑 天一涯
 不可追 幾盛衰 淚碑 悲別離
 折レ柳枝 對月吹 振レ羽儀 遊子悲
 遊學スル者ノ

○ ● 鄉關夢 悲愁客 燈下淚 思故里 連夜雨
 殘燈在 斜陽裏 寒覺早 爲客久
 故郷ヲユメ コロノ客 トモシビノ下 郷里ヲ思フ
 マダ明リガノ ガツテ去ル カンハキヲオボユ塞ガ早イヤ

【轉句】

○ ● 無ニ知己 人何在 千里夢 羈客思
 親友ガナイ ヒトイツクニカアル人ハドコニ 郷里ヲ思フ タビ客人ノ
 オモヒ
 增惆悵 空流水 驚客夢 家萬里
 ゲキウラム ナホカス ヲモヒ モアル
 郷里ハ萬里

○ ● 山河在 河聲裏 孤館冷 秋氣老
 國破、ガヒツツノヤド 秋氣オラ
 成ニ何事 豪華盡 催起早 重用古
 英雄事 エライハナヤ カサネテイニシヘラトムラフ
 年年恨 秋風裏 忘舊約 砧韻切
 フネダシズ 風ガフキツ ナニゴトニヨル ワウジライダム 昔ノコトヲ ツネニミチカキニルシム
 風吹斷 緣ニ何事 傷往事 常苦短
 ケル ナニゴトニヨル ワウジライダム カナシム ツネニミチカキニルシム 郷夢、

○ ● 投林鳥 孤館裏 多改變 何日到
 ナニゴトニヨル コクワンノウチ 多ニ改變 何日タルカ
 雲千里 程猶遠 千里別 憂別淚
 イツレノトキカフダ、ヒスル テイオホトホシ マダトライイ カウベアゲラシノゾム
 何時再 更分レ手 莫回首 在ニ何處
 ソノウヘワ カウベアゲラシナカレウシロヲフ リカヘリミルナ ドコニアル

○ ○ ● ● ○ ○ ● ● ○ ○ ● ●

家人信家カラノ音 一杯酒 醉ヒテヒ相ヒ別ル

殘燈暗リガクライ 動キヨウゴク歸興カヘリタイ 寸心裏心ノ中

(長缺。彈缺) 馮驩、齊ノ孟嘗君ガ客ヲ好ムヲ聞イテ來リ見ユ。之ヲ傳舍ニ置ク事十日。驩劍ヲ彈ジテ曰ク、長缺歸ランカ、食ニ魚ナシト。後遂ニ大功ヲ建テタリ。

引ニ鄉淚郷ヲ思フ淚 故山夢郷里ノユメ

【作例】

尋

訪

(集ニ不書中之句)

天

胤

作ル客秋風裏。幽懷慰ム所思ヲ。多情醉ヒテヒ相別ル。追想白雲陲ホトリ。

昭和壬申、遍訪ニ故舊。往返經ニ四旬餘日。

戸塚道中

菅茶山

斜風吹イテ雨暗シ前程。厭見松濤夾ム路聲。籃輦日蒙ニ油幕ヲ去ツテ。不知時節是清明ナルヲ。

下淀河

賴山陽

奉ツ母携ヘテ兒イクラヒ往還。一江不レ改舊潺湲。生離死別無限恨。寄セテ在ニ篙聲篷影間ニ。

花朝下澱江

藤井竹外

桃花水暖カニシテ送ニ輕舟ヲ。背指孤鴻欲スル沒頭セントホトリ。雪白比良山一角。春風猶未ホタ到ニ江州ニ。

將レ徒ニ小梅一過ニ吾妻橋畔一有感

藤田東湖

青年此地嘗遊テ。花下銀鞍月下舟。白首孤囚何所見。滿川風雨伴ニ羈ニ愁ニ。

秋日小梅邸樓

同

高樓臨ミ水水連レ空。駿嶽常山指顧中。誰識疎簾半垂處。三秋風物老ニ英雄ヲ。

送ニ含公西歸一

賴山陽

一日三秋更奈何。囑レ君莫ニ使ニ後期差一。從レ今節物誰俱看。閱シテ自ニ梅花一到ニ菊花ニ。

暮春送レ友

恒遠精齋

李花撩亂火榴新。榴老李衰淚滿レ巾。一路蕭條三日雨。送レ春兼ニ送レ遠歸人。

黃鶴樓送ニ孟浩然之廣陵一

唐李白

故人西辭^ノ黃鶴樓^ニ。煙花三月下^ル揚州^ヲ。孤帆遠影碧空盡^キ。惟見長江天際流^ル。(揚雄)

送^ニ元二使^ニ安西^一

唐 王維

渭城朝雨^ノ浥^ニ輕塵^ヲ。客舍青青柳色新^ニ。勸^ム君更盡^セ一杯酒^ヲ。西出^テ陽關^ヲ無^ニ故人^一。

宿^ニ生田^一

菅茶山

千歲恩讎兩^ナ不^レ存^セ。風雲長爲^ニ弔^ニ忠魂^ヲ。客窗一夜聽^ク松籟^ヲ。月暗楠公墓畔村^ニ。

春日山懷古

大槻盤溪

春日山頭鎖^ニ晚霞^ヲ。驂騑嘶罷有^ニ鳴鴉^一。憐君獨賦^ニ能州月^ヲ。不^レ詠^ニ平安城外花^ヲ。

吉野懷古

梁川星巖

不知何處古行宮。飄瞥春空羅綺風。今日誰爲^ニ奉陵^者。夕陽僧掃落花紅。

遊^ニ芳野^一

賴杏坪

萬人買^レ醉^ヲ。攬^ニ芳叢^ヲ。感慨誰能與^レ我同^ク。恨殺殘紅飛^レ向北^ニ。延元陵上落花風。

延元陵、後醍醐帝之御陵。

芳野

藤井竹外

古陵松柏吼^ニ天飈^ヲ。山寺尋^レ春春寂寥^ヲ。眉雪老僧時輟^レ帚^ヲ。落花深處說^ニ南朝^ヲ。

芳野

河野鐵兜

山禽叫斷夜寥寥。無限春風恨未銷。露臥延元陵下月。滿身花影夢^ニ南朝^ヲ。

楠公碑下作

恒遠精齋

南木雖^レ頽^ト跡不^レ空^{カラ}。豐碑巍立表^ニ殊功^ヲ。忠臣忠與^ニ義公義^一。併^セ在^リ嗚呼八字中^ニ。

蘇臺覽古

唐李白

舊苑荒臺楊柳新。菱歌清唱不^レ勝^タ春^ヲ。只今惟有^ニ西江月^一。會照^ニ吳王宮裏人^ヲ。

武君立來訪

菅茶山

花前勸^ム酒莫^レ辭^レ頽^{ナルヲ}。戲蝶鳴禽也惜^レ春^ヲ。一載芳時知幾日。百年蘭友更誰人。

訪^ニ蘋園阪本明府于城東邸^一。福井城

叱石道人

孜孜圖^レ治不^レ辭^レ勞^ヲ。嘖嘖名聲日月高^シ。敬慕溫柔敦厚士。牧民餘事作^ニ詩豪^ト。

送三田有年之長崎

處處旗亭酒易_シ。行人終日不思_ハ家。筑江西去瓊瑤浦。一路秋風菡萏花。

京寓雜吟 平野五岳

紅塵欲染白雲情。累月掩留在帝京。空使三松風吹萬壑。青山缺我讀書聲。

客舍雨夜 長三州

殘燈無語雨聲寒。瘦影相依到夜闌。就枕將眠還復起。鄉書重把一回看。

陸路 原十二首 賴山陽

綿衾薄如紙。夢覺曉燈青。知有先吾發。門前過馬鈴。

舟路 原十二首 同

山色青糝糊。波紋紫破碎。殘陽光已收。猶在一帆背。

旅懷 梁川星巖

森森寒流廣。蕭蕭暮雨稠。鷓聲將雁語。併入客心愁。

伏見途上 恒遠精齋

藤紫煎茶店。柳青賣酒樓。斷續車聲響。一牛又一牛。

四條橋 吐石道人

日出車聲亂。黃昏履響忙。樓樓燈漸點。影落水中央。

別府 廣瀬淡窗

樓上離歌歇。江頭欸乃新。歸舟回首處。猶見倚欄人。

憶東山 唐李白

不向東山久。薔薇幾度花。白雲還自散。明月落誰家。

絕句 唐杜甫

江碧鳥逾白。山青花欲然。今春看又過。何日是歸年。然、同、然。

別盧秦卿 唐司空曙

知有前期在。難分此夜中。無將故人酒。不及石尤風。石尤風、逆風也。

三 閭 廟 三閭大夫屈原。

唐 戴 叔 倫

沅湘流不盡。屈子怨何深。日暮秋風起。蕭蕭楓樹林。

尋 隱 者 不 遇

唐 賈 島

松下問童子。言師採藥去。只在此山中。雲深不知處。

尋 胡 隱 者

明 高 青 邱

渡水復渡水。看花還看花。春風江上路。不覺到君家。

筑後道上。有懷高恩尊者。

廣 瀨 淡 窗

縹緲良峰頂。何人此習禪。片雲飛不去。應是玉爐煙。

耶馬溪所見

廣 瀨 旭 莊

夕日下高巖。春潭花影疊。波光忽滅明。知有歸樵涉。

題浪華橋納涼圖

同

川澗風分路。舟行月亦波。遊人屢移棹。何處得涼多。

西 征 記 遊 原十首

吐 石 道 人

大 連

巷接日華露。樓連峰與灣。風色雖堪喜。唯其奈兀山。

旅 順

驅車巡戰跡。廣袤幾千尋。殘壘猶凄慘。半藏松樹林。

奉 天

面驛開三道。直通千代田。奉天城壁裏。坐憶甲辰年。

安 東

安東何所見。鴨綠水洋洋。通船橋廻轉。隔江人異裝。

京 城

南山望北漢。萬瓦是京城。秋月雖過半。巨磧砧杵聲。北漢山

滿 洲

○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○
提壺	醉臥	遺世	五車	書物ノ多	鹿鳴篇	詩經ノ篇名	綠莘	草ナドノ多	伊コト
ニモツ	ツボヲ手	世間ノコト	ケダカク	ワスル、	ミドリセン	草ナドノ多	リヤウナガラアヒマツダシ	イコト	イコト
樽前	閉戸	勉強スル	高臥	ケダカク	兩相全		日光	ウガツ	ウガツ
逃名	遺興	オモシロサ	高踏	ケダカク	掛長川	瀑布ノコト	起茶煙	清キ川ノ	
歸山	雅趣	高尙ナオ	高枕	タカマク	起茶煙		起茶煙	清キ川ノ	
歸田	把菊	モムキ	乘興	オモシロサニシテ	枕清川	上ニ寝ルコト	翠娟娟	ミドリガキ	
田舎ニカヘ	把菊		乘興	オモシロサニシテ	掛長川	瀑布ノコト	翠娟娟	ミドリガキ	
ルコト			乘興	オモシロサニシテ	掛長川	瀑布ノコト	翠娟娟	ミドリガキ	
○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○
榮枯	翰光	雲ノ中	伴侶	トモダチ	樂天		起茶煙	清キ川ノ	
サカヘ又	ヒカリヲツ、ム	自ラクラ	伴侶	トモダチ	樂天		起茶煙	清キ川ノ	
カルル	マス	コト	伴侶	トモダチ	樂天		起茶煙	清キ川ノ	
談玄	耕雲	雲ノ中	伴侶	トモダチ	樂天		起茶煙	清キ川ノ	
老莊ノ談	耕雲	雲ノ中	伴侶	トモダチ	樂天		起茶煙	清キ川ノ	
松筠	琴書	夢蝶	伴侶	トモダチ	樂天		起茶煙	清キ川ノ	
松ト竹	琴書	夢蝶	伴侶	トモダチ	樂天		起茶煙	清キ川ノ	
○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○
無絃	殘基	農功	緩歩	黒甜	寝衰ノコ		水潺	浚音	
琴ニイト	ウチノゴ	農ノコト	クワンボ	ユルク	コク		水潺	浚音	
ガナイ	リノゴ		クワンボ	ユルク	コク		水潺	浚音	
通神	農功	農ノコト	緩歩	黒甜	寝衰ノコ		水潺	浚音	

腰鎌	牽牛	隱几	曲肱	午睡	晉宋前	前ノ六朝頃	撫一絃	琴ヲ引クコ	○ ○ ○
ヒラ	事	息ニヨ	ヒテ	ハ	シ	ソ	フ	ク	○ ○ ○
ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	○ ○ ○
○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○
兒孫	煙蓑	野蕨	杖藜	ツエラツク	數畝田	五六七位ノ	醉欲顛	酒ニエヒテ	
コト									
○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○
芒鞋	孤篷	卜宅	謝塵	中ヲサ	數畝田	五六七位ノ	醉欲顛	酒ニエヒテ	
ワラヂ	ヒトツノ	ルコト	チリシヤ	世ノ中ヲサ	數畝田	五六七位ノ	醉欲顛	酒ニエヒテ	
○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○
何傷	高情	自遣	下帷	私塾ヲ開	數畝田	五六七位ノ	醉欲顛	酒ニエヒテ	
オヨバナイ	高情	自遣	下帷	私塾ヲ開	數畝田	五六七位ノ	醉欲顛	酒ニエヒテ	
○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○
看書	棲遲	淨几	有餘		數畝田	五六七位ノ	醉欲顛	酒ニエヒテ	
ヒラ	隱者トナ	ツキ	有餘		數畝田	五六七位ノ	醉欲顛	酒ニエヒテ	
○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○
江山	忘機	筆硯	自閑		數畝田	五六七位ノ	醉欲顛	酒ニエヒテ	
オヨバナイ	忘機	筆硯	自閑		數畝田	五六七位ノ	醉欲顛	酒ニエヒテ	
○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○
忘言	談論	用舍	北窗		數畝田	五六七位ノ	醉欲顛	酒ニエヒテ	
オヨバナイ	談論	用舍	北窗		數畝田	五六七位ノ	醉欲顛	酒ニエヒテ	
○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○
蓬頭	明窗	稚子	一瓢		數畝田	五六七位ノ	醉欲顛	酒ニエヒテ	
毛髪ノミダ	明窗	稚子	一瓢		數畝田	五六七位ノ	醉欲顛	酒ニエヒテ	
○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○
扶筇	支頤	豆粥	萬竿	綠竹、	數畝田	五六七位ノ	醉欲顛	酒ニエヒテ	
ツニニダス	支頤	豆粥	萬竿	綠竹、	數畝田	五六七位ノ	醉欲顛	酒ニエヒテ	
○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○
常車	行藏	一飽	煮芹		數畝田	五六七位ノ	醉欲顛	酒ニエヒテ	
オトガヒ	行藏	一飽	煮芹		數畝田	五六七位ノ	醉欲顛	酒ニエヒテ	
○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○
無言	閑人	一局	竹隣		數畝田	五六七位ノ	醉欲顛	酒ニエヒテ	
オトガヒ	閑人	一局	竹隣		數畝田	五六七位ノ	醉欲顛	酒ニエヒテ	
○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○
山肴	桃源	有田			數畝田	五六七位ノ	醉欲顛	酒ニエヒテ	
山ニテトレ	桃源	有田			數畝田	五六七位ノ	醉欲顛	酒ニエヒテ	
ルオサカナ	桃源	有田			數畝田	五六七位ノ	醉欲顛	酒ニエヒテ	

蓬蒿 ヨモギ
 開窓 シヅカナ
 對酌 ムカヒアツ
 獨醒 エヘリ吾レハ
 青苔 ヨモギ
 逍遙 アラブラ
 獨坐
 僻居 キルコト
 塵事 ト世間ノコ
 老農 タ人
 鼓ニ五絃
 小船 ニ小ブネヲ出
 緩著レ鞭事ニカカル
 點點圓 ルイツマ
 詩思鮮 アサヤカナリ
 三百篇 詩經ノコト
 塵事 捐 ス世ノコトヲ
 鳴ニ杜鵑 ガナク
 從容 ユツタリ
 負郭 コロ
 勤苦 ツトメク
 白衫 キヌ無官服
 茅屋ヲ作
 松陰 松ノカゲ
 芋栗 リイモトク
 勤苦 ツトメク
 白衫 キヌ無官服
 茅屋ヲ作
 閒行 アルク
 痼疾 ノヤマヒ
 溫飽 アタタカクキ
 隔城
 歸來
 寂莫 サムシイ
 情倦 ウム心ガアイ
 獨吟
 著書
 一丘
 野情 野人ノコ
 溪山 退隱ノ故
 養素 ヤシナフ
 心足 満足
 野情 野人ノコ
 菟裘 事
 養素 ヤシナフ
 心足 満足
 野情 野人ノコ
 撥亂 事
 養素 ヤシナフ
 心足 満足
 野情 野人ノコ

村醪 村デデキ
 對奕 コト
 成癖 ユツタ
 草庵
 前村
 愛竹 晉王子猷、庭ニ竹ヲ植エテ曰ク
 屏跡 ルコト
 村酒
 濁醪 ニゴリザ
 香芹 ヨイセリ
 屏跡 ルコト
 村酒
 濁醪 ニゴリザ
 村春 村ノ者ノ
 一快
 甘分 身分ニ安
 自怡
 隣機 ハタ
 一壑 一ノ山ノ
 幽致 オモムキ
 結廬 カリ家ヲ
 忘形 無我
 別事 無ニ、一
 隨意
 喚鄰
 圃丁 ソノヲ作
 入市
 頑健 丈夫達者
 薄田 ヤセタ田
 清貧 心ガキヨ
 不語
 林麓
 遮鄰 リヲサヘギル
 夕陽 般 夕日ガ赤イ
 清虛 クムナシ
 取樂 フトルシ
 幽客
 恣情 ニナル
 愛ニ幽閒
 全真 ャタウス
 放曠 フヒロクスル
 蘿薜 カヅラ
 野蕘 アツモノ
 野情 野人ノコ

○ ○ 深居 山アカク 槁木 身ハカレ
 籃輿 カゴ 獨酌 キノ如ク
 癡頑 ヲロカ 醉眼 ニスル
 何求 トメナイ 任性 ニスル
 乘閒 ヒマニマ 抱膝 ハ、眠
 江湖 世ノ中 俗遠 世間トハ
 優遊 ヌツクリト 市遠 同
 圍爐 引水 泉池、
 躬耕 身自ラタ 獨處 ヒトリアル
 孤樹 酒ヲノム 讀易 エキノ本
 朦朧 月ハ、ウ シヨクラツトム 農菜ニホ
 隣舍 隣 隨思 隨 隨 隨
 習閒 シツカシケ
 嫩芽 茶ノワカ
 臥看 茶ノワカ
 菜根 ヤサイノ
 抱孫 抱孫
 絕交 絶交
 角巾 巾 巾 巾
 渴來 ハク
 忍貧 忍貧
 放慵 シヤリバナ
 里胥 村役人
 晝掩關 戶ヲシメル
 去復還 返ツタリ
 淡淡山 色ニ見
 稼穡 農民ノホネ
 午院閒 ガシツカズ
 銷夏灣 サマケス入海
 霜葉班 マダシカナリ
 煙霧 閑
 【轉句】

家蔬 家ニ作ツ 洗硯 硯ノ水
 屏居 身ヲシリソ 省事 事ヲ省ク
 吾廬 我がカリ 學古 古ヲ學ブ
 持竿 釣、 祿位 輕ニ、
 澆蔬 ヤサイニ 野趣 野人ノオ
 餘年 老後ノ年 朴野 ナルコト
 垂綸 ヲタリノイト 白眼 好意ヲ以テ
 虛齋 ナニモナ イハヤ 懶出 ニモノウシデルノ
 花逕 ミチ
 夜來 昨夜カラ
 豁然 ホガラカ
 孤生竹 ナニゴトモ
 三千卷 シツカナト
 閒中地 コロ
 徐舒卷 シツカニノズ
 家蔬 タケノコ
 陶元亮 陶淵明字元亮
 開搜句 句ヲ求ムル
 猶邀蝶 ナホテワムカフ
 無如鶴 ツルニハオ
 支頤臥 オトガヒヲ
 薰風裏 ヨイ風ノ中
 來同醉 ナニゴトモ
 無餘事 ナニゴトモ
 孤生竹 ナニゴトモ
 三千卷 シツカナト
 閒中地 コロ
 徐舒卷 シツカニノズ
 露茗 茶
 野餉 ウノベント
 老健 老健
 微軀 小サイカ
 身輕 身輕
 人淳 フナホ
 成癡 ナル
 頤生 養生
 無營 ナイ
 頤生 養生
 微軀 小サイカ
 身輕 身輕
 人淳 フナホ
 成癡 ナル
 頤生 養生
 無營 ナイ
 頤生 養生
 微軀 小サイカ
 身輕 身輕
 人淳 フナホ
 成癡 ナル

○○○ ●●●

煙蔬ケムリヲラビクワタルヤサイ科頭トウ無帽アダマノモ日課ヲマゲタマノ

拋官クワンヲナゲウツ官ヲヤメ人間ルコト潔白

山環メゲル相忘 養レ靜

芭蕉 迎レ賓 悟レ道

蛙鳴 傳レ杯 水繞水ガ家ヲ皎潔

何妨ナシサマダゲン差支ナイ迢迢セウセウハルカ 靜遠セイエンフカイ

○●● ●●●

堆ツヨクニウツダカシ淨ニ凡一ノ上ニ多イ人事ニ少

檜有酒ト塞ヲウツコ 傳ニ不朽一ヘル

開ニ黑白ト天地ヒロシ濶△△

雲作浪浪ノヤウナ塵外境

●●● ●●●

興到キヨウイタルオモシロクナル

一任サモアラバアレドウデモヨイ

暮雨 彷彿ハツヤヤニダ

皎潔 正是チヤウド

○●● ●●●

秋氣肅シユクダリ千古意秋ノキガシ古ノ心

吞ニ一腕茶一、、

揮毫處トコロ

○○○ ●●●

無ニ人到一

詩消暑詩ヲ作ツテ暑ヲ忘ル

藏ニ今古一千行淚ナンドモオサメテキルナミダ

無ニ消息一千秋業タヨリガナイ

○●● ●●●

一杯酒 動ニ詩興一後凋色松ノ色

白衣酒白衣ノ老人ガ陶淵明ニ酒ヲオクル

【菟裘】

左傳ニ、魯ノ隱公曰ク、菟裘ニ營マシメヨ。吾レ將ニ老セントスト。其レヨリ官ヲヤメテ隱退スル所ノ稱トナツタ。

【牽牛】

堯帝ガ位ヲ許由ニ讓ラント欲シテ話シタレバ、許由ハ耳ヲ汚シタトテ、潁川ノ水デ耳ヲ洗フ。其處ニ巢父ト云フ者ガ、牛ニ水ヲ飲マセントセシモ、許由ノ耳ヲ洗ツタト聞イテ、左様ナ汚レタ水ハ、我が牛ニハ飲マセラレナイトテ、又牛ヲ牽キ去ツタト云フ傳説。

【作例】

閑

適(集ニ本書中之句)

天

胤

渴來吞シメレバミ一碗情倦メバツテ把レ詩刪ヲル虛齋天地濶シ高臥シテ聽ク綿蠻ヲ

五十自述原三首

梁川星巖

一壺春酒一張琴。月下坐彈花下樹。但使ニ此心平且正一。不レ論鍾鼎與ニ山林一。

村舍雜吟原五首

同

風月琴樽併一拋。閒門常閉鎖蓬蒿。不知老懶不堪事。只道先生偏養高。

冬夜讀書

菅茶山

雪擁山堂樹影深。檐鈴不動夜沈沈。閒收亂帙思疑義。一穗青燈萬古心。

蔣山精舍庫裏新成。賦詩呈紫山老師。明治戊申七月 叱石道人

伐他霜幹百年材。建此堂堂香積臺。自今齋會人多少。不識誰先飽滿回。(拗體)

香積臺、謂調食堂。

觀棊

梁川星巖

殺氣消盡日麗天。不見千戈二百年。今日危機屬閒客。一枰方罫賭坤乾。

清溪煎茶

藤井竹外

汲得冷冷白石泉。清茶仍傍石泉煎。竹風一陣橫吹斷。不許輕煙到鶴邊。

南堂

宋蘇東坡

掃地燒香閉閣眠。簾紋如水帳如烟。客來夢覺知何處。挂起西窗浪接天。

謫居言志

藤田東湖

俯思鄉國仰思君。日夜憂愁南北分。惟喜閒來耽典籍。錦衣玉食本浮雲。

次韻家生梅邸卽事

同

既將身跡付沈埋。惆悵何須吟打乖。翠竹白沙風月界。絕無塵事到智懷。幽囚不許賦歸歎。衣帶日寬髣日疎。何物尤爲一身累。滿腔盡是古人書。

桂林莊雜詠。示諸生。

廣瀨淡窗

休道他鄉多苦辛。同袍有友自相親。柴扉曉出霜如雪。君汲川流我拾薪。

卜居

叱石道人

心從境變俗移風。擇里居仁意豈窮。聊爾結廬何所見。四圍直木鬱成叢。

杉、直木、國音相通。

閒居無題

田能村竹田

盡日柴門掩不開。一心鏡徹絕纖埃。午天眠覺石床靜。野鶴飛來啄碧苔。

述情

東風吹老百花枝。來燕歸鴻共有期。昨雨相逢今雨別。一年春夢欲醒時。

寓居口占

口斷臙腥伴佛燈。旬餘骨相淨於冰。讀書以外無他事。人道新來有髮僧。

書齋坐雨

芸窗盡日坐凭梧。隔霧青山淡有無。笑我讀書春雨似。暫時過眼復模糊。

山齋夜坐

舊習未除文字緣。滄桑幾變苦吟邊。青燈一穗猶相對。夜雨聲中七十年。

淡窓五首 錄三

明窗筆淨几。抱膝思悠哉。莫話人間事。青山入座來。

蕭瑟還蕭瑟。焚香細雨中。水沈煙一縷。不肯出簾櫳。

已過松間逕。還尋竹裏門。來人不著屐。恐破綠苔痕。

廣瀨旭莊

秋月橋門

長梅外

平野五岳

廣瀨淡窗

端居遣興

名能甘寂寞。事豈歎差池。亦有閒中興。看山詠小詩。

見訪。醒則客去。

客携美醞來。卻使主人醉。客去主人醒。曉雲茫別思。

客去

茶殘香亦燼。客去午窗閒。棊局好爲枕。臥看雨後山。

鹿 柴 輞川二十勝之一

空山不見人。但聞人語響。返景入深林。復照青苔上。

竹 裏 館 同

獨坐幽篁裏。彈琴復長嘯。深林人不知。明月來相照。

自 遣 同

對酒不覺暝。落花盈我衣。醉起步溪月。鳥還人亦稀。(勸體)

梁川星巖

村上佛山

同

唐王維

同

李白

○ ○ 從今 不改 能戲 諸兒 歲八千 大椿。春八
 高入 更美 陰德 五雲 幾變遷 千歲。秋八
 子歸 學得 陽報 致君 小洞天 小サイ仙人
 人心 百歲 多義 善人 落九天 天上カラオ
 高山 定是 香裏 甲科 負鼎賢 國家ノ大臣
 梅花 眼見 功遠 奮身 冠世賢 世ノ賢者
 岡陵 奕世 功就 北溟 續斷弦 弦ノ音ノ
 遐齡 已熟 他日 北溟 五色煙 煙
 朱顏 錦綉 君取 百年 祝鶴年 千年ヲユワ
 無雙 不負 還取 水魚 醉欲顛 醉ニエ
 靈修 四海 名挂 已誇 醉欲眠 醉ニエ

心期 好是 堂上 玉簫 俗慮獨 不老泉
 曾玄 枕上 吹徹 久長 孟母 遷三度 遷ツタ
 梅花 早願 佳兆 勃興 志浩 然志ガ大キイ
 三遷 萬里 來歲 聰明 思渺 然思ヒガハル
 生辰 莫道 琴瑟 一生 第一篇
 天機 聖主 佳遇 共斟 雨露 全ホヒ
 平生 吉夢 之子 又添 萬里傳 速クニツタ
 聲名 熊羆 象瓜 又添 將帥 權ケンカ
 蒼生 養子 忠烈 鯉魚 萬里傳 速クニツタ
 鷺鷥 彩鳳 蛇虺 棟梁 熾而昌 又サカン
 桑弧 驥子 矢 鬱葱 數春秋 何年ニモ
 麟兒 始見 宜舉 食牛 數春秋 何年ニモ

【轉句】

○○○ 乾坤異ケンコトナル 天地ガチガ
 ○○○ 齊方朔ヘウサクニヒトシ 東方朔ニオ
 騎牛度ウシノワッテワタル牛ニノツテ 長生訣ケツ ナガイキノ
 知生意チイイラシル 皆難得ミナハエラ
 延遐算カサンノ算 長イ年ガノ 三千歳コト 壽命ノ長イ
 聲名重オモシ タカイ 酬身シンセイニムク 身ヤ世ニム
 三層浪サミヤク 三段ノ浪 徐入オモロクニユ ニルソロユ
 關鳴好クワンシヨノヨシ 夫婦中ノヨ 鴛鴦帶ウヅノワビ 夫婦ヲムス
 青雲器キ 立身スル人 知英物チイロモノ
 何無種ナニカラン 種ガアル 一君子

○○○ 千載秀チンサイシュ 千年モヒイ
 仁者壽ニノチナガシ 仁者ハイノ 開壽域ケイジュウキョク
 人仰德ニョウタク 人ガトクラ 登第喜トウテイキ 及第ノヨロ
 能苦學ニョクガク オドロカス 驚天下オドロカス
 扶日手ヒラタス 大官トナル 知氣槩チキカウ 氣性ヲシル
 山送畫サンソウガク 山ガ室内ニ 多是水タハレ

○○○ 依玉樹イニギノキ キレイナ子供
 知甲子チイカウ 年ヲ知ル 三四代サンシヨウダイ 子孫ハハハ
 龍虎榜リウコフ リウヤトラト 堯舜上ユウジュンノウ ハハハハハ
 飛白畫ヒハクガク 彩雲 求治急スウヂイウ ヨイコヲ
 生彩鳳セイサイフウ ヨウシヨ 休恨晚シュイケンマン オツヒカラ
 新宅シンタク 新家ヲ立ツ 何處在ナニカ ドコニアルカ

【斷機】

孟子ガ學問ニ行ツテ未ダ成ラズ中途ニシテ歸ツタレバ、母イキナリオリツ、アツタハ
 タヲハサミデタチキツタ。孟子驚イテ問フ。母曰ク、汝ガ中途デ歸ツタノハ、此ノハタヲ
 タチキル如キ者ダト。孟子再ビ去ツテ大學者ト爲ツタト云フ故事。機トハ布帛ヲオル所ノ
 ハタ。

【九如篇】

詩經ノ天保九如ト云ツテ芽出度イ事バカリナラベタ詩篇ヲ謂フ。
 如松栢之茂。如岡如陵。如川之方至。等等アル。

【三遷】

孟子三遷ト云ツテ、始メ孟子ノ母子兩人ガ、墓所ノ近クニ居住シタレバ、幼童ノ孟子
 ハ、毎日經ヲ讀ミ、又ハ土葬スルマネバカリヲ爲ス。因ツテ母ハ市街地ニ轉居シタ。スル
 ト今度ハ物賣リノマネヲ爲ス。其處デ今度ハ學校ノ側ニ轉居シタレバ、毎日書物ヲ懷ニ入
 レ、又ハ書ヲ讀ムマネナドヲ爲ス。後遂ニ大賢人ト爲ツタト云フ故事。

【等陵岡】

前述ノ天保九如篇中ノ詞。

【關雎好】

詩經開卷第一ニ、文王ノ后妃ノ德ヲ述ベタル所ニ、關關タル雎鳩ハ、河ノ洲ニ在
 リ。窈窕タル淑女ハ、君子ノ好逮ト曰ツテ、御夫婦仲ノ好イ事ヲ述ベタノデアル。故ニ關
 雎ノ好ミト曰フ。

(齊方朔) 東方朔へ前漢ノ武帝ニ仕ヘタ賢臣ナレ共、一種ノ傳説トシテ、恰モ我方武内宿禰ノ如ク、何百歳ト云フノデアル。故ニ長命ヲ齊ニ方朔ト云フ。

【作例】

祝

壽 (集本書中之句)

天 胤

鶴算齊ニ方朔。玉堂啓ニ壽筵。春風人仰レ德。爲誦九如篇。

七十自嘲

菅 茶 山

疎拙從來世所嗤。今春七十轉添癡。不知身上殘齡減。猶且欣欣把壽卮。

孟母斷機圖。壽中山言倫叔母七十。

同

七篇微旨本三遷。命世兼欽母德賢。機上斷絲長幾許。續來聖緒萬斯年。

中山君八十壽言

同

老壽人間難古稀。況加二十歲未知衰。藩朝隊長稱雄職。時見英姿策馬來。

余年甫三十二新娶。乃作二絕句以自調。錄一

梁 川 星 巖

簾閣通明日漸高。畫眉窗下笑櫻桃。一輪粧鏡何多事。更向潘郎管二毛。 黑白、二毛。

南部新書云、陳崎頗負詩名。曾有閉居詩二日、小橋風月年年事。爭奈潘郎老去何。

(陳崎自比晉秀才潘岳)

舉女二首

村 上 佛 山

誰謂不如男子尊。愛之潛比掌中珍。爺孃癡想真堪笑。已議東床坦腹人。 溫然一夜玉投懷。卻愛呱呱求乳啼。拳小匹如春蕨苗。何時舉案與眉齊。

晉太尉彭璽、使門生求女婚於王導家。王氏子弟咸自矜持。唯一人坦腹而臥。旁若無人。導太尉曰、東牀坦腹者佳婿也。訪問乃義之也。遂以女妻之。義之者王導之從子也。坦腹者、平出腹而仰臥也。

賀 七 十一 (圓機活法品題)

七十年來鬢未皤。林泉真樂養天和。函關老子騎牛度。蓬苑神仙載鶴過。庭外彩雲飛白晝。膝前斑絲繞青羅。從今盡得長生訣。唯有高人壽最多。

賀 知恩院山下現有上人百二歲

叱 石 道 人

誰比上人齡德高。將凌台嶽海師豪。講書白鹿集。初地談法玄禽鳴。九臯松樹千年藏琥珀。椿花億載貯脂膏。佛心何獨霑仙骨。灌自若生至俊髦。天海僧正、壽一百三十歲云。

曲江二首 錄一

唐 杜 甫

朝回日日典春衣。每向江頭盡醉歸。酒債尋常行處有。人生七十古來稀。穿花蛺蝶深深見。點水蜻蜓款款飛。傳語風光共流轉。暫時相賞莫相違。

七十曰古稀。本三子此詩。

仇滄柱曰、春花欲謝。急須行樂。而行樂。須尋醉鄉。但恐現在風光、瞥眼易過。故又作留春之詞。此兩首中、相承相應之意也。即就演義、作寄語於風光。從無情中、看出有情。自見生趣。

張繩曰、二詩以仕不得志、有感於暮春而作。

范省菴云、朝回典衣貧也。典現在春衣貧甚矣。且日日典衣貧益甚矣。

鶴注、八尺曰尋。倍尋曰常。故對二十七爲對句。

邵注、深深、萃其翻翻隱見。款款、狀其上下往來。款、徐也。

賀松本少尉之新婚 明治丙申春日

吐石道人

梅花香與酒杯香。孰若鴛鴦契更芳。琴瑟和來歡不淺。蓮峰晴雪照椒房。

(標題) 【五】 弔 亡。哭先生。追哭友人。謁先師墓。詣友人墓。悼幼兒。

聞友人訃。

○ ○	吟魂	目斷	斜日	故人	伯牙
○ ○	西樓	物化	愁絕	不	玉几
	仙遊	爲述	風雨	滿庭	彩雲
	芙蓉	雨暗	城郭	不聞	故鄉
	莊周	永訣	胡蝶	忽驚	願齊賢
	生平	往事	埋玉	水流	水晶蓮
			葬式		

○ ○ 傷心 寂莫 埋骨 憶君 淚 泣 然
 ツヅクワイ アトカラオ 龍去 人ノ死ヲ 萬聲 多勢人ノ
 追懷 ヒオモフ 號哭 クサケビナ 墓門 ハカノ入
 猶存 玉樹 立 死人ノ見 忽聞 大儒者
 遺編 後ニ殘ツ 空想 シクフ 碩儒 一春
 浮雲 影瘦 遺稿 一春 碩儒 大儒者
 △空餘 落葉 唯 有 碩儒 大儒者
 幽花 白玉 去 死 人ノ處 筆端 フデサキ
 聲多 海内 尤 憾 筆端 フデサキ
 煙迷 底事 應 照 マサニテラスベシ
 樓頭 好夢 ヨイユメ 墳墓 ハカ
 名花 墳墓 ハカ

從來 孰是 猶記 始知 淚 泣 然
 カマワトシウス 兩度 無限 落花 百鍊堅 確リシタル
 齊肩 一掃 一ハラヒ 惠然 惠ミ來タ
 墳塋 ハカ 到處 凄雨 イアメゴ 玉容 死人ノ見立
 イツレトキカ 何時 心事 再 來 二 八 年 十 六 歲
 シンゴウ 詞場 詩文ヲ作 處處 心 事 再 來 二 八 年 十 六 歲
 江山 美玉 追感 アトカラ 俄然 ニハカニ
 文章 百卷 遺著、 過雨 在 前 枕石 眠 古人ノ苦修
 無窮 恍惚 忘我ノ狀 何計 暗愁 ウレヒ
 蕭條 サビシイ 代謝 立チ代ルコト 松竹 可 憐 一 指 禪 一 指 頭ニ云
 ○ ○ 窗前 嘯鳥 啼鳥 種花 俄然 ニハカニ
 孤墳 カツノハ 喚友 千 淚 ナナミダ 俄然 ニハカニ

○ ○ 窗前 嘯鳥 啼鳥 種花 俄然 ニハカニ
 孤墳 カツノハ 喚友 千 淚 ナナミダ 俄然 ニハカニ

○ ○ ○
唯餘タガアラス

不洩コラサズ

○ ○ ○
蕭寺シヨウジ 薩摩シキ

○ ○ ○
念君オモフ

○ ○ ○
未了緣ミナクエ マダエシガツキナイ

寒山サムヤマ

調藥クワリツトノフ

來者キヤウジャ

好風コウフウ

宿昔緣シヨクセキノエ ムカシノ因

禽聲カニシヤ

數日スツノヤ

猶訝ナホイカル マダ不思

病容ベウヨウ

大願船ダイガンセン 彌陀ノ、

孤衾コキン

豈料アニハカシヤ

花貌カハカホ

鬼神クワンジン

海內傳カイノウデン

承歡シヤウクワン 父母ノヨロ

在眼コビヲウケル

成喜スレキ

果知ヘタシラシム

遂不痊ツキニイエズ 病ガトウト

唯聞シヤウクワン

夜坐コビヲウケル

朝權チヨウケン ムクゲ

快論クワイロン

金玉篇キョウギク 立派ナ詩文

離羣リグン

況是イハシヤコレ

從此コレヨリ

九原クウゲン 死ニユク

金玉篇キョウギク 立派ナ詩文

【轉句】

○ ○ ○

東流水トウレイスイ ツノ水ノ如ク人ハ去ル

○ ○ ○

招不得マケドモエズ マネケドモ招キ返シエナイ

偏逢ヒトニアヘニアフ 雨アメ

爲胡蝶コトフナナル

○ ○ ○

何處是イツレノトコロカレドレガ

雲低野クモナニダ

陰蟲語インキムゴ

○ ○ ○

花影轉テニス 月ガ移ツテ

黃泉下クワシヤ 地下ヲ云フ

無消息ムシヨクシ モナイ

○ ○ ○

何處去イツレノトコロニ 行ツタカ

千行淚チヤウコウナミダ

腸將斷ハラワダマヤニダ 腸ガ切レサ

○ ○ ○

空入夢カラニユメニ 入ルバカリ

化龍處ケリウジョ 死ノ形容

又零落マタレイラク 又オチオツ

○ ○ ○

是日イツレノヒ

化龍處ケリウジョ 死ノ形容

又零落マタレイラク 又オチオツ

○ ○ ○

是日イツレノヒ

【作例】

悼イダム

亡ボウ

天

胤

窗前花自落。雨暗恨綿綿。一去無消息。空餘萬斛泉。

追哭龜井雲來ツイキカミイヅノクモ 原二首

廣瀬淡窗

詩酒風流半百年。遺芳長向二世間。傳。梅花應照重泉夢。菅相祠南好墓田。

菅相祠スガサウジ 謂太宰府天滿宮。

聞二千秋キコエニチユキ 計ハカリ 賴春水レイシュン 字千秋。山陽之父。

菅茶山

時賢相繼北邙塵。知己乾坤餘一人。玉樹今朝又零落。此身雖在有誰親。

第六章 本 文(雜)

悼

亡 原七首(失妻)

村上佛山

爲_レ余_レ會_レ製_レ詩_レ囊_レ小_レ。到_レ處_レ提_レ携_レ儘_レ自由。從_レ此_レ好_レ風_レ佳_レ月_レ下。未_レ盛_レ新_レ句_レ已_レ盛_レ愁_レ。落_レ木_レ寒_レ蟄_レ月_レ若_レ霜_レ。秋_レ宵_レ偏_レ與_レ暗_レ愁_レ長_レ。可_レ憐_レ稚_レ女_レ眠_レ纒_レ覺_レ。誤_レ喚_レ阿_レ爺_レ爲_レ阿_レ娘_レ。

聞_レ賴_レ子_レ成_レ計_レ音_レ詩_レ以_レ哭_レ寄_レ 原三首

梁川星巖

東_レ山_レ六_レ六_レ峰_レ何_レ處_レ。雲_レ鎖_レ泉_レ臺_レ慘_レ不_レ開_レ。歲_レ在_レ龍_レ蛇_レ爭_レ脫_レ厄_レ。人_レ傳_レ麴_レ蘗_レ遂_レ爲_レ災_レ。一_レ朝_レ離_レ掌_レ雙_レ珠_レ泣_レ。五_レ夜_レ竟_レ巢_レ寡_レ鶻_レ哀_レ。彼_レ此_レ撫_レ來_レ最_レ惆_レ悵_レ。海_レ西_レ有_レ母_レ望_レ兒_レ來_レ。

亡友月照十七回忌辰作

西鄉隆盛

相_レ約_レ投_レ淵_レ無_レ後_レ先_レ。豈_レ圖_レ波_レ上_レ再_レ生_レ緣_レ。回_レ頭_レ十_レ有_レ餘_レ年_レ夢_レ。空_レ隔_レ幽_レ明_レ哭_レ墓_レ前_レ。

月照、名忍向。京都清水寺成就院之勤王僧。

江樓書感 (追弔愛妾死)

唐 趙

嘏(承祜)

獨_レ上_レ江_レ樓_レ思_レ渺_レ然_レ。月_レ光_レ如_レ水_レ水_レ連_レ天_レ。同_レ來_レ翫_レ月_レ人_レ何_レ處_レ。風_レ景_レ依_レ稀_レ似_レ去_レ年_レ。

悼 亡 (悼亡妻)

清 王子 禎(漁洋)

藥_レ爐_レ經_レ卷_レ送_レ生_レ涯_レ。禪_レ榻_レ春_レ風_レ兩_レ鬢_レ華_レ。一_レ語_レ寄_レ君_レ君_レ聽_レ取_レ。不_レ教_レ兒_レ女_レ衣_レ蘆_レ花_レ。

(蘆花) 孔門閔子騫、性至孝。早喪母。父娶後妻、生二子。衣以綿絮。惡子騫、衣以蘆花。父使子

騫御車。體寒失制。父察其故、欲出後母。子騫曰、母在則一子寒。母去則三子寒。母聞之、悔改云。

悼 伊藤公爵薨去

原六首

岸 富 仙

夙_レ獻_レ嘉_レ猷_レ奏_レ偉_レ功_レ。經_レ綸_レ一_レ世_レ仰_レ雄_レ風_レ。蓋_レ棺_レ論_レ定_レ休_レ詳_レ說_レ。六_レ十_レ九_レ年_レ只_レ奉_レ公_レ。

悼 幼 孫

廣 瀨 淡 窗

俄_レ然_レ成_レ喜_レ復_レ成_レ嗟_レ。朝_レ權_レ唯_レ開_レ頃_レ刻_レ花_レ。當_レ日_レ玉_レ環_レ藏_レ在_レ篋_レ。再_レ來_レ慎_レ勿_レ向_レ他_レ家_レ。

哭 妹

賴 山 陽

忽_レ得_レ凶_レ音_レ讀_レ復_レ疑_レ。秋_レ前_レ猶_レ有_レ寄_レ兄_レ詞_レ。形_レ容_レ自_レ覺_レ倍_レ枯_レ槁_レ。老_レ樹_レ相_レ連_レ唯_レ一_レ枝_レ。

枕上憶亡小女

恒 遠 精 齋

愁_レ枕_レ復_レ聞_レ過_レ雨_レ懸_レ。幻_レ華_レ一_レ瞥_レ忽_レ經_レ年_レ。不_レ知_レ今_レ夜_レ重_レ泉_レ路_レ。應_レ倚_レ何_レ人_レ膝_レ上_レ眠_レ。

奉_レ悼梨堂相公_一 二首。明治辛卯二月

松崎天胤

征韓議亂政艱哉。

聞說調停終作災。

踟躕誰承明相德。

山房忍聽雨聲哀。

中興攝政百圖全。一位光榮豈偶然。身客黃泉心鳳闕。忠魂日夜去朝天。

梨堂相公者、太政大臣正一位公爵三條實美公也。

谷口鹿洞曰、可謂能寫一條公心事者矣。

長野栗山曰、儘使公讀此詩、則當瞑目。

哭_ニ松本陸軍少佐_一 四首。明治丙午

吐石道人

一自皇威折暴秦。

恩惠既數二秋春。

幾萬貔貅盡振旅。

我兄何事獨忘津。

攀_レ前嶺_一又攀_レ前嶺_一。

扶_レ起_レ老親_一望_レ奉天_一。

奉天何處途千里。

暮雨蕭蕭春盡前。

陟_レ後山_一還陟_レ後山_一。

遠天花漠淚潛潛。

哀笛何處日將暮。

北風拂_レ袂_一月如彎。

不因_レ家事_一辭_レ王事_一。

夙以_レ斯身_一奉_レ九天_一。

一死酬_レ君臣_一節_一畢。

他生只在水晶蓮。

哭_ニ乃木大將_一 五首。明治壬子

同

昂昂氣宇仰如神。一死殉_レ君茲得_レ仁。不_レ獨吾邦柔儒士。警醒遍及五洲民。

不_レ惜斯生不_レ愛_レ錢。至言會聽古之賢。如今獨有_レ將軍在。眞個人中玉井蓮。

爲_レ臣不_レ管節尤堅。對_レ衆清廉亦率先。甲辰勳績唯號哭。一片丹心萬古傳。

善戰善謀文又武。求_レ之_レ史上_一匪_レ無_レ羣。至誠報_レ國誰如_レ此。楠氏以還唯見_レ君。

見_レ死如_レ歸_一況_レ爵勳。眞成忠烈老將軍。東西今古無_レ儔匹。親子夫妻盡殉_レ君。

哭_ニ鹿洞谷口先生_一 明治甲寅

同

惜_レ死愛_レ錢雙戒_レ之。五經拂_レ地不堪_レ悲。今春況復晨星落。破關揭_レ燈知_レ是誰。

有_レ人間_一岳飛_一曰、天下何時太平。飛曰、文臣不_レ愛_レ錢。武臣不_レ惜_レ死時太平。

謁_ニ精齋恒遠先生墓_一 大正乙丑

同

叨蒙_ニ慈教_一啓_ニ愚蒙_一。肅肅今看碑石豐。三十年前辭_レ膝下。戴_レ霜猶未_レ有_レ微功。

謁_ニ南溟先生墓_一 二首

廣瀬淡窗

欲_レ見_ニ李元禮_一。孤墳蕭寺中。唯餘松柏樹。稷稷起_ニ清風_一。

婦女知_リ龜井_ヲ。兒童誦_ス道哉_ヲ。寒山一片石。千淚墮_ツ莓苔_ニ。龜井道載號_ニ南溪_ニ。載載普通。

聞_ニ後藤甚五獄中計_一

藤田東湖

平生未_レ識_レ面。早已見_ニ其心_ヲ。忽聞_ニ獄中計_一。只有_ニ淚淋漓_一。

湖樓題壁

清厲

鶚(焚樹)

水落山寒處。盈盈記踏青。朱欄今已朽。何況倚欄人。(指亡妾)

松乘雜詩云、盈盈樓上女。皎皎當窗牖。

奉_コ悼_ス東鄉元帥_一。昭和九甲戌歲五月三十日薨壽八十八二首松崎天胤

沈默所_レ尊存_ニ那邊_ニ。凡流開_レ口直河懸。人生自古誰無_レ死。重若_ニ將軍_ノ絶_ニ比肩_一。

立_レ功如_レ旭既無前。崇_ニ德亦應_ニ齊_ニ古賢_一。俊偉何唯空_ニ一世_一。英靈廟食萬斯年。

年。

小見清潭曰、何其沈痛。何其哀勵。奉_コ悼_ス元帥_一。非_レ此不_レ稱。

第七章 劍舞及朗吟詩鈔

題_ス下不識庵擊_ニ機山_一圖_ニ

賴山陽

鞭聲肅々夜過_レ河。曉見_ニ千兵擁_ニ大牙_一。遺恨十年磨_ニ一劍_一。流星光底逸_ニ長蛇_一。

不識庵謙信大居士。機山信玄大居士とて、俱に表面佛門に歸して、剃髮後の居士號である。長蛇は、封家長蛇とて、信玄の飽くなく他國を侵略したるを形容したる語で、長い蛇や、大なる家は、幾ら食つても飽くことを知らざるに喩へたのである。

楓橋夜泊

唐張

繼

落_チ烏啼霜滿_レ天。江楓漁火對_ニ愁眠_一。姑蘇城外寒山寺。夜半鐘聲到_ニ客船_一。

寺院では普通に初夜の鐘と、晨朝の鐘とを撞く者で、決して夜半に撞く者ではない。其の他佛事があれば晝間でも撞くことあれど、夜半にはない。之は非常に朝早くから撞き出すから

一寸民間の朝寝坊から見ると、丸で夜半に撞くかのやうに感ずるのである。朝も三時頃から撞き始むるから。處が鐘の音は、初夜の鐘は諸行無常を告ぐるやうなれど、晨朝の鐘は、如何にも皎潔にして、垢一點塵半點をも留めざる如き神嚴崇高の感じを與ふる者である。殊に寒山寺と云ふから、骨身に浸み渡るやうな神祕な良い音が朝の寝てゐる時から聞ゆるとの事である。故に非常に愉快と云ふのである。

七尾陣中作

上杉謙信

霜滿^{チチ}軍營^ニ秋氣清^シ。數行^ノ過雁^ノ月三更。越山^{アヘ}并^セ得^{タリ}能州^ノ景。遮^{サモ}莫家^ノ鄉憶^ニ遠征^ヲ。
上杉謙信は、越後高田市の附近春日山に居城を築いて、漸次越中、加賀、能登と、敵を驅逐して領分を廣め、能登の七尾に滯陣の一夜、恰も九月十三夜に屬して、月色玲瓏たれば、勝利の意外には、かどつたのを喜びつゝ、やをら身を起して此詩を作つて朗吟したのである。○遮莫とは、さもあらばあれとて、人の勝手に仕す意味である。即ち郷里の妻子共が、吾れ吾れの遠く征伐に來てゐるのを心配して、思はゞ思へ、汝等の思ふに任す。予は實に愉快だ。此の能登に來て越中越後の地續きを月夜にうち眺むると、併せて一目の中に見ゆるのは、實に愉快だとの意。事實越中も能登も征服して併せ得たのであるから、斯く愉快の意を月色の

景に事寄せて詠出した者である。其の時謙信の得意や大に思ひ遣るべし。殊に軍上手の軍將が、文學にもたけてゐると云ふのが亦一の大なる誇りである。

題ニ太山道灌借^ル蓑^ヲ圖^ニ

新井白石

孤鞍^{ツイテ}衝^ク雨^ヲ叩^ク茅茨^ニ。少女^ハ爲^ル贈花^ニ一枝。少女^ハ不^レ言^ハ花^ノ不^レ語。英雄^ノ心緒^ハ亂^レ如^ク絲。

古歌に曰く、七重八重花は咲けども山吹の、みの一つだになきぞ悲しき。とあるから、少女が山吹の花を差し出して、生憎蓑がありませぬと、實の一つもない山吹を蓑一つもないと語路を働かせた風流である。○緒は音シ。ヨなれど、通俗にはチヨと發音してゐる。

失

題

橋本左内

殘月^{ウツ}滴露^{ホス}濕^ニ人^ノ袂^ニ。曉風^{イテ}吹^ク髮覺^ユ秋冷^ニ。忍^テ憫^ム大蛇^ノ當^レ道^ニ橫。拔^ク刀^ヲ欲^ク斬^ル老松^ノ影。

橋本左内、號を景岳と稱して、元は福井藩の儒醫なれど勤王家として又最も有名である。又普通に結句の拔刀を拔劔と書いて、劔を抜いて斬らんと欲すと吟ずれども、劔は仄宇、此處は平宇でなくてはならぬ。故に拔刀に改めたのである。併し起句も平仄は不整。

逸

題

無名氏

願ハハ賜ハハ尙方斬馬劍。快斫ケヤンカン姦ケイ佞ネイ幾多キタ臣。從來此事非ニ吾任ニ。我是吟花詠月人。

此詩は未だ作者を詳にしない。併し劍舞には必ず出る入門的の者である。○尙方とは、刀劍類を藏する所の場所の名である。

題ストキハ常磐雪中圖ニ

梁川星巖

雪灑ハソ、イデ笠檐リフエン風捲マク袂ヲ。瓜々ココ索モト乳ハ若爲情。他年鐵拐峰頭嶮。叱シツ咤タ三軍ニ是此聲。

常磐御前は、源義朝の妾で、今若、乙若、牛若を生んだ者である。義朝敗北するや、此の三子を携へて、雪中大和龍門の里に歸る時の圖に題した詩である。○鶴越の峻阪は、鐵拐が峰の南面に在る。

壁書

清狂釋月性

男兒テ、ヲツ立志出ニ鄉關ヲ。學若不レ成死ニ不還ヲ。埋ム骨豈無墳墓地。人間到處有ニ青山。

豈無を、豈に期せんやに作れる書物が、をりをりある。けれども、之はやはり豈に無らんやの方が宜しい。墳墓の地を、祖先の墓と見るから期せんやと主張するならんも、墳墓の地は文字の通り墓地で、何も祖先の墓地と限つたわけの者ではない。故に豈期せんやでは、無

論意味を爲さない。

訣別ス妻子ニ

雲濱 梅田源次郎

妻臥ヘシ病床ニ兒叫ヘサ飢ニ。一身直欲ニ掃ク戎夷ヲ。今朝死別兼ニ生別ト。只有ニ皇天后土知ル。

妻は小原信子と云ふ。又一本、一身を挺身に、今朝を即今に作つてある。雲濱は若州小濱藩の勤王家で刑死せられた時は、年四十四、正四位を贈らる。

江戸獄中作

鴨崖 頼三樹三郎

排ハイスル雲手欲ヲ掃ハント妖熒エウケイワ。失脚墮來ダシタル江戸城。井底癡蛙過ニ憂患ニ。天邊大月闕カケ光明ヲ。身ハ從ニ鼎鑊クワクニ家無ニ信ニ。夢斬ニ鯨鯢ケイニ劍有ニ聲ニ。風雨多年苔石表オモテ。誰題カセン日本古狂生。

頼三樹三郎は、頼山陽の第三子で、安政大獄に、吉田松陰や、梅田雲濱等と、俱に刑せられたる勤王家の第一人者である。鴨崖とも、又古狂生とも號す。年三十五、正四位を贈らる。

前兵兒

頼山陽

衣至リ肝カニ袖至ル腕ニ。腰間秋水鐵可シ斷ダツ。人觸レ斬リ人馬觸レ斬ル馬ヲ。十八結ニ交健兒社ニ。

北客能來將何酬。彈丸硝藥是臍羞。客若不屬。一好以寶刀。一加渠頭。

北客能來とは、薩藩の島津侯が關原の戦に西軍に加擔したから肥後に接近せし大口城に有名なる新納武藏守忠元を居住せしめて、肥後侯に對峙せしめたと云ひ傳ふ。由つて忠元は、士氣を鼓舞する爲に十首の數歌を作つて平素歌舞せしめたと云ふ。次の句は其中の一つである。肥後の加藤が來るならば、焰硝着に團子會釋。それでも聞かずに來るならば、首に刀の引出物。此の俚語を山陽は、前兵兒の中に北客能來云云と詠出したのである。

本能寺

本能寺。溝幾尺。吾就大事。在今夕。菱粽在手。併菱食。四簷梅雨天如墨。老阪西去備中道。揚鞭東指天猶早。吾敵正在本能寺。敵在備中。汝能備。

老坂在ニ山城。曰ニ老坂越。

敵備中云々とは、羽柴秀吉が毛利氏を攻めて備中に在るを謂ふ。之は本能寺にて光秀は克ち得たるも、直に秀吉の爲に攻殺せられたから、汝の敵は備中にこそあれ。其の方の備へは如何と。彼を擲擧した、文壇の戯事である。普通に溝の深さ幾尺ぞと吟ずれど、日本樂府の

元本には、やはり本文通りの三字宛の二句である。

棄兒行

雲井龍雄

斯身飢斯兒不育。斯兒不棄斯身飢。捨是耶不捨非耶。人間恩愛斯心迷。哀々不禁無情淚。復弄兒顔多苦思。兒兮無命伴。黃泉兒兮有命此心知。焦心頻囑良家救。欲去不忍別離悲。橋畔忽驚行人語。殘月一聲杜鵑鳴。

雲井龍雄は、羽前米澤藩士で、明治元年徴士と爲つて、京都に入り、幕府の爲に遊説頗る努めたれど、遂に捕へられて殺さる。年二十七。人各其主の爲に盡す。封建時代に在つては亦恕する所がなくてはなるまじ。

失題

西郷隆盛

不養虎兮不養豺。身是九州西一涯。七百年來舊知處。百二都城皆我儕。壓倒海南三尺劍。蹂躪天下七寸鞋。人如欲識余居處。長住鹿城千石街。(但シ平仄不整。) 島津藩は、日向、大隅、薩摩の三國を領有せし大藩にて、守禦の方針が、中央第一に非ずして、各地に小城廓を築造せしむ。之は三國の到る處に城があつて、各地守禦の任に當らし

めた故、合して一二箇城もあつたと云ふことである。然ればにや、鹿兒島市の本居城は、規模極めて狭少。決して他の大藩の者とは比すべからず。現今の第七高等學校の敷地は、元の城廓其の儘なりと云ふ。而して源頼朝の庶出の子孫として、中途斷絶しない。故に七百年來と曰ふのである。一番舊い大藩であつた。龜井南溟の詩にも其の百二都城の事が出てゐるから序に、

鹿兒島

誰家絲竹散空明。孤客憑樓夢後情。皎月南溟波不駭。秋高一百二都城。

龜井南溟

逸題

西郷隆盛

幾歴辛酸志始堅。

丈夫玉碎慚全。吾家遺法人知否。不爲兒孫買美田。

玉碎とは、古人の語に、寧ろ玉と爲つて碎くるとも瓦と爲つて全きを欲せずとある、を應用した名句である。○又輒全を、瓦全に作る者あれども、瓦は仄字、輒は平字。此處は平字の處である。

飲于某樓

伊藤博文

豪氣堂堂橫大空。日東誰使帝威隆。高樓傾盡三杯酒。天下英雄在眼中。

何れ書生時分の詩であるが、隨分氣概があつた者である。次の西郷の詩でも、亦同様の感がある。

偶成

西郷隆盛

建業唯期和聖頓。鬪爭獨冀奈波翁。中宵提劍望寒月。今古興亡兩眼中。

絕命詞

同

孤軍奮鬪突圍還。一百里程疊壁間。吾劍已摧吾馬斃。秋風埋骨故鄉山。

之は日向方面で官軍の重圍に陥つたのを、一方を切り開いて山越をし、漸く鹿兒島に歸り城後の城山に籠り、岩崎谷に歿せられたのである。

豫讓

無名氏

怒髮衝天眼如電。爛々直射襄子面。右携一劍左髯衣。三躍擊衣衣寸斷。悲風慘澹天日暗。警家君臣渾無色。吞炭漆身兩徒爲。一死聊以報智伯。

晉の豫讓は、智伯の臣。然るに智伯は趙襄子の爲に滅ぼされたれば、豫讓は、主君の仇敵

として趙襄子を狙ひ、炭を呑みて嘔と爲り、漆を塗つて癩となり、以て通路を待ちしも、遂に捕はれた。故に襄子の陣羽織を乞ひ受け、之を撃つて智伯の靈に謝し、以て斬殺を快受したとの事である。亦烈士たるを失はない。

題ニ兒島高德圖

齋藤 監物

蹈破千山萬岳煙。鸞輿今日到何邊。單裘直突虎狼窟。一七深探鮫鰓淵。報國丹心嗟獨力。回天事業奈空拳。數行紅淚兩行字。附與櫻花奏九天。

一本、直突を直入に作る。○兒島高德は、備後三郎と稱す。南朝方の忠臣である。後醍醐天皇が北條高時の爲に、心なくも隠岐に御遷幸の砌り、高德は之を途中にて、賊の警護中より奪ひ奉らんと欲し、播州舟坂山に伏兵して待ちたれど、鳳駕は山陰道に向つたと聞き、乃ち間道より美作の杉坂にて待たんとせしも、亦已に御通過後の事とて、衆を散去せしめ、己れ一人服を變じて尾行し、帝の、院の莊の館に入らるゝを知つて夜潜入し、庭前の櫻樹を削つて之に書して曰く、天莫空勾踐。時非無范蠡。と。翌朝帝之を熟視して、欣然として心に勤王の者あるを知り給へりと云ふ。

齋藤監物は、水戸の藩士で、彼の櫻田門外にて、伊井大老を斃したる十七士中の首領である。維新後、従五位を賜はる。年三十九。○兩行の字とは、前述の天勾踐の二句である。又踏破を、踏み破ると吟ずるのは、通俗的讀方、實は破は助辭ゆゑ、單に踏破すと音讀すべきであるけれども、今は一般に従ふ。

爾靈山高地占領

乃木 希典

爾靈山嶮豈難。男子功名期克難。鐵血覆山山形改。萬人齊仰爾靈山。

爾靈山とは、旅順口背面砲臺を築造せる所の二百三米突の高地である。故に二〇三を、漢語化して斯く綴つたのである。此高地占領の時、乃木大將の次男保典少尉は戦死したのである。而して長男の勝典中尉は、其れ以前南山の役に戦死せられた。抑も二〇三を爾靈山と雅言に改めた點は、實に乃木大將の偉大なる考案である。さしも難攻不落の旅順も、此の二〇三高地の占領から、急轉直下に陥落したのである。故に我軍の爲には、全く爾(汝)は靈なる山であつたのである。日本では汝と呼べど、彼の國では汝の事を爾と書けり。故に汝來たれと云ふ時に、ニイライと云ふ、ニイライは此の爾來である。現今個に作るは後世の變化である。

八月十八夜夢攻ニ某外國

藤田東湖

絶海連 檣十萬兵。雄心落落壓 胡城。三更夢覺幽窗下。唯有 秋聲似 雨聲。

藤田東湖は、水戸藩の儒士にして、而も亦勤王家として著名である。故に主君烈公と共に幕府の譴責を蒙り、一時江東小梅の水戸家別邸へ蟄居を命ぜられたので、此詩は其の時の作である。乙巳の歳八月とあれば、仁孝天皇の弘化二年で、徳川將軍は第十二代家慶である。今日を距ること八十九年前。然るに日清日露の兩大戰を経て、世界三大強國の一と爲れる今日の大日本帝國を、彼は既に夢に見てゐた譯である。總て神様とは、實に是の如き意味の者である。

偶 成

西郷隆盛

大聲呼 酒坐ニ高樓。豪氣將 吞 五大州。一寸丹心三尺劍。揮 劍先試倭奸頭。

西南戰爭の動機は、征韓論から始めて私學校生徒の暴舉に由つて爆發したれども、大西郷の心内には、やはり此の詩の如き意味が萌芽してゐたのかも知れない。劍を刀に作らば宜し。

大 楠 公

水戸烈公

豹死留 皮豈偶 然。湊川遺跡水連 天。人生有 限名無 竭。楠氏精忠萬古傳。

烈公とは、水戸中納言徳川齊昭の諡號で、義公光圀以來傳統の勤王大名である。而して大楠公の石碑を始めて湊川に建てたる者が、即ち此の祖先たる義公である。一門の忠義亦決して故なきに非ず。

楠 氏 墓

柳原前光

楠氏墓邊秋氣清。彷彿 古仰 英名。老杉留 得雄風 在。時間 千軍萬馬聲。

柳原前光は、明治戊辰の役、東海道先鋒總督で、維新後伯爵に叙せられ、元老院議長たりし名華族である。年四十四。

蒙 古 來

賴 山 陽

筑海颶風連 天黑。蔽 海而來者何賊。蒙古來。來自 北。東西次第期 吞食。嚇 得趙家老寡婦。持 此來擬男兒國。相模太郎膽如 甕。防海將士人各力。蒙古來。吾不怖。吾怖關東令如 山。直前斫 賊不 許願。倒 吾檣。登 虜艦。擒 虜將。吾軍喊。可 恨東風一驅附 大濤。不 使 血盡 膏。日本刀。

趙家の老寡婦とは、南宋最後の帝、名は昀と稱する時代の皇太后で、楊氏と曰ふ。南宋六代度宗帝の淑妃で、帝舅の親母である。趙とは宋の祖先が趙匡胤であるから、此の宋を趙宋と稱する。然るに帝舅は幼帝で、此の皇太后楊氏が政を聽いてゐたのである。其れが元の爲に終に滅亡せしめられたから。此に老寡婦云と曰つたのである。

相模太郎は北條時宗。○虜艦に登つて虜將を擒にした者は、伊豫の勇將對馬守河野通有で通有奮ひ前む。敵の矢其の左肘に中たるも、通有益々前み、我が櫓を仆して虜艦に架け、之に登つて虜將の王冠せる者を擒にして、その首を斬つた。

又日清戦争後此の詩に因んで、軍歌を作つた者があつて、一時最も盛んに上下擧つて歌つた者である。序に記述しよう。

元寇の歌 (當時ノ歌詞ニ由ツテ假名ヲ附ス)

四百餘州を擧る。

十萬餘騎の敵。

國難此に見る。

弘安四年夏の頃。

何を恐れん我れに。

鎌倉男子あり。

正義武斷の名。

一喝して世に示す。

多々良濱邊の夷。

そは何に蒙古勢。

傲慢無禮者。

共に天を戴かず。

出でや進みて忠義に。

鍛へし我が腕。

此處ぞ國の爲。

日本刀試めし見ん。

心筑紫の海に。

浪押しわけて行く。

丈夫武勇の身。

仇討ち歸らさば。

死して護國の鬼と。

誓ひし箱崎の。

神ぞ知ろしめす。

日本魂潔し。

天は怒りて海は。

逆まく大浪に。

國に仇を爲す。

十餘萬の蒙古勢。

底の藻屑と消えて。

残るは唯だ三人。

何日しか雲はれて。

玄海灘月清し。

泊天草洋

頼山陽

雲耶山耶吳耶越。水天髣髴青一髮。萬里泊舟天草洋。煙橫篷窗日漸沒。瞥見大魚跳波間。太白當船明似月。

天草洋は、肥後の西方天草島の西北外洋の名である。而して此の天草島の北方に、肥前南

半島地の島原がある。其の島原の、原の古城趾に、石田三成や小西行長の殘黨豪傑連が、天主教の神人と稱する天草四郎を奉じて兵を擧げ、徳川幕府に反對して、可なり激しき大戦争があつた來歴の處である。故に山陽が九州漫遊の折り、地理研究の側ら、天草洋に舟を浮べた譯である。而して天草騒動を象徴する爲に、大魚が波間に跳ると云ひ、又大白が月の如く明であつたなどと、兎角、兵氣に關する文字を使用したのである。兵は陰に屬し、大魚も大白も、俱に陰に屬する物象であるからである。實に名吟である。

藍關示姪孫湘

唐 韓愈

一封朝奏九重天。夕貶潮陽路八千。欲爲聖明除弊事。敢將衰朽惜殘年。雲橫秦嶺家何在。雪擁藍關馬不前。知汝遠來應有意。好收吾骨

湘江邊。

此の詩は、唐の韓退之が佛骨表を憲宗皇帝に上つて逆鱗に觸れ、直に南方八千里（支那里程）の潮州に貶せられた。其の時途中の藍關にて、此詩を作り、都から隋從して來た姪孫の湘と云ふ者に示したのである。

斯くして韓愈は、潮州に到り、僧の大嶺と懇意に爲り、少しは佛法も其の時に聞知したとの由。兎に角彼れ流謫後に、憲宗皇帝は、此の詩を見て、愛愍の心を起し、韓愈を直に赦免して、召喚せしめられたと云ふことである。所謂藝は身を助くるの一例に當る。又美濃の豪傑稻葉一徹が、織田信長から將に殺されんとした時にも、一徹が此詩の後聯二句を朗誦して解釋したる爲に、死を免かれた事も、近古史談中に出でる。然れば此詩は、作者自身の外、我國の一豪傑をも救助した譯である。併し之に反して佛骨表の如きは、最も佛理を辨知せざる、只だ一種の慷慨論たるに過ぎないのみの者である。

貧 交 行

唐 杜 甫

囊空手作雲覆手雨。紛紛輕薄何須數。君不見管鮑貧時交。此道今人棄如土。

管鮑とは、齊の管仲と鮑叔との二人である。之は極めて親友であつたから、其の例に善く出さる。一例を擧ぐるならば、彼等兩人が商賣して、其の利益を管仲が多く取れども、鮑叔は怪まずして曰く、彼は貧なるが故に多くを取ると。而して遂に其の管仲を主君桓公に推

擧して、宰相と爲らしめたから、貧時の交を君等世間の者は見たことはないかと、詠歎したのである。

題長安主人壁

唐張謂

世人結交須黃金。黃金不交不深。縱令然諾暫相許。終是悠悠行路心。

勸學

宋朱熹

少年易老學難成。一寸光陰不可輕。未覺池塘春草夢。階前梧葉已秋聲。

夜下墨水

服部南郭

金龍山畔江月浮。江搖月湧金龍流。扁舟不住天如水。兩岸秋風下二州。

此詩は起承の二句が面白い。而して又極めて流暢である。○金龍山は東京淺草の金龍山大聖歡喜廟の事である。二州とは武藏と下總とである。併し隅田川は武藏一國中を流れて、武總二國間を流るる者は、國府臺下の江戸川である。故に隅田川を下るに二州を下るでは、少し無理である。併し大體に於いて西方は武州、東方は總州と云ふ位の者ならん。且つ或は昔時河東が總州であつたかも知れない。其の證據には、兩國橋と云ふ者が、儼然としてあるか

ら。兎に角此の詩の出來た當時は、非常に喧傳せられて、上下擧つて朗吟したとの由なれども、山陽などは、餘り衰めなかつた。其れは意味が深くないからである。併し極めて流暢で何等の苦澁なく、善い氣分を興ふる所の長所は、没却することは出來ない。

過零丁洋

宋文天祥

辛苦遭逢起一經。干戈落落四周星。山河破碎水漂絮。身世浮沈風打萍。皇恐灘邊說惶恐。零丁洋裏歎零丁。人生自古誰無死。留取丹心照汗青。

文天祥は、宋國が元からの壓迫を蒙つて、非常の國難であるから、其れに當つて經書を講ずる書生から起つて、辛苦經營したが、兵亂は打ち續いて落落と亂れて早や四箇年と爲り、我が宋國の山河は次第に打ち碎かれ攻め取られて、恰も水が綿を漂はしたるが如く、我身も亦安定を得ず。或は浮きつ沈みつ、恰も亦風が水草を打ちつけて一定せしめざるやうである故に彼の皇恐灘と云ふ早瀬を通過しては、其の名の如くに惶れ恐るゝ心を起し、又此の零丁洋と云ふ海洋を通過しては、我が身の零丁を歎息すと、土地の名に因つて心情を激發したのである。併し人間は誰れも一度は死ぬる。然ればせめては赤心の誠なりと此世に留め置いて

歴史上に其の名を遺したいとの意。○汗青とは、又殺青とも謂つて、書物の事である。昔は竹簡とて、青竹を火にあぶりて油を抜きて札と爲し、字を書いて、韋で綴つた者である。故に汗青は竹から汗を出ださしむる意。殺青は竹の青色を殺す意。紙は後世の製造である。

衣帶中之贊

文 天 祥

孔曰成仁。孟曰取義。惟其義盡。所以仁至。讀聖賢書。所學何事。而今而後。庶幾無愧。

之は文天祥が、元に降伏せずして殺された時、彼れの衣帶を調べたれば、此の贊が書き記してあつたと云ふことである。名士の心掛と云ふ者は、實に神の如き者である。○孔曰孟曰とは、論語卷四、衛靈公篇に

子曰、志士仁人、無求生以害仁。有殺身以成仁。

とあり。又

孟子卷四、告子上篇に、

孟子曰、魚我所欲也。熊掌亦我所欲也。二者不可得兼。舍魚而取熊掌者也。生亦

我所欲也。義亦我所欲也。二者不可得兼。舍生而取義者也。とある。聖賢の教と云ふ者は、實に是の如き者である。

又明治維新前勤王の諸士は、悉く文天祥などの是の如き護國的文學に因つて精神を養はれた者である。

元史に、世祖（忽必烈）皇帝十五年、張弘範を以て都元帥と爲す。六月弘範の兵五坡嶺を襲ひて文天祥を獲たり。弘範其の縛を釋き、客禮を以て之を見る。（中略）十九年十二月、宋の信國公文天祥を殺す。天祥燕（元の都）に留まること三年。帝乃ち天祥に諭して曰く、汝宋に事ふる所以の者を以て我れに事へば、當に汝を以て相と爲すべしと。天祥曰く、天祥は宋の宰相たり。安ぞ二姓に事へん。願くば之に一死を賜へよと。帝猶未だ忍びず。遽に之を廢き、左右を退け力贊して己れに従はしむ。天祥服せず。帝乃ち有司に詔して、燕京の柴市に殺すと。此の滯燕三年の間に例の土窟内にて具に辛酸を嘗め、彼の有名なる正氣の歌を作つたのである。併しそれは長篇で、且つ故事が多いから、此鈔には省略する。○有名なる元寇の亂は、此の前年即ち十八年八月の出來事であつたのである。

初到建寧賦詩并序

宋謝枋得

魏參政執拘投北。北行有期。死有日。詩別妻子良友良朋。
雪中松柏愈青青。扶植綱常在。此行天下久無龔勝。深。人間何獨伯夷清。義
高便覺生堪捨。禮重方知死甚輕。南八男兒終不屈。皇天上帝眼分明。

又元史に、世祖の二十五年四月宋の信州謝枋得を徵す。辭して至らず。枋得、書を侍御史程文海に遺つて曰く、某死せざる所以は、九十三歳の母の在るを以てのみと。翌二十六年四月、福建の參知政事魏天祐、謝枋得を執へて燕に至る。屈せず。自ら餓死す。枋得死を以て自ら誓ひ、食はざること二十餘日。死せず。乃ち復た食ふ。惟だ少蔬果を茹ふのみ。數月を積んで困殆。四月朔燕に至り、宋の太后及瀛國公の所在を問ひて再拜慟哭し、疾むこと甚だし。留夢炎醫をして藥を持ち、米飲に雜へて之を進めしむ。枋得怒つて之を地に擲ち、食はざる者五日にして死す。子定之、骸骨を護り信州に歸葬すと。○支那でも昔は是の如き名士があつたのである。

綱常とは、三綱五常とて、人倫の大道を謂ふ。君は臣の大綱たり。父は子の大綱たり。夫

は婦の大綱たり。之を三綱と曰ふ。仁・義・禮・智・信・之を五常と曰ふ。○龔勝の潔とは、漢書に、龔勝は漢の彭城の人、三たび孝廉に擧げらる。哀帝の時、徵されて諫議大夫と爲る。王莽政を乘るに及び、老を告げて郷に歸る。莽使をして印綬を奉じ、安車駟馬にて之を徵し、上卿に拜せしむ。勝曰く、誼豈に二姓に事へんやと。遂に食はずして死す。謝枋得とは善き一對の名士である。故に潔しと云ふ。○伯夷の清は、世間周知の事であれど、念の爲に略述せば、

史記に、周の武王、殷紂を伐ち、西伯の木主を載せて以て行く。伯夷叔齊、馬を叩き諫めて曰く、父死して葬らず、爰に干戈に及ぶ。孝と謂ふべきか。臣を以て君を弑す、仁と謂ふべきかと。左右之を兵せんと欲す。太公曰く、義士なりと。扶けて之を去らしむ。王既に殷を滅し、天子と爲る。伯夷叔齊之を耻ぢ、周の粟を食はず。首陽山に隠れて、薇蕨を採り以て食と爲し、遂に餓死したりと云ふ。

南八男子とは、唐の南霽雲の事である。韓愈の張中丞傳後序に

城陷。賊以刃脅降。巡。巡不屈。即牽去。將斬之。又降霽雲。雲未應。巡呼雲曰、南八、男兒死耳。不可下爲不義。雲笑曰、欲將以有爲也。公有言。雲敢不死。即不屈

叛賊安祿山の爲に、張巡も南蠻雲も、俱に屈せずして殺されたのである。故に謝枋得が以て自分を比するには、亦最も適當なる例である。

長相思二闕。品川酒樓留別東都諸賢友。菅茶山

風輕輕。雨輕輕。雨歇風恬。鳥亂鳴。此朝發武城。人含情。我含情。再會何年笑相迎。撫躬更自驚。

又

南隣歌。北隣歌。歌吹叢中閱歲華。忽逢桃李花。朝經過。夕經過。伴侶多於故國多。奈斯別思何。

楠公墓下作 平野五岳

大丈夫心唯一忠。凜然義烈徹蒼空。身雖已死心不死。七生滅賊我事終。肅肅祭神如神在。聖代恩華酬舊功。今日國無兵戈苦。村村有酒民意豐。休說五百五十年前事。楠公廟下醉春風。

後醍醐天皇の延元元年五月正成戦死せしより、昭和九年五月に至れば、正に五百九十八年に爲る。

楠公贊 谷鐵臣

萬古金剛山。千秋湊河水。公清水不如。公高山莫比。

谷鐵臣は、江州彦根藩の勤王家。如意山人と號す。初め藩の參政と爲り、維新後元老院議官に任ぜらる。

指揮福井丸再赴旅順閉塞。錄舊作贈石田機關長。

廣瀬武夫

正氣歌

死生有命不足論。鞠躬唯應酬至尊。奮躍赴難不辭死。慷慨就義日本魂。一世義烈赤穂里。三代忠勇楠氏門。憂憤投身薩摩海。慷慨就義小塚原。或爲芳野廟前壁。遺烈千年見鏃痕。或爲菅家筑紫月。詞存忠義不知冤。可見正

氣滿乾坤キクマンケンケン。一氣磅礴萬古存イツキハツボクマンコソクン。嗚呼正氣畢竟在ウフシヤウキキヤウニシニニ誠字ニシヤウ。嗚呼何必多言ウフナラズニシヤウ。誠哉ニシヤウ誠哉ニシヤウ。
斃不シヤウ已ニシヤウ。七生シヤウ人間ニシヤウ報ニシヤウ國恩ニシヤウ。
七生報國シヤウ。一死心堅ニシヤウ。再期ニシヤウ成功ニシヤウ。含笑ニシヤウ上ニシヤウ船ニシヤウ。

流石は廣瀬中佐。回顧せば當時彼は海軍少佐であつた。軍務の暇、何を以て是の如き雄大なる文詞を綴り得たるか。實に驚嘆に堪へない。世以て軍神と崇むる所以。洵に理由十分である。例に因つて故事だけを略記すると、

赤穂里とは、赤穂四十七士の快擧を指し、三代忠勇は、楠正成、正行、正儀の父子三代を謂ふ。投身は、京都清水寺成就院の勤王僧月照が、西郷隆盛と相擁して、薩摩の錦紅灣に入水したるを謂ふ。老僧と思ひしに、安政五年十一月十一日歿す、年四十六とある。正四位の御贈位を受けてゐる。

小塚原とは、安政大獄の爲に、幕吏に捕はれ、城北小塚原に刑死せしめられたる、吉田寅次郎、頼三樹三郎、梅田源次郎等、勤王の諸名士を指す。梅田は雲濱と號して、其時年四十四。頼鳴崖は三十五。吉田松陰は二十九歳であつた。何れも正四位を贈られた。

芳野廟前壁は、楠正行が四條駿の大戦に赴かんとして吉野行宮に詣り、更に先帝の御廟に謁して、如意輪堂の壁に、一族郎黨の主なる者の姓名と、一首の和歌とを矢鏃にて書き込みたるを謂ふ。故に見鏃痕と云ふ。

かへらじとかねて思へば梓弓アツサユミ、なき數にいる名をぞ留むる。

筑紫月は、右大臣菅原道實が、時平の纒に逢うて筑前太宰府の權の帥に貶せられたるを謂ふ。九月秋思の詩を賦して、恩賜御衣今在レ此を詠せし如きは、全く冤罪をも忘れたる、廣大なる赤心の閃めきである。

磅礴は、正氣が充ち塞がる意。

尙正氣の歌は、前述の文天祥にも、又藤田東湖にもあれど、俱に長くして悉くが故事づくめ故、本鈔中には省略した。此外朗吟すべき名篇佳章は澤山あれど、餘り長篇な者は皆略することにした。又本書中の作例にも朗吟すべき名篇は少なくないから、自由に選んで日夕朗吟して戴きたい。

曾我兄弟復讐圖

村上佛山

富岳嵩高天下稀^{スウコウ} 比^レ之^ヲ君心^ニ一何卑^ニ 富岳氷雪照^ス千古^ヲ一爭^ニ若君心^ノ 涅不^レ 緇^ヲ
 鎌府將軍狩^{リス}岳麓^ニ 八州騎卒如^ク雲隨^フ 十郎五郎俱距躍^ス 角^ノ倚豈在^レ爭^ニ野塵^ニ 不^レ知^ス
 今夕是何夕^ノ 晏天假^レ我復讎^ノ時^ヲ 連營雨^ク暗^ク柝聲寂^ク 直穿^ニ虎穴^ニ斬^ル虎兒^ヲ 霜刃貫來^ル
 血^{ケツ}燭^ロ 腥風颯颯捲^ク旌旗^ヲ 能使^ニ先人^ヲ釋^ス冤恨^ヲ 身爲^ニ脯醢^ニ亦何辭^ス 同胞同心又^レ
 同死^ス 將軍面視^ニ應^ニ怛怛^ニ 芳野風雪衣川月^ヲ 九郎紅淚濕^ニ鐵衣^ヲ

崧高は、詩經卷七崧高篇に、崧高維嶽。駿極于天。註、崧、山大而高者。
 涅不^レ緇は、論語卷四陽貨篇に、子曰、不^レ曰^レ堅乎。磨而不^レ磷。不^レ曰^レ白乎。涅而不^レ緇。

距躍は、左氏傳に、距躍三百。曲踊三百。角倚は、左氏傳に、晉人角^レ之、諸戎倚^レ之。
 梁川星巖曰、以^ニ富岳^ニ起^ル頭、以^ニ芳野^ニ衣川^ニ結^ル尾。其用^ニ地名^ニ尤妙。
 筱崎小竹曰、讀^ニ同胞^ニ二句^ニ、不^レ感非^レ人也。
 西鼓岳曰、說^ニ十郎五郎^ニ、遂至^ニ九郎^ニ。意匠極巧。
 叱石曰、眞成詠歎。所以詩名不^レ空也。

涅不^レ緇とは、黒く染めても黒くならぬと云ふこと。○距躍とは躍り上がること。○角倚は鹿を倒すに前からは角を取り、後からは足を取ること。○脯醢とは脯は乾肉、醢は肉醬。怛怛は愧づる。○芳野は義經一時吉野山に匿れ、衣川は彼處にて戦死したのである。

辭 世

木村重成

殺氣衝^ク天風雨急^ク 兩軍蹙處壓^ス雷音^ヲ 功名豈假夷吾力^ヲ 節義須^レ知召忽心^ヲ 泰岳何^レ
 當君命重^ク 滄溟未^レ及主恩深^ク 結^レ纓欲^レ死^ス 孤城下^ニ 聊訴^ニ哀情^ニ 此一吟^ス

木村長門守重成は、大阪城の豊臣秀頼に仕へて、十萬石諸侯の列に加へられた文武兼備の名臣であつた。大阪冬と夏との兩度の役に奮戦し、最後の夏の陣には、愈よ意を戦死に決して鬢の中に名香を包み、且つ盛装して出陣し、激戦して大に徳川勢を難まして、遂に戦死した。時に年廿五。而して彼の首が家康の陣に違するや、家康家臣に命じて彼の鬢を解かしめた。解けば果せるかな名香を包めり。依つて家康慨然として大に感じて曰く流石は長門守重成である。古歌に曰く、

梅が香を櫻の花に香はせて
 柳の枝にさかせてしがな。

とあるが、實に重成の如きは此の歌の如き名士である。汝等厚く之を葬れよと命じて、感涙に咽ばれた

と云ふ事である。さもあらん。今此の辭世の詩を見ても、如何に彼が非凡の士であつたかが大に偲ばれる。廣瀬中佐と云ひ、乃木大將と云ひ、武あり文あることは、前章既に記載してある如く、而も重成に於ては七言の律詩である。律詩は漢詩専門家でも難事とする所の者である。其れを戦死前に作り辭世として遺すなどは、全く傑出した英物である。而も芳賀博士編纂の人名辭書には、重成の歳は二十一とある。吾れ吾れは其の何れが眞の年なるかを知らない。兎に角日本外史を繰れば、重成槍を揮ひ、挺んで進む。向ふ所皆靡く。敵將山口重信等三十餘人を斬る。而して其の(重成)兵死傷略ぼ盡くとある。何と勇ましき限りではあるまいか。次に詩の故事を略解せば、

夷吾とは、支那春秋の世の齊の大宰相管仲の字である。齊の桓公は、此の管夷吾の助力に因つて天下の大名頭と爲つたのである。召忽とは、齊の襄公の弟公子糾の忠臣である。襄公卒して御家騒動の時、公子糾は兄弟の小白(桓公)と競争して戦ひ、其の役に召忽は戦死した。故に木村重成も、自ら以て此召忽に比して節義須く知るべし召忽の心と詠じたのである○秦岳は大嶽○滄溟は大海○結纒とは、孔子の高弟子路の故事である。子路は衛の公子蒯聵に仕ふ。然るに蒯聵其子の輒と争ふ爲に、子路は此の難に與つて、輒の臣が戈を以て子路を撃つたれば、纒とて冠の紐を断ち切つた。すると子路曰く、君子は死すとも冠は免がずとて、纒を結んで死んだと云ふ事である。故に今重成も、子路の冠の紐を結んで戦死した如く、自分も亦禮義を守つて此の大坂孤城の下に死せんと欲すと綴つたのである。文あり武あり勇

あり。死すとも亦死骸を汚さずと云ふ。徳川家康が大に感心したのも尤もなわけである。大坂城も、初めから大忠臣の片桐且元に全權を任せたらば、豊臣氏の天下は尙ほ尙ほ長久なりしに、肝腎の淀君が、片桐を信用せずして、大野治長、及び弟の治房と云ふ二姦臣を寵した爲、重成の如き、又眞田幸村、後藤基次の如き、大豪傑ありしも、大阪の大城は、冬と夏との二大戦の許に紛蓋せられ終はつたのである。

附記

森槐南曰く、杜甫が花卿に贈る錦城の詩は、音節の美、太白の清平、少伯の奉帚、王之渙の黄河遠上等の篇に譲らず。當時盛んに艶唱したるを見ると。

贈花卿

唐 杜甫

錦城絲管日紛紛。半入江風半入雲。此曲祇應天上有。人間能得幾回聞。

清平調詞 三首

唐 李白(太白)

雲想衣裳花想容。春風拂檻露華濃。若非羣玉山頭見。會向瑤臺月下逢。

羣玉山、西王母所居。瑤臺、亦仙女所棲云。

二

一枝濃艶露凝香。雲雨巫山枉斷腸。借問漢宮誰得似。可憐飛燕倚新粧。

趙飛燕、漢成帝之寵姬。

三

名花傾國兩相歡。常得君王帶笑看。解釋春風無限恨。沈香亭北倚欄干。

長信秋詞 長信、宮名。

唐王昌齡(少伯)

奉帚平明金殿開。且將團扇共徘徊。玉顏不及寒鴉色。猶帶昭陽日影來。

昭陽、舍名。帚、同箒。

涼州詞 涼州、邊塞之國名。

唐王之渙

黃河遠上白雲間。一片孤城萬仞山。羌笛何須怨楊柳。春光不度玉門關。

玉門關、支那最北西之關門。

又曰く、清の王漁洋は、王維の渭城朝雨、李白の朝辭白帝、王昌齡の奉帚平明、王之渙の黃河遠上を以て壓卷と爲す。唐の世を終るまで、絶句は亦此の四章の右に出づる者なしと。

送元二使安西

唐王維

渭城朝雨浥輕塵。客舍青青柳色新。勸君更盡一盃酒。西出陽關無故人。

煇煌郡壽昌縣西、有陽關。西北有三玉門關。

早發白帝城

李白

朝辭白帝彩雲間。千里江陵一日還。兩岸猿聲啼不住。輕舟已過萬重山。

自白帝城至江陵、其間千里。(支那里程、六丁一里)

又曰く、明の李滄溟は、王昌齡の秦時明月を以て壓卷と爲し、王鳳洲は、王翰の葡萄美酒を以て壓卷と爲す。是れ滄溟鳳洲は氣を以て主と爲し、漁洋は神を以て主と爲すと。

從軍行

王昌齡

秦時明月漢時關。萬里長征人未還。但使龍城飛將在。不教胡馬度陰山。

飛將、漢李廣。

涼州詞

王翰

葡萄美酒夜光杯。欲飲琵琶馬上催。醉臥沙場君莫笑。古來征戰幾人回。

尚序に本書作例中より其の二三を列擧するならば、

桂林莊雜咏示諸生 原四首

休道他鄉多苦辛。同袍有友自相親。柴扉曉出霜如雪。君汲三川流。我拾薪。

松川北渚曰、此爲三絕句厭卷。

萱茶山曰。眼前韻事、人未道及。

歌舞村觀音堂

同

歌舞山前春正深。幾家兒女養觀音。綠雲誰截挂高處。中繫萬條千縷心。

京寓小詩 (聞雁) 原十首

梁川星巖

萬瓦霜寒殘月明。相呼相喚過高城。好教下十丈塵中客。夢落江湖聞鷓聲。

雨中送春

清袁隨園

東風吹雨洒雕輪。楊柳依依欲斷魂。真箇送春如送客。滿山花草有啼痕。

總て唐・宋・明・清の大家の作は、孰れも劣らず、朗誦すべき佳篇のみである。此には其の代表的の一首を掲げて、以て本書の終末と爲す。

新編漢詩自由 (畢)

錄蕪詩以代跋

叱石山人歌

松崎天胤

老松蟠屈雲自橫。金華峰頭茅屋清。颯風有時起浩濤。謾謾聲作打岸聲。下有頑石白累累。黃氏初平其樂只。伯兄問羊在那邊。執鞭叱石石盡起。其角澱澱搖尾來。乍上阿丘或澗水。君不見叱石山人聊歸佛。欲牧無量民頑質。調御何嘗勞心神。禪法自有初平術。期矣他日叱叱出吾州。燈籠露柱點頭不。

小見清潭曰、吳師道詩曰、學詩渾似學參禪。頭上安頭不足傳。跳出少陵窠臼外。丈夫志氣本衝天。叱石山人學詩之意、卽亦是也。

新編漢詩自由

寒山行旅圖

同

寒谷漸涉還峰巒。草枯石出斜陽殘。須臾凜冽朔風起。樹枝如鏹聲更酸。凹凸之蹊亦冰結。跋涉偏恐行路難。行路是難何艱脆。事與志違淚闌干。闌干闌干淚宜濺。斃而後已始得歡。甘脆常滿勞者舌。情遊之士天奪餐。請看春園花似錦。此花曾經三冬寒。

清潭曰、尋常題目。所歸在戒導。可以示青衿。青衿書諸紳可也。

昭和九年八月五日印刷
昭和九年八月十日發行

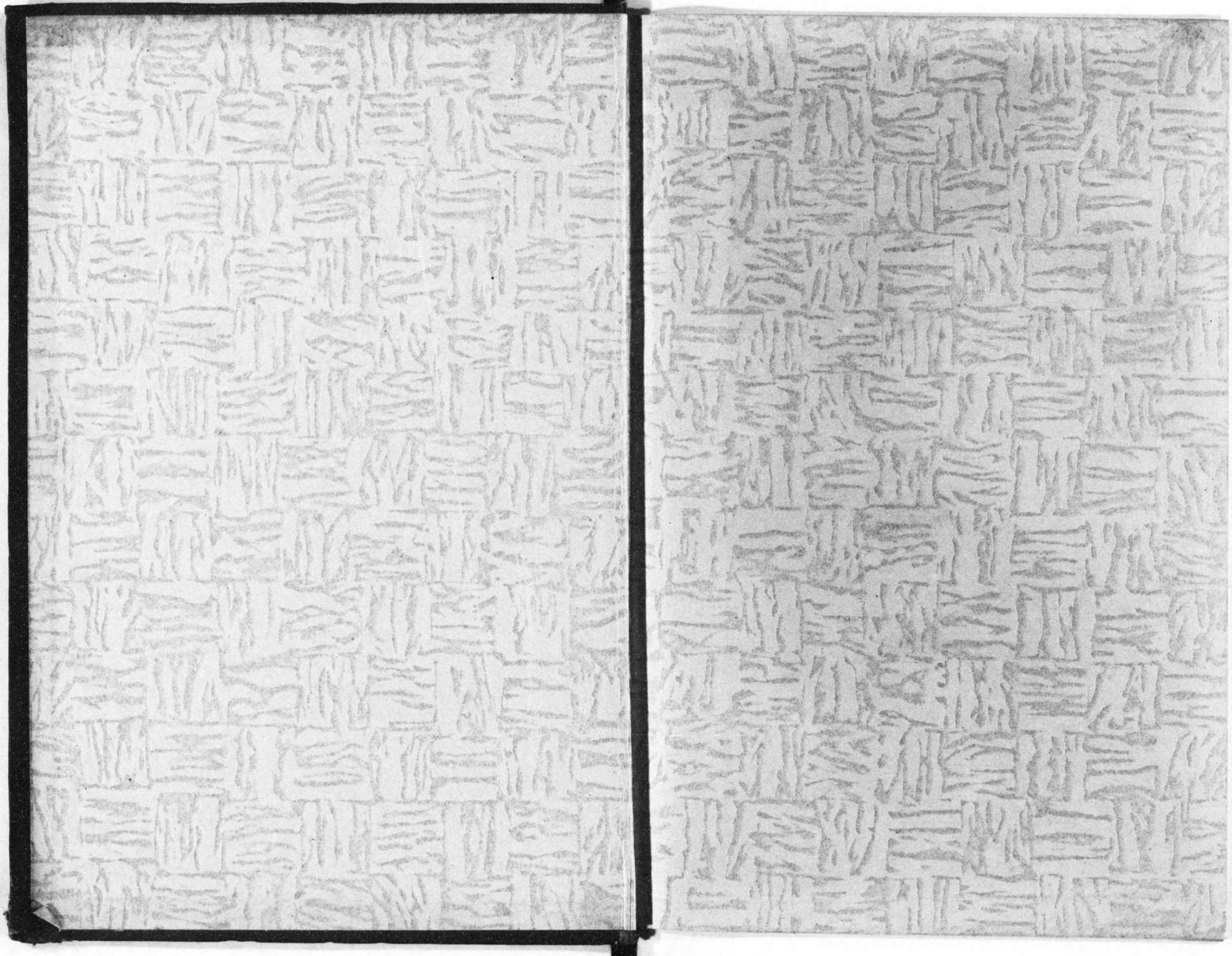
【定價金參圓】

新編漢詩自由

不	許
復	製

著作者 松崎覺本
發行者 東京市麴町區有樂町一丁目二番地三 松下長平
印刷者 東京市荒川區三河島町五ノ九三三 天野喜子三郎

發行所 東京市麴町區有樂町一丁目二番地三
電話銀座五百九十九番
振替口座東京三七八三八番
西福田町一番地 株式會社
日比谷出版社
取次所 富文館



終

